

新訳 機動戦士〇ガンダム

なかのあずま

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

宇宙世紀0088、ハマーン・カーン率いるアクシズがネオ・ジオンを名乗り地球圏の制覇に乗り出していた頃、遙か辺境のコロニー、カピラバストウでは水面下で一つの計画が進行しつつあった。

カピラバストウに住む少年タロ・アサティは戦渦に巻き込まれ、変貌を遂げていく事になる。

※ZZ放送前に月刊誌OUTに掲載されたパロディ企画の画像を見て書きはじめました。

後に連載された小説は読んだ事がございません。

pixiv様、2.novelist.jp様にも投稿しております。内容は同じです。

よろしく願います。

目次

第0話	闇のニュータイプ	1
第1話	オーアウター〜First order	4
第2話	ロストシティのタロとファナ〜Under the sky	22
第3話	パトリシア〜Limoné Patricia Pluk	35
第4話	アシカ出撃〜team sea Lion	47
第5話	無題	59
第6話	胎動〜Fetal movement	71
第7話	リボー・コロニーにて・・・〜chasing Rai	85
第8話	Out of sight	107
第9話	gear is Neutral	121
第10話	黄昏の渦〜Twilight tourbillon	140
第11話	アベニールをさがして	158
最終話	光〜space Light	176
エピローグ	ビギニング	213

第0話 闇のニュータイプ

「逃がすな！ぜったいに捕えろ！」

ダイアズ・スーンはコックピットのディスプレイに映るスペースデブリの光景に恐怖した。デブリの影から来る粒子が、いつこの身を焼くともわからないからだ。

モビルスーツ ガルスFを駆り、分隊を率いてはいるが、宇海に逃げた魚を捉えるのは至難の業である。

モビルスーツの索敵レーダーはミノフスキー粒子の妨害により最早意味をなしていない。そんな状況下でデブリ群の中にいれば、目視での戦闘すら困難なのは想像に難くない。

『ファンネルッ！』

死と隣り合わせからか、そのような幻聴が聴こえた瞬間、ガルスFの四肢は粒子に断絶され、コックピットのモニター正面には粒子の発射口が映っていた。

「え．．．？」

それが何かを認識する前に光がコックピット内を満たし、ダイアズの意識は肉体と共に蒸発した。

≠

「はあっはあっ」

膨れ上がった様な上半身とその割にアンバランスな細い脚、そしてそれが25メートルもあれば並みのモビルスーツではないの是一目瞭然だろう。

プロトタイプ・キュベレイ

それがターゲットであるモビルスーツの名称だ。それを操るのは《パトリシア！》と呼ばれる女

《なにも怖くないから！帰っておいで！》という声もミノフスキー散布下では彼女には届いていない。

「推進剤がもうない．．．ここまでかな．．．」

希望は尽き、彼女の逃走劇はここで終わりを告げることかと思われたとき

「あれは・・・」

彼女の目には希望が映っていた。

「補給・・・艦・・・？」

≠

人が、宙に人工の島を作り半世紀以上もの時が流れた。かつて宇宙に想いを馳せた人々は時に『人類の進歩と調和』などと謳ったこともあったが、宇宙に進出した彼らにはまだまだ遠い未来のことだった。

宇宙世紀0079、地球から最も遠く離れた宇宙都市サイド3はザビ家の下、ジオン公国を名乗り、地球連邦政府に独立戦争を挑んだ。その戦いは後に一年戦争と呼ばれ、地球に住むアースノイド、地球外の月面都市やスペースコロニーに住むスペースノイドの総人口の約半数を死に至らしめ、ジオン公国の敗北で幕を閉じた。

その後も、ジオン残党軍が度々地球連邦政府へ戦いを挑み、無惨に散っていった。

これを見かねた連邦政府は『ジオン残党狩り』を名目とした精鋭特殊部隊『ティターンズ』を設立。

しかしその実態は、毒ガスなどを用いてスペースノイドを統率する無秩序なものであった。これに対し地球連邦軍准将ブレックス・フォーラが反ティターンズ、並びに反地球連邦組織『エウーゴ』を立ち上げ、ジオンの敗北から7年、地球圏は連邦軍内部の戦争へ突入した。

その間もジオン残党はザビ家の忘れ形見、ミネバ・ラオ・ザビを掲げ、マハラジャ・カーンのもと勢力を拡大させていた。

やがてマハラジャが没し、娘のハマーン・カーンが実権を握ると、ジオン公国残党は『アクシズ』を名乗り、エウーゴとティターンズの間、に第三勢力として参入した。

後に『グリプス戦役』と呼ばれるこの戦いは、最終的に三つ巴の戦いとなり、ティターンズの敗北という形で終結。

アクシズは『ネオ・ジオン』と名を変え、地球連邦政府に再び戦いを挑もうとしていた。

サイド0、かつて地球と月の間に位置し、宇宙開拓時にはシリ

ダー型、バナール型、トーラス型などと呼ばれる様々なタイプのスペースコロニーがここで試験運用されていた。

その内の島一号バナール型と呼ばれる球体型のコロニー、カピラバストウは開拓が進むにつれ次第に火星圏へと追いやられていき、人類の新たな希望ともてはやされたことも今は昔、いつしかその存在は闇に葬られ、見捨てられたコロニーとなった。

宇宙世紀0088、このコロニーは今や敗残兵や宇宙流刑者、漂流者の行き着く場所となり、ジオンの残党兵までもが流れ着いていた。或る男がいた。

カーン・Jr.、アクシズ及びネオ・ジオン実質指導者であるハマーン・カーンの弟を名乗り、カピラバストウ内部で密かにジオン残党勢力を集結させていた。

第1話 Oーアウター〜First order

「そろそろ圏内に入る、気を抜くなよ！オスカ、マーカー！」

一つの小型艦艇が、カピラバストウコロニー近づいていた。

「無論です！」

「しかし艦長、いくら僻地だからってこれだけで大丈夫ですかね？」

オスカと呼ばれたオペレーターは、小型艇マイクロ・アーガマ単体で向かうことに不安を感じていた。

「今回はあくまで偵察だから大丈夫！こっちにはいざって時のZガンダムMk-IIIもあるんだから！」

マイクロ・アーガマの艦長は些か楽観的である。

金髪の天然パーマが特徴的な彼は一年戦争時代、かつて地球連邦軍を勝利に導いたホワイトベース隊の一人であり、オペレーターのオスカ、マーカーと共に一年戦争を生き抜いた過去を持つ。彼の名はジョン・ジョンといった。

「ブライトさんの頼みを断れないだろ？」

ブライト・ノア、ホワイトベースの艦長を務めた男であり、今はエウーゴの一員としてアーガマ隊を率いている。彼らにとつては恩師ともいうべき人物である。

そんな彼が、火星圏の方で不穏な動きがあるとの知らせを受け、戦友のオスカ、マーカー、そしてジョブ・ジョンに自身の代わりとして依頼したのであった。

コロニーの入り口である港が確認できると

「ジム・セークヴァ、2機発進してくれ！」

「了解！」「行きまーす」

2機のジム・セークヴァが先行してコロニーへ入港した。

≠

ロストシティ、カピラバストウコロニー第13地区にある中心街宇宙塵を加工し、つぎはぎ状態でなんとかもたせているコロニーで

まともなインフラ設備など整うはずもなく、中心街と銘打ってはいるものの実体は殆ど廃墟の街と化している。最も栄えている中心街ですら土埃の舞う中を人々が行き交う有様だ。

食料などの生活必需品といえばコロニー完成当初に備蓄されていた莫大な非常食と、どこからか定期的に来る補給艦の配給が頼りだった。

とはいえ、コロニーと言う閉鎖空間で暮らすからにはそれなりの集落が築かれているわけで、利益を賄う方法が無いわけではない。

配給品を金で多めに受け取り転売したり、配給品の娯楽映像作品で人を呼んで上映したりする。中には漂流時の船外活動用のノーマルスーツやポッドを所有している者もあり、流れついたデブリを食料と等価交換、または補給艦に渡して金にしている。こうして最低限の均衡は保たれている。しかし、そうでない住民もいるわけで、盗みやそれ以上の行為も人目が届こうと届くまいと行われている。

そんな街で暮らす少年がひとり

タロ・アサティ

「少し出てくるけどなんかいる?」

彼は妹のファナと二人で長いことこの街に住んでいる。

赤いトレーナーの上に青いジャケットを羽織り、身支度をしているとお世辞にもきれいとは言えないリビングルームのソファアベッドからファナがひよこつと顔を出した。

「ううんー大丈夫」

「帰るまで開けちゃだめだぞー!」と言い残し、鍵をかけてタロは中心街へと出かけて行った。

「わかってるって」

兄の耳には届いていないだろう返事をしてリビングの窓から空を眺める。

空には街があるが、その青い眼は遙か向こうの虚空を覗いていた。

≠

ロストシティの舗装されることのないメインストリートでは裂けて隆起しているアスファルトの上で蚤の市が行われていた。

とは言っても、辛うじて生きているコロニーの大気循環システムが急に雨を降らさない限りはいつでも誰かしらが勝手に店を出している。

「おっちゃん、これいくら？」

「……………」

このコロニーの住人の殆どが覇気が無く抜け殻になっているか、その逆に神経が研ぎ澄まされて過敏になっているかのどちらかであり、タロの様な精神が安定している者は稀有な存在だった。タロはそんな市に赴いて食料などの日用品を盗んで生活していた。

「すみません」

いつものように街を物色していると、ある男に呼び止められた。

「この第9地区へはどう向かえばいいでしょうか」

こんな事は殆ど初めてである。無視しようとするが、タロの目は不思議とその男へ向かってしまった。

一枚布を身に纏い顔はよく見えず、そのくせ鋭い視線を感じさせる異様な雰囲気圧され

「えっと……あつちだけど」と第9地区の方を指差した。

「ありがとう」男は抑揚のない声で言う、続けて「年は？」と聞いた。

「……………16」

そう答えると男はさらに手を差し伸べてきた。

タロは戸惑ったが「ただの礼だよ」と言ったのでその手を取ると

「!？」

タロの体に一瞬鉛のような感覚が流れこみ、心臓がドクンツと強く脈打った。

「それでは」と言う、男は第9地区へ歩いて行った。タロはしばらくその男から目を離せずにいた。

「飯が来たぞおー！」

街のどこからか声が上がリ、市場にいる人々が餌を用意されたペツトの様に一斉に港へ向かった。

「やべっ、出遅れた！あんのやろお……！」

あの男の後を追いたい気押し殺し、タロも港へ向かった。

ジム・セークヴァアのゴーグルの奥からモノアイレンズで捉えたコロニー内の映像に、パイロットであるニロン・アラダール少尉は大きく息を吐いた。

「なんちゆうとこだよ……」

「見捨てられたコロニー」この呼び名である程度の覚悟はしていたものの、砂塵の舞う廃墟街と港の群衆を見れば、どれほど甘く見ていたかを思い知らされる。

「コロヤ2、3日いたら肺が腐るぜ」

《どうだ？何かあったか？》艦長のジヨブ・ジョンから通信が入った。

「なんとというか、廃墟と乞食しか見当たりません」《オツケー、なんか見つけたら連絡よろしく》

艦長からの通信が切れると、ニロンはもう一機のジム・セークヴァアのパイロット、グラン・マックイーン少尉に対し「なあ、うちの艦長軽すぎねえ？」とぼやいた。

メインストリートを抜けて港に着いたタロの目には、2体の巨大な人影が映っていた。それは18メートルにも及ぶ人型有人機動兵器であり、9年前に彼らの親を奪った存在でもあった。

「また、なのか……」

決して安住の地とは言えないこのコロニーだが、それでも戦争に巻き込まれないという希望があった。それが今、タロの中で音を立てて崩れていく。

「ここでも……うっ！」

急激に前頭葉が疼き、大通りで会った布を纏った男の姿が脳裏にフラッシュバックした。『この人に会わなければ』タロの第六感がそう囁いた。

それが、彼の運命を大きく変えてしまうことまでは、知らせてはくれなかった。

≠

布を纏った男はタロという少年に声をかけた後、第9地区までたどり着いていた。その一面にある廃墟の中で、彼を出迎える男がいた。

「全くひどいものだな…よく人が生きていられる」

それが迎え入れられた男の第一声だった。

「流れ者のコロニーだからな。流石に予想以上か？」

男にしては少し高めな声色が、若干の高圧的なトーンで薄暗い廃墟に響く。

「それよりも貴公の姿に驚かされた…瓜二つだ」

「姉に似ていることがそんなに不思議か…シヤア・アズナブル」それが布を纏った、タロに声をかけた男の名だった。彼は被っていたフードをとり素顔を露わにすると、目の前の男を睨みつけた。

その男は、自らをアクシズ、そしてネオ・ジオンの実質的指導者であるハマーン・カーンの弟、カーン・Jr. と謳い、わずかな光に浮かび上がる後頭部に向け広がったボブの髪型とその姿は「姉」と瓜二つだった。違うところと言えば「姉」がピンク色の髪に対し、彼は紫がかったピンクであるくらいだろう。

「…まあいい、まずこれを見て欲しい」

カーン・Jr. が透明なアクリル状のタブレットを持ち出すと、そこには一年戦争を始めとした勢力図の変遷が映し出されていた。

「ジオンが敗戦してからの残党軍の全体的な動きだ。ザビ家を狂信するテロリストが宣戦布告するも結果はこの通り、全く前時代的な奴らだ…」

私の姉はザビ家を建前としてやっている分、こいつらよりかは遙かに冷静だ。それでも、それでもだ！ニュータイプ之父でありあなたの父上、ジオン・ズム・ダイクンは影も形もない！ジオン・ズム・ダイクンこそが人類を正しい方向に導く…そこでだ」

「私が継げば…プロパガンダになる」カーン・Jr. が熱を帯び演説染みた所で回答するも、それは気持ちのいい物ではなかった。

「その通りだ。ザビ家ではなくジオンの名が、ジオンの血が宇宙移民者（スペースノイド）を再び蜂起させるのだ。」

かつて『希望』と言われたこのコロニーも今となつては人々の記憶からも忘れ去られ手付かずのまま葬られ時が経てばただの廃棄物：戦いの中で流された者、コロニーを追い出され宇宙漂流者になつた者、彼らの存在はアースノイドに知られてすらいない：知つたところで何もしないだろう！

そんな奴らが今も重力下でのうのうと生きている！そいつらを肅清するにはニュータイプのが、ジオンの遺伝子を受け継いだシヤア、いや、キャスバル・レム・ダイクンが必要なんだ!!」

カーン・J r. は「ふう」と一息つき、さらに続けた。

「ここは辺境のコロニー、ほとんど火星圏内だ。中で何が起ころうとアースノイド共は何も気づかない」それまでの高圧的なトーンとはうって変わり、猫撫で声で言った。

「……協力しよう」

「嘘でも嬉しいよ……シヤア」

「……なんだか騒がしいな」

シヤアは白々しいまでの話のそらし方をしたが、次第に港の喧騒が遠くから聞こえてくる。

「失礼します。連邦の物とみられるモバイルスーツが港に現れました」

乞食の格好でカムフラージュしたカーン・J r. の配下のウイノナが現れ報告するも、

「ただの偵察だろう、放っておけ。余計な手出しはするな」カーン J r. は至極冷静に制した。

「こういうことは多いのか？」シヤアが訪ねる。

「さあな……来ててもこの有様だ、すぐに引き上げていくだろう」

「さあ……？」カーン・J r. の言い方に違和感を覚えたが

「ところで：聞けばあなたはしばらくエウーゴに加担していた。そして私の姉、ハマーンと対立して今に至る。そうだな？」と話を逸らされ「ああ」と答えた。

「なぜアクシズではなくエウーゴに？」

シヤアは「フツ」っと、それが答えだと言わんばかりに自嘲気味に

笑った。

「……シャア、ついてきてくれ」

カーン・Jr. が薄暗い廃墟の中を進んだ先にはリフトがあった。シャアとカーン・Jr. を乗せるとゆっくりと降下していき、二つの階層を過ぎると、薄暗いながらも格納庫が見えてきた。

本来は別の施設だったのだろう、間に合わせの格納庫であろう事は一目見ればよくわかり、冷たい空気が漂っている。

「よくここまで集めたな……しかし、なんだあれは？」

格納庫にあるモビルスーツはどれも手や脚、頭部が別々の機体のパーツからツギハギで出来上がっていた。

「流れ着いたモビルスーツを回収し動かせるようにした。お前の百式もこうすれば」

「そんなことより、これでやるつもりか？」

「……これは飾りだ。この下に我々が独自に開発した物がある」

リフトが最階層に着いた。

そこには人類が初めて開発し実践に投入されたモビルスーツ、ザクの系譜を受け継いだ巨人が並んでいた。

「G（グラント）・ザック、ハイザックの発展型だ」

一度連邦の手に渡って開発されたザクの発展型に、さらにジオンの手が加えられた機体であり、頭部のパイプは健在であった。

「そして」

カーン・Jr. が最深フロアの最奥まで進んだ先には、一回り大きな、一際目立つシルエットのモビルスーツがあった。

それは、ジオンの特徴を含んだ丸みを帯びた流線型のボディでありながら、連邦の象徴である白いモビルスーツの形をしていた。

「連邦とジオンの技術の結晶、O（アウター）ガンダムだ」

「アウター……ガンダム……」

薄暗い中で見るその姿は寺院に鎮座する大仏のようだが、シャアの目にはどう映っていただろうか。

「サイコミュを搭載しているがオールドタイプでもある程度使える。だが、ニュータイプが乗ればそれをフィードバックし、アウター

の性能そのものを上げる事ができる・・・これをあなたに預けたい」
その言葉を受け取ったのかいないのか、シヤアの口から出たのは不
意を突く返事だった。

「・・・ここへ来る時、一人の少年と会った」

「・・・は？」

カーン・J r. が呆気にとられると、タイミングを見計らったかの
ように奥のほうから物音がした。

「なんだ!？」

それはリフトが上へ遠ざかる音であり、ウイノナから彼の持つ端末
に通信が入った。

《もうしわけありません。男の子がそちらへ入って行ってしま
いました》

しばらくするとリフトが下りる音に変わり、カーン・J r. は反射
的に銃を構えた。

「誰だ!」という声が仄暗い格納庫に響くと「彼がその少年だ」と
シヤアが言った。

「あんたがさっきの・・・」

タロ・アサティが物陰から姿を現し、シヤアを見てそのままカーン・
J r. へ目を移すと青い虹彩に囲まれた瞳孔が開いた。

『なんだ・・・この人・・・』

それがカーン・J r. を見た彼の印象だった。性別がどっちつかず
な彼の容姿を一目見ればタロでなくともそのように思うだろう。し
かし彼は容姿ではなく、そのもつと奥の、内から出る人のおいを感じ
取っていた。

「なんだ少年・・・私の何がおかしい!」

タロの浮かべた訝し気な表情が、引き金にかかる指に力を入れる。

「銃を降ろしてやれ、この少年は鋭い」

撃つ気がないので見透かされている事を婉曲に言い、カーン・J r.
が銃を下すとシヤアはタロに向き直った。

「先ほどはありがとう、礼を言う。私は・・・シヤア・アズナブ
ル」

「シャア……」どこかで聞いた名だとタロは思った。それはコロニーで元軍人が口にしていた名だった。

「そして彼は」とカーン・J r. の方に手をやり「カーン・J r. と言ってジオンの残党を率いるハマーン・カーンの『弟』だ」と紹介した。

「……ハマーン?」

聞いたことのない名前にタロが顔をしかめつつ手を差し伸べると、カーン・J r. は警戒した眼差しでシャアを見た。

「握手くらいしてやればいいだろう」

まるで子供の様に言われ少し癩に障るも、カーン・J r. はおそろおそろタロの手を握った。その時、互に電流のような衝撃が走り、互に手を突き放した。

『この人、違う……!』『覗かれた!?!』

タロは彼の奥にある異質な存在を垣間見てしまった。自身の不可侵領域に踏み込まれたカーン・J r. の荒い息遣いが聞こえてきた。

やがて時が止まったような静けさがもどると、

「そういえばまだ君の名前を聞いていなかったな」シャアが言った。

「あ……えっと、タロ・アサティ」

「タロ君……私は…君がここに来るか、賭けをしていた」

急に何を言い出すのだろうかカーン・J r. はきよとんとして彼を見る。

「そして結果はこの通りだ。タロ・アサティ君」背後を一瞥し、彼の口元がかすかに緩むと

まだ年端も行かぬその青い瞳を真っ直ぐ捉え

「このアウター・ガンダムには君が乗るといい」

彼の背にあるものを託した。

「なっ……シャア! 貴様一体どういうつもりだ!!」

シャアの思いもよらぬ発言にカーン・J r. は全身の血が煮え滾りそうになった。「何が気に入らない! 私がそんなに嫌か!!」と彼の胸ぐらをつかんで感情を露わにした。

「あ、あの……」

「なんだうるさい!!」

あまりの憤りに、割って入ったタロにまでその矛先を向ける。

「えっと……これはなんなんですか?」しかし当の本人はお構いなしで、何事もなかったかのように質問をぶつけた。「それに、なんで俺なんですか?」

「ふむ……」とシヤアは顎に手を当て、やがて言葉を選び終わると「君がニュータイプかもしれないから」と言った。

「ニュー……タイプ……?」

「例えば、相手が何を考え、思っているか……君は相手の手を取ることで感じ取るんじゃないか?」

「え?そうですけど……」さも当然のように答えるタロにシヤアはフツと笑う。

「あの時、何を感じた?」

そう聞かれたタロは少し戸惑いつつ「は、はあ……なんか、重いものが流れてきたっていうか」と答えるとシヤアの眼光が僅かに鋭くなり再び手を差し出した。

タロがそれに応じるまで少しの間があった。手を取れば視えるところまではいかずとも感じ取ってしまう、それがモノによっては精神に負担が及ぼす場合もあるのだ。それは意識的にオン、オフと切り替えられるのだが、先ほど少し触れただけでもかなりのものが流れ込んできたこの男を再び相手にすれば、自殺行為のようなものだった。

「………わかりました」

覚悟を決めると、彼の手を取った。

「………!!」

タロの握る手の力が強くなっていき、表情が引き締まった。

「なんとなくは、わかったよ……あんたの事も、その、ガンダムっていう物の事も……でもそれは……戦争をやれつてことでしょうか?」脳裏に戦火の記憶が蘇る。「いらねーよ、そんなもの」

タロの青い目はシヤアの青い瞳をまっすぐに捉えていた。

「君は、なぜここにいると思う」

「……あんたらが戦争をやったからでしょ」タロの眉間に皺が寄

り、眼光が鋭気を増す。

「人はすれ違う生き物だ、戦争はその結果であり手段でしかない」
シヤアは淡々と答えるも、その声には静かな怒りが籠っていた。

「そんな理由で・・・そんなことで父さんと・・・母さんは・・・！」
タロの拳に力が入っていった。

「ニュータイプは・・・」と今にも殴りかかってきそうなタロを制し
「ニュータイプというのは・・・そうした手段をとらなくて済む人間だ。
君にはその素質がある」と告げた。

「俺に・・・」

そのようなことが当たり前であるタロはいまいち意味を捉えられ
ず、シヤアから目を逸らした。

「手を取って相手を感じるのもそうだった力の一つだろう。おそらく
「普通」にできる事じゃない。君にはニュータイプの「魁」にな
って欲しい」

タロの青い刃が、その返答の代わりとして再び彼に突き付けられ
た。シヤアはゆっくりと息を吐き、我を落ち着かせた。

「・・・こうしないとわからない人間が多すぎるからな」

この時、タロは初めてシヤアの声に血を感じ、彼なりに姿勢を正し
た。

「二度、地球へ行ってみるといい」

「地球・・・？」

一年戦争による宇宙漂流後、火星圏で暮らすタロにとって、地球は
記憶の彼方である。故に『母なる大地』という言葉で聞いても、もはや別
の世界のように感じていた。

「君なら重力に魂を引かれている人間を視る事ができるはずだ」

重力に魂を引かれるとはなんだろうか？

コロニーの疑似重力しか馴染みのない彼にしてみれば、重力という
ものは弾き出されている感覚に近い。

本物の重力を覚えていなければ『魂を引かれる』という表現は微塵
も理解できるものではなかった。

「このコロニーに連邦の舟が来ている・・・行け！」

自分を導いた男の気迫に押され、弾かれるように廃墟を後にした。場が静かになりシヤアの肩が下がると、空間から疎外されていたカーン・J r. がしばらくぶりに口を聞いた。

「随分とおしゃべりだったなシヤア……」さらに「口では何とも言えるからな」と投げつけた。

「……他に拠点は？」
「なに？」

「さすがにここが本拠地ということはないだろう？」

このコロニーを一通り見れば、シヤアでなくともその推測は一目瞭然である。

「ああ……」

まずはアクシズ：そしてここと火星の中間にある小惑星アリエスだ」

そう答える彼は、シヤアを睨みつけていた。

「救援物資はアクシズからだな」

「……シヤア」カーン・J r. の表情が一層険しくなる。「なぜだ……？」

「あの少年は」

「シヤア!!なぜあんな事をした!!」ここで譲るわけには行かない。彼は留めていた怒りを剥き出しにした。

「どうして私の言ったことを受け入れてくれない……!そんなに私が」その刹那、華奢な肩をがっしりとシヤアに掴まれ、彼の怒りは消えた。

「お前はハマーンじゃない!あまりのみこまれるな!!」

「それに私は……もうパイロットをやっていればいいというわけにもいかなくなった」

カーン・J r. の目はうつすらと濡れていたが、シヤアは気づかないふりをした「アリエスには行けるか」

「ああ……案内……する」カーン・J r. はウイノナを呼び出した。

≠

ファナは部屋で一人、いつもよりくすんだ空を眺めていた。彼女の

内にも、その景色みたく砂塵の舞うザラついた感覚があった。

突然、何の前触れもなく、玄関の扉の向こうから《すみませーん》と男の声がした。

『誰．．．？』

タロが部屋にいない今、玄関を開けるのは危険を孕んでいる。

《ごめんくださいーい》

《港の方がいいんじゃないか？》

《あんなどこいたら肺が腐っちゃうよ》

2人の男同士の会話が聞こえた。なおさら開けてはいけないと思
い、男たちがこのまま去るのを静かに待つことにした。

《窓に人が見えたんだけどなあ》

《幽霊でも見たんだろ》

《おい、なんだあんた達》

兄の声だ。

ファナは音をたてないように玄関まで行き、扉の向こうの、喧嘩腰
の声に聞き耳を立てた。

《きみ、このの？》

《そうだけどなんだよ？．．．．何の用？》

タロの声が尖ってゆく。男たちは咳払いをしてそのまま話を続け
た。

《あー：申し訳ない。俺たちは連邦軍の者で：ここいらで不穏な
動きがあるとの情報で今調査しているんだけど．．．何か知らない？

》

連邦“軍”という言葉にファナは息を呑んだ。私たちの家族を、生
活を奪っていった人たち．．．そんな思いも相まって漠然とした不安
が胸の奥で膨らんでいった。

《不穏？》

《例えばその．．．ジオン軍人を見たとか》

宇宙漂流者の流れ着くコロニーではその殆どが該当者になろう。

《ここはそんな人ばつかだよ、元ジオン軍人とか元連邦とかさ．．
も面白い？》

タロの呆れ声がすると鍵が開く音がした。扉が開き、タロと目が合った。

その後ろで二人の男がこちらを見ていたが、ヘルメットのバイザーに遮られた顔は良く見えない。

「あ、ほら、やっぱりいた」

「中はそこまで汚くない・・・少し邪魔するぞ」

宇宙服―ノーマルスーツ―を着た男の一人がテリトリー内に足を踏み入れようとして、タロの目つきが一層険しくなった。

「さてよ・・・軍が今更何しに来たんだよ」

ヘルメットのバイザーが開き、中から雄々しい顔が覗いた。「言つたろ？不穏な動きがあったからこうして」

「戦争しに来たんだろ・・・」

「あ？」

「ここに戦争しに来たんだろ！」

「うるせえな！耳元で叫ぶんじゃねえや」男はチツと舌打ちし「そうなる前に処理しに来たんだよ！つたく」と言いながら再び足を踏み入れようとする男の胸ぐらをタロは掴んだ。

「だったらあの港のはなんなんだよ！ジオンを見つけたらあれで攻撃するんだろ!?破壊するんだろ！街が焼かれるんだろ！もう嫌なんだよそういうのは！」

掴んでいた胸ぐらを思い切り突き離し、勢いよく扉を閉めた。

そして、ファナの目には彼の穏やかになった、いや、穏やかになるうとしている顔が映った。

「なにがあつたの？」

内から鍵を閉め、リビングに向かうタロにとファナが聞いた。「何も無いよ」

「うそ」

ファナの声が強くなった。

タロは人差し指を口に当て『意識が向いている』と視線を玄関へ向け、それから3分ほど経って気配が消えた。

彼らが引き上げていったのだろう。タロは止めていた息をふうっ

と吐いて先の事を話そうとしたが

「シヤアつて人に会って、モビルスーツに乗せられそうになって……いや、違うな」

うまく言葉に表すことができないのでフアナに手を差し出した。

生身のお肌の触れ合い回線とでも言おうか、タロの相手を感じる力は相手に伝える力もあった。

それを受け取ったフアナの顔が次第に青ざめていく。「……そんな顔するな、俺は戦争になんか絶——」

《すいませーん》

再び玄関からノック音と共に、先ほどの連邦軍人の声がした。

《ちよつと落し物しちやってね、開けてくれると助かるんだ。回収したらすぐ引き上げるから》

「ああ、そうっすか」

タロの油断が玄関の鍵を開け、その瞬間、フアナは敵意を感じた。

「開けちやダメ!!」「ッ!？」

遅かった。

蹴り開けられたドアの前で、タロは二人の軍人相手に適う筈もなく捕えられた。

「うぐっ……!!!」

「ごめんごめん、忘れ物あったよ。これこれ」

バイザーを開けずにメットを取ると、中から長い銀髪が靡き、先ほどとは違う若い男の顔が露わになった。彼が腰を下ろし手に取って見せたのは、いつの間にもやら仕掛けられていた小さな盗聴器だった。

「わるいねー、さっき開けた時にちよつとね」

「さて坊主……シヤアのところへ案内してもらおうか」

「ごめんねー、ちよつとお兄ちゃん借りるからねー」

タロを捉えている雄々しい茶髪の軍人の声が研がれている横で、長銀髪がフアナにこやかに言った。

2人の兄妹はやがて濁流になってゆくこの流れに逆らう事が出来なかった。

タロは二人の軍人、ニロン・アラダールとグラン・マックイーンに挟まれながら、砂塵の舞う中をシャアのもとへ向かっていた。

「あれ……?」

「どうした」

「いや……」

導かれるままに來た廢墟、もとい格納庫の漂う空氣が先ほどと違っていた。

鈍痛のような重苦しい圧があつた一時間前とは違い、まるで泥水が濾過されたように透明度が増していた。

タロはしつくりと來ないまま二人の軍人と共にリフトで地下に降りてゆくが

「逃げられたか」

人どころかモビルスーツまで消え、既にもぬけの殻であつた。

ただ一つの機体を除いて――

「……この機体」

「ガンダム……か……?」

ニロンとグランが静かに佇むその姿に息を呑むと

ズウウウウウウウウンン

地鳴りがした。

「何だ!?!」

ニロンは銀の長髪をたなびかせながらリフトへと走り、グランも後に続いた。

≠

地上では3機のG（グランド）・ザックがどこからか姿を現していた。

「こちらニロン、コロニー内部にて3機の所属不明機に遭遇しました。形体から見てジオンの物とみられます」

港のジム・セークヴァに乗り込んで、マイクロ・アーガマに通信を入れるとニロン・アラダールは銀の長髪を束ねた。

「3対2じゃちときついかもな!」

グランも自機に搭乗すると、頭にバンダナを巻いて戦闘態勢に入

り、ジム・スナイパーIIを受け継いだかのような鋭角なバイザーの奥にあるモノアイが点灯した。

「行くぞ」

港からG・ザツクの位置までには直線距離にして100メートル、しかし廃墟を避けて行けばその3倍はかかる。

ジム・セークヴァ二機がスラスターを噴かして迎撃に向かうも、その足取りは酷くおぼつかない。

「そうか、しまった・・・！」

もちろんスラスターを噴かせて飛行すればその距離はあつという間に縮まる。しかし球体型のコロニー故に、通常のシリンダー型の疑似重力とはまたわけが違ってくるのだ。

こればかりはいくら熟練のパイロットと言えども操縦の勝手が違ってくるので、慣性にうまく乗れなければ、その腕前はガクツと落ちてしまう。

「仕方ない、正面から行こう！」

ジム・セークヴァは脚を一步一步コロニーの内壁を踏みしめながら、G・ザツクへと向かうことにした。

ヴンツ

三機のG・ザツクのモノアイがジム・セークヴァを捉えると慣性に乗ってスラスターを噴かせ、一気に距離を縮めてきた。

先頭のG・ザツクが大型のビーム・ホークを振り上げながら飛びかかる。

「!!」

「この奥・・・！」

ニロン機は即座にビームサーベルを抜き、振り下ろされるヒート・ホークを受け止めた。

「このオツ!!」

何とか薙ぎ払って、G・ザツクに構えたビームライフルの引き金にマニピュレーターをかける。

「待てーニロンー！」

「え!?!」

「ビームライフルは使うな！」

グランがその引き金を引かせまいと止めに入った。

普通のコロニーならともかく、ここは人の手入れが頻繁に入るところではない。発射された粒子がいつ内壁に穴をあけないとも限らない。むしろその方がここにおいては可能性が大きいのだ。

それにモビルスーツには核融合炉がエンジンとして使われており、下手に触れば大爆発を起こす代物でもある。

「だとしたら、いつらをやる方法は・・・」ただ一つ、コックピットを焼き機能を停止させる事以外に方法はなかった。

≠

そんな地上の動きをよそに、タロは悠然と佇むガンダムを見あげていた。

寺院に鎮座する仏のようなその佇まいに、タロはいざなわれるようにのみ込まれていった。

≠

市街地と言う場の使い方もG・ザツクのパイロット達が長けていることもあり、ジム・セークヴァア2機がおされていた。

「艦長！まだかー」「うまく立ち回れりゃ・・・あつ！」

グラン機の右腕が切り落とされ、さらにG・ザツクの投げたビーム・ホークがニロン機の両脚を切断した。

二機は囲まれ、ニロン機のコックピットにはマシンガンの銃口が突き付けられた。

「・・・ここまでか」

爆音

なにが起こったのか。二人は息をしており、少なくとも生きていることだけは確かだった。

モニターを見ると、3機のG・ザツクが後方へと振り返っていた。

その先に

戦場に咲く白い悪魔、ガンダムの姿があった

第2話 ロストシティのタロとファナ〜Under the sky

〇―アウター―ガンダムのコックピット内で、タロは身が竦んでしまっていた。

全天周囲モニターが映し出した外の映像には、3体の巨人が一つ目をこちらに向けていた。

そのうちの一機がこちらに歩み寄ってくる。誘われるように乗りこんでしまったことを後悔し始めていると、目の前のそいつから通信回線が入り、若い男の声がした。

《では向かいましょう、総帥!》

「だれ・・・あなた・・・?」

《・・・誰が乗っている?》

G・ザツクのパイロットは聞き覚えのない声に敵意を剥き出しにすると、右アームに掴んでいたビーム・ホークを振りあげて丸腰のアウターに向かってきた。

『避けなきゃ』

タロは漠然とそう感じ、フットペダルを踏み込んでスラストを噴かした。機体が後方へスライドし、G・ザツクの攻撃は空振りに終わった。

G・ザツクの口にも見えるラジエーターからシュウツつと息のように熱が噴き出し、モノアイがじろりとこちらを向く。

《答える・・・誰が乗っているんだあつ!!》

その後を追うように、後方の2機のG・ザツクもマシンガンを構えながらアウターの元へと迫ってきた。

『囲まれる』

タロがアウターに搭載されているであろう装備を探ると、モニター上の機体の両前腕部が点滅した。

そのまま手順を進めると両前腕部の手の甲側がカバーのように開き、そこからビームの粒子がサーベル状に形成された。カバーの内側

にはビームサーベルの柄が収納されていたが、手に握らずにそのままクロスして防御の態勢を取った。

《答えないのなら貴様ごと焼いてやる!》

一機がビーム・ホークで斬りかかってくる中、後方の二機がマシンガンを放ちながら左右に分かれた。三方向からの攻撃態勢が出来上がり、アウターは囲まれた。

アウターの装甲であればマシンガンの弾は弾くことができるかもしれない。しかし、ビーム・ホークともなれば防げる保証はない。

下から挟むように来るビームの刃を後方へのステップで避ける、そうこうして躲している間に、両側からの二機もビーム・ホークに持ち替え迫ってきていた。

万事休す、かと思われたとき、またしても通信が入った。先とは違う声が叫ぶ。

《コックピットをやれ!》

振り上げてガラ空きになったG・ザツクの胴体中央を狙い、右腕を正拳突きの如く突きだした。

ビームの粒子が、コックピットをパイロットごと焼いた。瞬間

『え．．．．．?』

虚無感がタロを撫でていった。

サーベルを引き抜くと、モノアイが事切れるように消灯し、G・ザツクの全機能が停止した。

残った二機の内の一機が進撃を止め、引き上げる合図をした。もう一機がそれに従い、共にスラスターを噴かせてアウターが地下から開けた穴へ抜けていった。

タロは追いかけなかった。

港の方で小型艦が入港していた。

≠

コロニーに入港するや否や、ジョブ・ジョンはニロン機とグラン機に通信回線を入れて様子を伺っていた。「被害状況は?」

《中破しましたが何とか無事です》

《同じく》

「了解、救援を向かわせるから待機していてくれ」
小型艦と言えどそれなりの大きさはある戦艦だ。市街地の中に降り立てるような場所はない。

「クシナ、Z Mk-IIで向かってくれ」

「了解」

艦唯一の女性パイロットであるクシナ・カーデンロイドに救助命令を下すと

「あーあ、最初っからゼータ出しときやよかったなあ」

独り言のようにオスカとマーカーに投げかけた。

クシナはノーマルスーツに褐色の肌を通し、黒いおかつぱにメットを被った。細身なのでするりと入るが、少し胸がきつい。

「ZガンダムMk-II、クシナ、救助に向かいます！うわあああつー！」
マイクロ・アーガマのカタパルトから勢いよく飛び立ったはいいが、早くも勝手の違う慣性に翻弄されていた。

≠

《何で追わなかった！》

《なんで俺がやらなきゃいけないんだよ！》

戦場跡地ではタロとグランが外部スピーカーで口げんかを繰り広げており、その声があたりにまで響き渡っていた。

《てめえなんかガンダムに乗ってなきゃなあ》

「お待たせしました！うわあ……」

グランがいくらでもぶん殴ってやると言いかけたところでZガンダムMk-IIが到着し、有り様を見たクシナはぼーぜんとした。

「ええつと……御二人を回収しに参りました！こっちは……」
両脚を切断されて立つこともできないジム・セークヴァアにモニターがズームしていた。

《ニロンだ》

「ニロンさんは私が担ぎます、それと……」

クシナは右腕の無いグラン機と対面する白いモビルスーツを見た。

タロはZ Mk-IIの視線が自分に向けられていることに気づき

「……えーつと、俺は降りるので誰か持つてつちやってください」と

いうとディスプレイに外部通信の表示がついた。それに応じると女性の顔があらわれた。

《あ！降りなくて大丈夫》

「え？」

《いやーうち人手不足だから！》

タロが状況を呑み込めないでいる中で彼女は陽気に笑った。

「そんなこと、もつといるでしょ？」

《艦長とかオペレーターはパイロット出来ないからねえ》

「…こんな簡単なのに」タロは軽く舌打ちした。「そうだ！艦長って人が偉いんだろ？その人が許可しないと」

《大丈夫だと思うよ？代理だし》

「あ、そつすか・・・」タロは深くため息をついた。

《とにかく持つてきてよ！今も人足りてないんだから》

「わかったよ！持つてみてくださいですからね!!」

アウトターがマイクロ・アーガマのデッキに收容され、渋々従ったタロがコックピットから降りると艦長のジョブ・ジョンが底抜けに明るく出迎えた。

「やあ！俺がこの艦の臨時艦長をやっているジョブ・ジョンだ。普段は主にメカニックの仕事とかやってんだけど今回は恩師に頼まれてね、あはは！」

彼はあいさつを済ませた傍からしばらくアウトターを眺め、子供のように「すごいなこれ！」とはしゃいでいた。

「じゃ、俺は帰ります」さつきまでの緊張感が一気になくなったせいで調子が狂いそうだ。タロは一刻も早くここから離れたかった。

「おっと待つてくれ！君にはいろいろ聞きたいことが」

「俺はこいつをここに届けるために来たんです！もうここにいる意味ないでしょ」

この少年に小細工は通じないとわかり、流石の彼も少し気を引き締めた。それまでの落ち着きのない態度をがらりと変え、ピリツと緊張感を走らせた。

「君がシャアと会って何を話したかを教えてくれるかい？」

まともに大人の相手をするのは何年ぶりだろう、シヤアとは違うタイプの「普通の」大人にタロは怖気づいた。決して気圧されているわけではない。包み込むような、それでいて鋭い刃を向けられているような感覚だった。

しかし、タロが言葉を返せないのはそればかりではない。

シヤアにニュータイプのカビになつてくれと言われた

なんてことを話せばどうなるか？阿保らしいと離してくれるか？それならそれで結構だが十中八九拘束されるのがオチだ。

それに、シヤアの話したことよりも、彼から感じ取った物が遥かに大きく重い。それを今のタロ自身にはうまく言葉にはできないし、とにかく話せることではない。

「……話すことなんて何もありません」

そう答えるタロの姿を見て誰が首を縦に振るだろうか。ところがジョブ・ジョンは「そうか」と残念そうに肩を落とした。

「ところで、よくこれを動かさせたね？」沈んだ空気を一掃するかのようには話題を変え、彼は親指でクイツとアウターを指した。「大変だったろ？」

「え？別にそんなことは」

途端、ジョブ・ジョンはニヤリと口をゆがめた。タロは墓穴を掘ってしまったことに気付いた。

「やはり君は……」その後は言わなかったがタロにはわかった。「まあ、いきなり会って昔話はしたくはないけどね。ちよつと聞いてくれ」

と前置きしてジョブ・ジョンは続けた。

「僕はかつて、一年戦争の時ね、ホワイトベースという艦にいたんだ。ここのオペレーターのアスカとマーカールと一緒にね。」

開戦してから連邦の戦力はあつという間にジオンに削られていった。なにせ連邦は技術力でジオンに劣っていたからね。

このまま負けてしまふんじゃないかと思いつながら8ヶ月が過ぎたころ、ぼくらホワイトベース隊は一人の少年に会った。

軍人じゃなくて、本当にただの少年だった。

いや、ただの少年ではなかったな。

その少年はね、当時の最新兵器、ガンダムに乗って自分の手足のよ
うに動かして……

いきなり敵のザクを撃破したんだ。彼はそのまま僕らの隊に入っ
て、ガンダムで戦況をひっくり返していった。今思い出しても化物
だったよ、敵じゃなくてよかったと今でも思う」

タロは何も言い返さずただ聞いていた。

「名前をアムロ・レイって言ってね、丁度君くらいの年だったよ。戦
況が良くなるにつれて彼の噂は広まって行って、いつからかニュータ
イプではないかっていわれるようになったんだ。

彼はそれからガンダムで敵機を墜として行って、気が付けば地球
連邦は戦争に勝っていた。

そして、つい最近もそんなことがあったんだ。これは聞いた話だけ
ど、再びニュータイプの少年がガンダムに乗って勝利を導いた。こう
いう言い方は大人がするべきじゃないんだけど……君が偶然にもガ
ンダムに乗っていたということとは」

「俺がニュータイプだからって協力はしませんよ」

ジョブ・ジョンの話がひと段落する直前、タロは彼の目を捉えて
遮った。

彼の中には撃破した時の感触が残っている、人の死の感触など決し
て良いモノではない。それを幾度となく繰り返すことになれば、彼は
いつか破綻してしまうだろう。

それに、ファナの存在もあった。

「えー、ここまで来たのに来ないのー？」クシナがつまらなそうに
言った。

「まあいいじゃねえか、やりたくねえつつつてんだからよ。荷物に用
はねえや」

「……あ？」耳を掻きながら言うグランの姿がタロの忌諱に触れ
た。「あんたさつきからなんだよ？一々突つかかってきてさ」

「うるせえなあ、糞ガキは家でしょんべんと鼻水垂らしてりやいいん
だよ」

「耳糞より鼻くそほじった方がいいんじゃないの？おっさん」

「ああ？てめえいい加減にしろよ！」

「おおっと！はいそこまで！」今にも殴り合いが始まりそうな二人の間に艦長自らが止めに入った。「いいかい、とにかく君はニュータイプ！そしてシャアに会った！二つも揃った君が我々にとつてどれだけ重要な人間かわかるかい？」

その時、唐突にシャアの言葉が脳裏をよぎった。

『一度、地球へ行ってみるといい』

『君なら重力に魂を引かれている人間を視る事ができるはずだ』

『このコロニーに連邦の舟が来ている……行け！』

「……わかった、話すよ……」

タロはシャアに会ったこと、そこにハマーンの弟がいたこと、

そして、ニュータイプである自分が魁になるためにガンダムを託されたことを話した。

「なるほど、ジオンも一枚岩ではないな……」

タロの話から状況は想像以上に深刻であると窺うことが出来た。シャア・アズナブルだけでなく、今ネオ・ジオンを実質的に率いているハマーン・カーンの名前が出てきた。

しかも聞いたことのない弟の存在である。

「ハマーンの父親はかつてアクシズを率いていたマハラジャだったはず……彼に隠し子がいたのか？そういうえば地球圏でも不可解なことが起きてるらしい……」

「あの、重力に魂を引かれているって……なんだと思います？」

ジョブ・ジョンが真剣な面持ちでぶつぶつと考えに耽っているところにタロが口を開いた。

「は……？なんだって？重力に？」彼が突然言ったことは遠く理解が及ばない表現だった。

「魂です。あの人が……シャアって人が俺に言ったんですよ。地球へ行けば重力に魂を引かれている人間を見ることが出来るはずだって」

「それは……たぶん君にしかわからない事なんじゃないかな」ジョブ・ジョンはタロに、そして自分自身に納得がいくように言葉を選ん

だ。

「俺にしか・・・」

「そう、こういう言い方は嫌かもしれないけど、それはニュータイプである君に対しての言葉だよ。だから俺たちがわかることじゃないな」

僅かに嘘をついた。自分なりの見当はついてはいるが、それが本来の意味合いとして正しいかは別である。だから僅かな嘘なのだ。

「ま、タロくんが地球へ行きたいってんなら連れてってやるぞ！」

タロの中で、戦争に対する憎悪、シヤアに植え付けられた好奇心、そしてフアナを守る使命感が渦巻いていた。

「えっと、あの…妹がいるんです。でも連れていくよりかはここにいた方がいいような気もするし・・・すこし、時間ください」

タロはクシナに居住スペースの個室へと案内されていった。

≠

その1時間ほど前に、コロニーから『Space Supplies Delivery』と書かれた高速補給艦が飛び立ち、小惑星アリエスへ向かっていた。

中にはシヤアとカーン・Jr、彼の部下のウイノナ、G・ザツクのパイロット2名、そしてもう一人の男が搭乗していた。

「さて…アウターの奪還に失敗した挙句貴重な兵を一人失ったわけだが」

沸々と業を煮やすカーン・Jr. にシヤアは「すまなかった」とだけ言う。「・・・まだまだ私も若いな」と誰に言うわけでもなく呟いた。

「・・・それはさておき、今回はよく協力してくれたなジェノバ、感謝する」

カーン・Jrに礼を言われた男が「いえいえ、仕事ですから」と笑うとシヤアは既にこの男を知っている様であった。

「私からも礼を言う。それにしても忙しい男だな、君も」

「彼を知っているのか？」

「なあに、ある人を匿ってもらっただけさ。ところでアリエスまで

どのくらいだ?」

「この艦じや2週間くらいだ」

「そうか」

それまでしばしの休息

≠

ジョブ・ジョンはこの一件を恩師のブライトに伝えるか迷っていた。タロが嘘偽りなく言っていたとしてもシヤアがいたという確証がない。

「どうしますか?」

オスカが様子を窺うと、深く鼻から息を吐き

「嘘は言っていないだろうしなあ…ただ、彼が会ったというシヤアが本物の確証もないし…どちらにしてももうかつに報告はできないなあ」

『重力に魂を引かれる』なんて表現をすればほぼ間違いはないのだが、再びジオンの反乱がおきている中に新たな火種を放り込んで混乱させるのは得策ではない。

「それよりも気になるのはハマーン・カーンの弟だ。姉はいたらしいが弟は聞いたことがない

まったく気味の悪い話だなあ」

「…もしかしたら『姿なき海賊団』の可能性もありますね」

「まさか!ただの噂だろ?」

ジョブ・ジョンは笑い飛ばしたが、内心はそうではなかった。ここ最近、連邦、アクシズに関係なく機体が自爆するなどの小さな事故が多発していた。それをまるで誰かの仕業のように皮肉ったのがその『姿なき海賊団』であった。

「…それこそいるかどうかすら怪しいやつじゃないか」

その時、タロが個室を抜け出しメインブリッジへ入ってきた。「あの…」

「おっ、決めたかい?」

「はい、俺を家に送ってください」

「…よしわかった。クシナ、送ってってやれ」

彼の決意を固めた青い瞳に従うしかない。無理に引き留める道理はこちらにはないのだから。

「よかったんですか？」とオスカが聞くと

「ま、仕方ないさー！」

ジヨブ・ジョンの声はいつもの軽さに戻っていた。

≠

タロとファナの暮す部屋のある建物の前にZガンダムMk-IIが着地し、砂塵を巻き上げた。ジム・セークヴァアが中破していたので無傷のZ Mk-IIがその役を担ったのだ。

「…じゃあね」

「あの・・・クシナさんも来てくれませんか？」

Z Mk-IIの手のひらに乗せられると、タロは言った。

「えっ？」

「お願いします」

≠

ドアをたたく音がした。

勢いよく開けると兄、タロ・アサティの姿があった。その奥に、女性がいた。

「あの・・・」

彼女の事を尋ねようとした時、タロに強く抱きしめられた。「ごめん」

「えっ?!なに？」

「しばらく家を出ることにした」

「・・・え？」

ファナの中にタロの思いが広がってゆく。それは、とても残酷な選択だった。

「今までゴメンな・・・兄ちゃん、ファナがもつといい暮らしができるようにするからさ、それまで待っていてくれ」

タロは一層強く抱きしめた。ファナは体と心が圧迫される中、何とか振り絞って「バカ」とだけ答えた。

そして、タロの腕が離れ

「行つてきます」という言葉と共にドアが閉まった。

≠

マイクロ・アーガマに戻るとジョブ・ジョンが歓喜の色を浮かべ迎えたが、タロの表情で、それは消えた。

タロは再び居住スペースの個室に入り、ひとり泣いた。

マイクロ・アーガマは一先ずの任務を終え出港の手筈を整えていた、といつてもほんの数時間の滞在かつ補給も出来ないのだから、といった手筈もないのだが。

「何か映らないか？」

ジョブ・ジョンはマイクロ・アーガマのレーダーをフルで機能させ、コロニー内をできる限り見張っていたが

「ダメですね・・・ミノフスキー粒子の濃度が高すぎます」

と、マーカーが応じた。

ミノフスキー粒子とは

宇宙世紀にミノフスキー博士によって発見された粒子であり、レーダーのかく乱や重力下での戦艦浮遊、さらにはビーム兵器としても活用出来るとても便利な代物である。

「つたく、こんなコロニーでもミノフスキー粒子はいつちよまえないんだから」

「それにしてもこの濃度は異常です。ここで戦闘があるとも思えません。隅々まで調べる必要がありますよ」オスカだ。

「出来ればそうしたいが・・・この状態じゃなあ・・・」

二機のジム・セークヴァアが中破した今、動かせるのはZ Mk-IIとアウター・ガンダムだけだ。

もしコロニー内にジオンの勢力が集結していたら、いくらガンダム二機でも苦しいだろう。

「ニュータイプの扱いも難しいだろうし一旦引き上げよう、タロ君を呼んできてくれ」

「わかりました！」

クシナがタロを呼びに行った。

ノックをするも返事が一向に返ってこない。ためしに扉に手をか

けるとロックはされておらず、ドアは開いていた。

「入りまーすよー・・・」

中は、ベッドの上でタロがうずくまっていた。こちらに反応する素振りすらない。基本的に誰とも仲良くなるクシナだが、彼に対してはそれが通じなさそうだ。

「あの一、艦長が呼んでます、そろそろ出港するからって」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あのお！」

「大丈夫です、聞こえています」

「俺の判断は・・・良かったんでしょうか・・・」

しばしの沈黙の後に、ぽつりと言った。

「え？えくつと・・・」

先ほど目の前で寸劇を見せられたクシナは何といえればいいかわからず、そのままぼろつと「よくわからないなあ」と言った。

「そうですか・・・」

「えっ、えーつとー！」声が裏返ってしまった。若干面倒くささを感じながら『何かいい言葉』をさがす。

「あ、そうだ」

クシナはポケットから音楽プレイヤーを取り出し、スピーカーをONにして一つの曲を流した。

「Stay with you 星のように」っていう曲、いつも聴いてるんだ」

タロがクシナに連れられメインブリッジへ姿を現すと、ジョブ・ジョンは振り返った。

「準備は良いかい？」

「・・・・・・・・はい!!」

「よし、スラスター全開!!クシナとタロ君、ガンダムでコロニーのハッチを開けてくれ！」

タロは誰かに呼ばれたように外の景色をしばらく見て、自らの意志でアウターへ向かった。

正常に作動しない太陽光反射鏡が、コロニーの中に時間はずれの金

色の斜陽をつくりだしていた。

Z Mk-IIとアウターがマイクロ・アーガマから発進し、コロニー内部のハッチを開けた。

慎重に内側のハッチを通過すると、景色が人の住む空間から無機質な機械に変わってゆく。

太陽の暖かい光が影を潜め、温度の無い無表情な空間へ。

マイクロ・アーガマが無事通過し、内部ハッチを閉める。続いてZ Mk-IIが外部接続ハッチを開く。

ゆつくりと宙域に出るマイクロ・アーガマの後を追いかけるように、アウターは無重力の海へ

コックピット内の全周囲モニターが透明な黒に染まっていき、タロは悠久の時の中に溶けてしまいそうな感覚に包まれた。

「そっか・・・俺、この中にいたんだ」

長い刻を過ごした空間を外から見れば『こんなものか』という思いもこみ上げてくる。

「行つてきます・・・！」

マイクロ・アーガマへ着艦しようとスラスターを噴かした時

『ピピピピピッ』「!？」

コックピット内のアラートが鳴り、警告灯が点滅し

五つの機影が迫っていることを知らせた。

第3話 パトリシアくLimone Patricia ia Plukka)

カピラバストウコロニーに、一隻の戦艦が向かっていた。

ネオ・ジオン所属エンドラ級巡洋艦ゼーレーヴェ

メインブリッジのスクリーンにはCG処理された宇宙空間ではなく、ただ真つ暗な画面があった。しかしブラックアウトしているわけではない。

「今からプロトタイプ・キュベレイに入っていた記録映像を流すわ」クルーがブリッジに揃い、ゼーレーヴェ艦長キューベル・ポルシエによるフルスクリーン再生が始まった。

コックピット内の全天周囲モニターが起動し、格納庫内の映像が映る。

前方の外へ続くハッチに近づくと、機体の右手首からビームを発射し、宇宙が顔をのぞかせた。

「——っはあっ はあっ はあっ……！」パイロットの荒い吐息が漏れる。「これで…最後だからっ……！」

虚空に吸い込まれるように、フットペダルを踏み込んで格納庫を抜け出すと、真空の闇が360度の全天周モニター一面に広がった。

どこを指すわけでもない、ただあてもなく逃げるしかなかった。

『パピピピピピピピピッ』

警告音が鳴る。それはこのプロトタイプ・キュベレイがロックオンされたことを知らせていた。

幸か不幸か、前方に宇宙のゴミ留場であるスペースデブリ群の宙域があった。

「あそこしかない……！」

機体からミノフスキー粒子を散布させ、今にも激突しそうな幾多の戦争の残骸の間を縫うように進む。

突如フレームの端から光弾がかすめていきモニターがまばゆく光った。辺りを探ると、骸となった戦艦があつた。その中をゆるりと進む。

ヴンツ

「……ファンネル」

ビームの粒子が刃の型を成すと所構わず無造作に振り回し、静かにファンネルを射出した。

「きた……！」

後方に気配を感じ180°。旋回すると、ガルスJの宇宙用特化型でありゼーレーヴェ隊率いるダイアズの紫色の機体、ガルスFがあつた。

モノアイがこちらを捉え、速射ビーム砲を構える。

「今だっ！」

射出したファンネルで背後の壁を焼いて脱出、筒と化した骸の両側からその中心にいるガルスFに粒子を放った。骸が爆光をあげた。

「ダメかッ……！」

光弾の嵐は、スパイクシールドと速射砲によつて防がれた。ガルスFが硝煙を掻き分けこちらに迫る。

経路を定め逃走を図ると、新たな気配を感じた。

無重力で上下左右は皆無だが、上の方向から白い機体、R・ジャジャの先行試作タイプがビームサーベル片手に襲い掛かり、振り下ろされるソレをこちらもビームサーベルで防いだ。

「くうっ！」

鏢迫り合いの最中、左右からミサイルが飛んできた。

プロトR・ジャジャのサーベルを振り払いながら後方へ下がり、ミサイルを同士討ちにさせてその方を見ると、2機のガ・ゾウムがプロトタイプ・キュベレイを挟み撃ちにする形でミサイルランチャーを構えていた。

相手の姿が見えなくなった瞬間を狙い、R・ジャジャをくぐり上方を目指す。その後をガルスFが追い上げるように再び迫ってきた。

『逃がすな！ぜつたいに捕えろ！』

彼女の常人ではない空間認識能力がダイアズの声を捉える。

「ファンネルッ！」

ファンネルが再び戦場に舞うと、粒子がガルスFの四肢を切断し、コックピットを焼いた。ガルスFは全機能を停止し、ダイアズは骨も残らなかった。

『ビ————ッ』

それから、なんとか距離を離しつつけた彼女だが、それも終わりに差し掛かっていた。

「推進剤が、もうない……」

プロトタイプ・キュベレイの推進剤はなくなりつつあり、このまま逃げ切れる望みは薄かった。さらにバツの悪いことに、二機の機影が近づいていた。

「ここまでかな……」

ところが

「……?」コックピットのディスプレイは、一つの艦影を捉えていた。「あれは……補給……艦……?」

さらにズームしてみると、Space Supplies Delivery」とペイントされている、補給艦までの距離はそう遠くはない。

「ここでお別れだね……今までありがとう……」

プロトタイプ・キュベレイのタイマーが入り、パイロットは補給艦に向かって脱出した。

スクリーンが白くなり、再生が終了した。

ブリッジが静寂を取り戻すとキューベルは

「最後に映っていたあの補給艦に行つたとみて良さそうね……ブラックボックス回収地点と映像のデブリ群の軌道から方向を割り出せないかしら?」

とオペレーターのアルマに尋ねた。

「わかりました!」

アルマが計算をしている間、キューベルは眉間に皺をよせながら睨

み付けるようなまなざしを送った。もちろん彼女にではなく、この計算が割り出す結果に対してである。

「出ました！」彼女の活発な声で、キューベルの眉間の皺が消えた。「あくまで計算上ですが・・・火星圏、この艦の進行方向と重なります！」

「・・・なんとまあ偶然ですこと」キューベルは自嘲気味に口を歪め「いつでも配置につけるようスタンバつといて！」と言った。

≠

あたりまえの日々が崩れ去る。

九年前—— 2人の兄妹は、父と母を失った。

日常は戦火に焼かれ、それからは兄の手を掴んで温もりの無い闇を歩きつづけ、やっと辿り着いたのは屍が歩く街。

そんな中でも生きてこられたのは、再び日常を取り戻せたのは、兄が父と母の代わりになってくれたから。

『行つてきます』

いつも聞いていた言葉と共に兄はこの家を出ていった。

あたりまえの日々が、再び戦争に奪われた

なぜ行つてしまうのだろうか？

いつも淀んでいる景色が今は一層淀んでいた。

「港に行かなきゃ・・・」

誰に言うわけでもなく空に向かって吐き出し、部屋を出る。

力の入らない体を無理に動かし、ファナは港へただただ走った。

港には小型の戦艦が泊まっていた。群衆に埋もれながら許す限りの声を出して兄を呼んだ。

その声に応えるように、艦から2つの巨大な光があらわれた。太陽光の加減で金色に染まる港で、モビルスーツの白い装甲が乱反射を起こしていた。

彼女は光の一つに向かって無意識に叫び続けた。

喉から息しか出なくなっても、届くまで何度も

しかし、時間はずれの黄昏が港を染める中、無情にも夕口を乗せた舟はいつてしまった。

『もう、戻って来ない』

そう悟ったファナの頬にはスウツと一筋の轍ができていた。

どのくらい時間が経ったのか、港はいつもと変わらぬ様子を取り戻し、群衆もまばらになっていた。「あゝのゝ」

その中で、ファナはただ港を見つめてたたずむ。「おゝい…」

艦が去り、穏やかになった港の喧騒が、風と共にすり抜けていく。

「ねえっ！」

ファナはいきなり肩を掴まれた。反射的に手を振り払って振り返ると、声のトーンよりも大人びた女がいた。

「あつ、ごめん…！ちよつと気になっちゃって」

「あつ…えっ…？？」

「どうしたのかな？つて！」

大人びた、とは言ったものの、その振る舞いはまるで子供だった。オレンジブラウンのショート・ヘアにぱっちりときれいな青い目を開く仕草のせいで、より幼く見える。全体的に見れば大人ではあるのだが…危険を及ぼす人間でないことはわかってても、どこか浮世離れたその女に、ファナは警戒を解けずにいた。

「あの…誰ですか…？？」

「えくつとお…」

女は少しバツが悪そうな表情を浮かべ

「どっか隠れられるところないかな？」

質問には答えなかった。

彼女の屈託のない様相に、ファナの内に開いた穴が塞がっていくようだった。いや、単に蓋をしただけかもしれない。

このような女性をスラム街にひとり置いてけぼりにするわけにもいかず、ファナは思いつく限りの安全な場所を思い浮かべていた。

ファナのその様子があまり乗り気でないと思えたのか、彼女の顔に憂いが帯び、先ほど幼く見えた表情は一気に大人びていた。

「わかった！自分で探すね！」

「あつ、ねえっ！」ファナは今にも走り出しそうな彼女を引き留め

た。

「私の家でもよかつたら・・・」

彼女をここで一人にできない事もあり、ほとんど反射的に出てしまっていた。無意識になにかにすがりたかったのだ。

「え!?!いいの!?!」

さつきまでそんな素振りを全く見せなかったからか、彼女はクジが当たったように驚喜した。

もつとも、あまり街に出歩かないフアナには思い当たるところも限られていたのだが。

「うん、ちよつと散らかってるけど…誰もいなくなっちゃったから・・・」

「・・・じゃあ、お願いね!!」

曇ったフアナの顔を消し去るように子供のような顔に戻り、彼女はフアナのお願いを受け入れた。

「あの」

「うん?」

「名前、聞いてないなって・・・」

「あれ!?まだいってなかったっけ!?!」

彼女は青いクリツとした目をさらに丸くし、名前すら言っていないことに自分で驚いていた。

「リモーネ・パトリシア・プルツカっていうの!」

彼女は無垢な顔で笑った。

アサテイ家から再び話し声が聞こえてきた。違うのは二人とも少女の声と言うことだ。

「ごめんね!何か押しかけちゃう感じになっちゃって」

「いいんです!ぜんぜん!」

誰かが部屋にいてくれるだけでも、フアナの心は楽になる。

ちよつと散らかってる程度ではない部屋を見ても、彼女は嫌がるどころか、やつと落ち着きを取り戻したように安堵していた。

「あ、フアナちゃんっていくつなの?」

リモーネは何の前触れもなく聞いた。思いつき次第行動に移す節があるようだ。

「えーつと…13です」

「ええっ！大人っぽいねえ！8こも下なのに！」

「つていうことはリモーネさんは…21!？」

いくら幼く見えると言ってもせいぜい17程度だと思っていた。しかし彼女の成熟した身体を見れば成人はして当然とも思える。突然、ぐうううううとリモーネのおながが鳴った。

「ごめん、ここに来るまで何も食べてなくて…逃げるので精一杯だったから」

「え!?大丈夫ですか!？」

彼女は「あははっ」と力なく笑って「アイスとか…ある?」と聞いた。

「あるけど…アイスでいいの?」

「…ううん」

パトリシアは首を振って頬を赤らめた。

≠

エンドラ級巡洋艦ゼーレーヴェ艦長、キューベルはメインブリッジ中央の艦長席に座り一点を睨みつけていた。その視線の先には暇を捨て余している男が一人

「まだですかねえあとのくらいで着きますかねえ?」

暇を捨て余しているというよりは何かを待ち構えてそわそわと落ち着きのない様子である。そんな彼にキューベルは我慢の限界が近づいていた。

「…ちよつと」

「はい?」彼の目障りな挙動がピタリと止まりキューベルを見る。

「静かにしてくんない?」

彼はパイロットでない。さらに整備員でもなければ正規の乗組員ですらない。

とあるテストのため被験者の保護観察としてニュータイプ研究所から派遣された研究員であり、名をヨーゼフ・クビツェクと言う。

もつとも、その被験者は一週間ほど前に専用機で脱走して行方をくらましてしまったのだが

「いやあく、生きてる事がわかってどうにも落ち着いていられないんですよお」

彼は元から垂れた目をさらに垂らし、柔和な笑みを浮かべた。端正な顔立ちではあるのだが彼自身のふるまいですべてが台無しになってしまっている。

「なにニヤついてんのよきつ持ち悪い」

被験者が逃亡を図り、後を追跡したものの、専用機体は自爆し被験者は死亡扱いとなっていた。ところがクビツエク一人は被験者の死亡を受け入れず、キューベルに搜索を直談判していたのだ。

彼女は訴えを聞く気など毛頭なかったが、そこにタイミングよく「マシユマー・ゼロ」と名乗る人物から

『アウター・ガンダムを回収し、被検体と共に特定の場所へ届ける』よう指令書を受け取ったので仕方なしに搜索を再開したのだ。

宇宙空間で被験者を探す事は、砂漠の中から一本の針を探すくらい不可能である。

手掛かりとなりそうなブラックボックスをデブリ群の数ある反応の中からなんとか探し出し、キューベル自らがそれを解析した結果、被験者は火星圏の方へ向かったと予測できた。

そしてそれは奇しくも、アウター・ガンダムの回収ポイントと重なっていた。

「あ、あのー……えーつと…僕はここで待機していればいいんでしようか？」

「はあ？あんたも行きなさいよ」

「え？僕はパイロットじゃ」

「うるさい、あんたがごちゃごちゃ喚いている間も私は24個のブラックボックスを一人で解析したんだからね」

彼女は今にも噛み付きそうに静かに言った。

「で、でも艦長さんがわざわざやらなくてよかったんじゃないやあ……」

「この中でできるのがあたししか い、な、い、か、ら、ね！」

彼が呑気なことを言うのでキューベルは殺意まで抑えなければならぬ。銃があれば弾を撃ち尽くしていただろう。

「艦長！前方に巨大な建造物の反応があります！」

オペレーター、アルマの割って入るような報告でキューベルの殺意はどこかへ消えた。

「映像、ズームいける？」

「やってみます！」

CG処理された宇宙の映像が展開されたスクリーン上で、別ウインドウの拡大映像が目標物に寄っていく。

「ちよつと！これって・・・」

「コロニーじゃないっすか？しかもかなり古い奴、っていうか最初の試作タイプっすよコレ！」

キューベルが啞然としていると、ゼーレーヴェ隊の一人、ギユンター・エンゲルスが言った。

宇宙開拓時、スペースコロニーはバナル型、トーラス型、シリンドラー型の3タイプが存在した。

それぞれの勝手がわかってくると、人体に一番負担の少ないシリンドラー型が主流となり、バナル型とトーラス型は影を潜めていった。故に初期のタイプというには語弊があるが、彼らの認識としてはそんなものである。

「どうしてこんなところにあるのかしら？回収ポイントは確かにここだけど・・・」

「単に流されたんじゃないですかねえ」

新一・N・迫水が鼻をほじる様に興味なさげに言った。彼もゼーレーヴェ隊のパイロットである。

「じゃあ彼女はそこにいるんですね！」

「まだいると決まったわけじゃないわ」

キューベルは再び目障りになったクビツエクに衝動的に言い返した。

「艦長！」アルマが再び何かを捉えた。「ポイント付近に反応があります！」

レーダーにはUNKNOWNと表示されており、連邦軍の物である可能性が高かった。

これでは回収目標が連邦軍に渡ってしまう、それだけは避けたい。

「総員!!第二種戦闘配置!!」

高くも芯の入ったキューベルの声は、小柄とは思えないほどの声量があった。

「了解!!」

ゼーレーヴエ隊が出撃準備を整える中、クビツエクは再び右往左往していた。

≠

気が付けば時計の針は午後の6時を指していた。

まともな整備をされてないこのコロニーで微妙な調節は利かず、白夜を作りだしてしまう事すらあった。

ビビの入った机の上には解凍されたシチューやスープが並んでおり、リモーネは目を輝かせた。

「わーっ美味しそうだねえ!いただきませす!」

「ちゃんとしたやつじゃないから口に合うかわからないけど」

というファナの言葉もお構いなしに、彼女にとって久しぶりの食事はみるみる中へ入っていった。空腹が一番の調味料とはよく言ったものだ。

「あ、あの」

「ん?」リモーネの口は小動物が食事をするように膨れていた。

「その…さつき逃げてるって言ってたのを思い出して」

実際には思い出したのではなく、聞くタイミングが無く切り出せずにいた。それに、聞いていいことなのかもわからなかった。

「あー・・・」

リモーネが口の中を一気に飲みこみ、困ったような表情を浮かべると、子供のような幼さは影をひそめ大人の妖艶さがほんのりと醸し出された。

『やっぱり大人の人なんだ』とファナは感じた。

「なんて言ったらいいのかなあ…」話しづらいというよりはどうか

話すかを悩んでいるようだ。

「ご、ごめんなさい！無理に話さなくて大丈夫！」

「えっ、そう？」

じゃあまた今度話すね！ちよつと面倒な話だから」

幼さが戻った、かと思えば彼女はガクンと首を落とした。

「リモーネさん!？」

「え、ああ…急に眠くなっちゃって…」きつとずっと気が張っていたのだろう。彼女はそういう人なんだ。

「今日はもう寝てください。ご飯はしまっておきますから」

「うん…ありがとう」

リモーネは、皮が破け綿の出ているソファの上にそのまま横になり、静かに寝息をたてた。

机の上を片付け終わり、ファナもやつと気が抜けた。「綺麗な人だなあ」

なにかと世話しなかったリモーネの、あどけなさの残る寝顔を見て、ファナに安息の時間が訪れた。

今日この一日は彼女の心に刻まれるであろう。一生忘れることのない傷として

≠

「総員!!第二種戦闘配置!!」

ゼーレーヴェ隊が出撃準備のためモビルスーツデツキヘ向かう中、急遽出撃の決まったクビツェクは慌ててノーマルスーツに着替えていた。

ニュータイプ研究所の職員ではあるが、過去に入隊経験があるクビツェクは、ある程度モビルスーツの操縦ができた。しかし基礎の基礎しか学んでいないので戦場に出てしまえば結果は目に見えた物だろう。

なんとかノーマルスーツを着てデツキヘ向かうと、ゼーレーヴェ隊長、カルベルタ・東條が鋭い眼光をクビツェクに向けた。被験者の追跡時にかつての隊長ダイアズ・スーンが死亡し、二番手であった東條が隊長になったのだ。

「わざわざ死亡扱いの人間を見つけてなんになるのか・・・」彼は静かな苛立ちを見せながら吐き捨てた。

「実験はすでに成功済と聞いたが？なんの実験かは知らんが」

「彼女達の、被験者と実験体の比較データを取るためです」

「まあいい、ダイアズは上からの命令としか言っていないかった」

「いや、ちゃんと説明は」

「あの頭では理解できなかったんだろう」

「あのおく出撃するんじゃないんですかあ〜？」

モビルスーツに搭乗せずにデッキで話し込む二人に、エヴァ・アルバトロスの気の抜けた声がR・ジャジャのコックピットから投げられた。

「エヴァはガザDで出撃」と言っつて、東條は自身の専用機ともいえるモビルスーツ、ベルドルフに乗り込んだ。

ゼーレーヴェ艦のカタパルトデッキからベルドルフ、先行試作型R・ジャジャ、ガ・ゾウム2機、ガザDが発進しコロニーのUNKN OWNへ向かった。

「あれは・・・」

先陣を切った東條がモニター上のコロニー付近に何かを捉えた。

「こちら東條、アンノウンは連邦軍の戦艦かと思われる。それと」

ズームした映像に、東條は戦慄した。

「ガンダムが既に動いている、用心してかかれ」

第4話 アシカ出撃くteam sea Lion

「ガンダムが既に動いている、用心してかれ」

地球圏を遠く背にした殆ど未開拓の宙域で、東條は静かに言った。

ゼーレーヴエ隊は、連邦の物と見られる小型戦艦とガンダムタイプのモビルスーツ二機と対峙していた。

標的であるアウターの眼が獲物を捕らえたかのようにこちらに向いている。

『こいつ・・・なんだ・・・?』

アウターから来るプレッシャーには薄気味の悪い物があつた。中身の無い、まるで物に宿つたかのような圧の無いソレは、辺りに広がる暗黒物質をじわじわと侵食していくかのように手を伸ばしてきていた。

東條が進行をためらっていると、プロトR・ジャジャから回線が開き、ギユンターの声がコックピット内に流れてきた。

「隊長!ここはV字で行きますか!」

なぜこいつにはこいつも緊張感というものが無いのかと蔑むも

「ああ、こちらもこの機体に慣れていないしな」と返した。

その傍らを、青紫色の機体が彗星の如く標的へ流れて行った。

「あつ!」それはクビツエクの乗ったガザDだった。「あいつ勝手に!!」

慣れぬ状況下、それも地球圏外ともなれば、モビルスーツ乗りですらない彼はただパニックを起こすしかない。彼が強運の持ち主であることを祈るばかりである。

「構わん、これで向こうの出方が見れるというものだ・・・!」

東條はクビツエク除く全機に回線を開き

「ガ・ゾウム二機は標的を挟むように大きくV字に展開、ギユンターはミノフスキーを散布しながら囀の後に続け!!」恐怖心を振り払うように叫んだ。

「了解!!」

迫水とエヴァの乗る二機のガ・ゾウムが鈍角のV字を描きながら標的を挟むように向かっていき、プロトR・ジャジャが緩やかに進撃していった。

「さて・・・パトリシアを、そしてそのアウター・ガンダムをこちらに渡してもらおうか!」

ミノフスキー粒子の舞う宇宙で東條が唸り、ベルドルフのモノアイが明滅した。

≠

不明瞭ながらも、タロには相手の言い分は聞こえて、いや、感じ取っていた。

《ね〜パトリシアって誰だと思う?》

クシナの声がZ Mk-IIからの接触回線に乗っかり聞こえてくる。

「さあ・・・って、え?!」

《可視光通信だよ、モールス信号。奥の方で小っちゃくピカピカ光ったの見たでしょ?》

タロとは違う手段でクシナも受け取っていた。それにしてもよく星の瞬きと見間違いそうな光の明滅を観察できたものだ。

とは言っても大気のない宇宙空間では星は瞬かないのだが。

「!?」

タロが蜘蛛の様に周囲に意識を張り巡らしていると、突然糸を掻き乱すような別の意識の波が、鉄砲水の如く押し寄せた。

それは、モビルアーマー形態に変形し、メガ粒子砲を連射しながら突貫してくる敵機体だった。

「くっ」

タロはなんとか躲した。が、それは不注意以外の何でもなかった。青紫とピンク色の敵機体、ガザDがスラスターから尾を引きながら彗星の様にマイクロアーガマへ向かっていった。

「しまったー!」

ガシイイイイイン

すんでのところでクシナ、Z Mk-IIが両アームで受け止め、そのままメガ粒子砲の砲身をマイクロアーガマから逸らした。

《こっちはいいよ！それより後から来るやつ!!》

ガザDのスラスターの尾に引きずり出されたように、白い敵機体、プロトR・ジャジャがアウターの全天周モニター前面をベタリと支配した。

左アームのマニピュレーターには、フェンシングソードのような円型の鏢のついた柄が握られ、その中心からそれらしくビームの粒子が型を成すと、一気にコックピットを挟る様に振り上げた。

「うああっ！」

間一髪、フットペダルを踏み後方へ下がり、サーベルの先端は機体を掠めることなく宙を斬った。

その隙にアウターは両前腕部からグリップを射出、二刀流の構えをとった。

R・ジャジャも後方へ下がり間合いを取ると、ビームライフルを構え引き金に指をかけ、粒子の球体を生成するとあらぬ方向へ打ち上げた。

「何だこいつ・・・？」

いくら戦闘経験がないとはいえそう感じるのは当然だろう。光の弾をこちらに向ければ隙ができるなりダメージを負うはずだ。なぜそれをせず上に、機体の向きから見て何も無い上方向に打ち上げたのか

「!!」

アウターを挟むように、両方向からミサイルが飛来した。あれはただの合図でしかなかった。

スラスターを瞬間的に最大出力にし後方へ避けると、目の前で先頭一対のミサイルが衝突し、爆発した。

しかし安堵する暇もなく、第二波のミサイルが自動追尾を開始、最大速度のアウターの後を追いかける。

撃ち落とそうにも、戦闘を全く想定していなかった装備のため敵機が持つようなビームライフルは持ち合わせていない。

かといってビームサーベルで斬ればダメージを被るのは必須、それに一つ斬り落としたところで次のミサイルが直撃するのみである。

もちろん、機体がそれを凌ぐ俊敏さを発揮すれば話は別なのだが。「そうだー!」

「さあ逃げろ逃げろおー!」

ギョントアーが呑気に笑いながら目で追っている、アウター・ガンダムがミサイルの集団に追いかけられながら大きく弧を描くように旋回し、こちらに向かってきた。

「血迷ったなあっ!」

これを好機とし、迫りくる標的にビームライフルを乱射する。しかしアウターは両手首をドリルのように回転させ、光弾はシールド状になったビームサーベルに弾かれていった。

そしてコックピットの全天周モニター前面をアウターが支配したかと思うと瞬間移動したかのように消失し、かわりにミサイルの集団が姿を現した。

「あ…これってそういう…!!」

完全に油断していた。引き金を引き続けていくつか撃ち落とそうにも、直撃は免れることはできなかったかに思えた。

ミサイルの塊は機体に接触することなく、はるか後方から電磁誘導で射出されたニードル状のルナチタニウムの塊に撃ち落とされた。

遙か前方で、東條がギョントアー機に迫るミサイルの雨をベルドルフの180mm電磁砲で撃ち落とすと、迫り来るターゲットに照準を当てていた。

≠

その頃、マイクロ・アーガマのモビルスーツデッキでは一機のジム・セークヴァアを出撃させようと、コロニーで中破した二機のパーツ換装作業が行われていた。

「まだか!?!」

グランが今か今かと出撃を望んでいた。

いくらガンダムタイプが二機と言っても5対2の戦況ではいても

たつてもいられないだろう。

「あのねえ、そんな簡単に終わるわけないだろ！プラモデルじゃないんだから!!」

彼の無茶な要求にメカニック班のオリガ・テラスが威勢よく返した。「つたくこれだから男は・・・我慢てことをもつと知れつてのー!」人の生死がかかっているのに随分と呑気である。しかしそれも無理はない。

エウーゴ、アクシズ、テイターンズの三つ巴の抗争もいよいよ総力戦という最中、偵察が名目の船出では殆ど必要最低限の人手しかないのだ。

「はい換装終わりーほらさっさと行け!」

「お、おう」

少し躊躇しながらグランがコックピット前まで差し掛かると

「ツさっさと入れ!!!」

後ろから彼女の全力の蹴りが入った。無重力じゃなかったら尾骶骨が砕けていることだろう。

グランの搭乗したジム・セークヴァアがカタパルトデッキへ入り、出撃の態勢に入る。

「グラン・マックイーン、ジム・セークヴァア、出る!」

戦場に新たな戦力が加わった。その時、カタパルトデッキからモビルスーツデッキに流れる影があった。

「ふうく…きさて、後はこっちで…ん?」オリガはノーマルスーツを着た『生身』の人間の姿を捉えた。「……………は?」

ハッチを閉めようにももう遅く、とりあえずの手段として銃を構えた。

「あ、艦長・・・えーつと・・・敵の侵入を許してしまいました。すんません」

「敵が侵入!」

オスカーが眼鏡の奥から素っ頓狂な声を出した。メカニック班からの通信を受けた彼ら、ジョブ・ジョン、オスカ、マーカーは何とか状況を整理していた。

《はい、ジオンのノーマルスーツを着た人間が一人侵入してきました……》

「ん？一人？」

一人で白兵戦でもしようものならそれはただの自殺行為でしかない。休戦か？なら信号をあげるなりすれば済むことである。わざわざ生身の特攻をする意味はない。侵入者は何をしに来たのか皆目見当がつかなかった。

「装備は？」

《一応銃は持つてるみたいですが……動く気配がありません》

「……死んでるのか？」

《確認してみます》

「どちらにしろ独房にぶちこんどけ」

その時、Z Mk-IIから回線が入った。《ごめんなさい！》

「ど、どうした!？」

《いま敵機と交戦中だったんですけどパイロットが脱出してアー
ガマにつ……!》

あいつか……

とオスカ、マーカー、ジョブ・ジョンの三人は一字一句変わらず頷いた。

苦し紛れの末にパニックを起こした故の侵入であろうことは想像に容易い。とりあえずは放置しても問題はないだろう。

「ん？いま敵機と交戦中って言ったよな？」ジョブ・ジョンが何かを思いついた。

《は、はい!》

「とりあえずそれカタパルトからデツキに入れてくれ!ジムとパーツを換装させてもう一機出す!」《了解!》

メカニックのオリガがこれを聞いた暁には、真っ先にメインブリッジに首を絞めに向かうだろう。

「……了解」

ところが意外にもオリガは素直にこれを受け入れ、煙草に火をつけ何もせず5分ほど経過した。

「パーツの換装終わりました」

≠

「あれ？なんか増えてるよー？」エヴァだ。

ガ・ゾウムから射出したミサイルの軌道を目で追っていると、敵艦のあたりに新たな敵機体が出現していた。

「撃った方がいいのかなあ」と眺めているとその新機体、ジム・セークヴアがこちらに狙いを定めた。

「ひっ！」と子ネズミのような悲鳴を上げながら照準を合わせビームガンを放つも、クモの糸を潜り抜けるように迫ってきた。

「こつちのものなんだよ・・・あん中じゃなけりやなあ!!」

カピラバストウ・コロニーの慣性から解放されたグランは蝶のように舞い蜂のように刺す旧世紀のボクサーの如く体の自由を取り戻していた。

「ひいっ！」

射撃を得意とする彼女はロールアウトされたばかりの試作機であるガ・ゾウムでの接近戦に耐え難い物があった。思わずもう一人のガ・ゾウム乗りに助けを乞うも・・・

「ほれほれえー！接近戦ならこつちが上だからね!!」

マイクロ・アーガマを挟んだその反対側で、Z Mk-IIと衝突していた。クシナの駆るZ Mk-IIは軽く戦闘狂染みながらビームサーベルを敵機に叩きつけていた。

もう一人のガ・ゾウムのパイロット、迫水は自身のビームサーベルを盾に申し訳程度の抵抗をさせられている。

「・・・こんのやるおくガンダムだからって調子に乗りやがって」

エヴァからの通信に応える余裕は無く、連撃を凌ぐ度に迫水は苛立ちを募らせじわじわとボルテージを上げていた。

これだけ馬鹿みたいに振り回していれば隙というものは必ずできる、と言ってもすでにほとんど隙だらけの状態ではあるのだが一矢を報いるにはまだ十分な余裕はなかった。

真つ向勝負は不可能と思ったエヴァは機体をモビルアーマー形態に変形させ、背後から飛んでいくビームを眺めながら敵機と距離を

とっていた。その先に

「助けてえ〜!!」

「ええっ!?ちよっ!ちよっ!!」

ギョントターの駆るプロトR・ジャジャの姿があった。先ほどアウターと交戦したものの、迫りくるミサイルの雨を東條に撃ち落してもらい結果としては死なずに済んでいた。

アウターを東條のベルドルフと挟み撃ちにしようとしていたところに敵機に追われるエヴァ機が突っ込んできたのでそうもいかなかった。

エヴァと共にジム・セークヴァを相手にすることとなってしまうた。

「ちいっ!」

いつのまにか2対1の状況になってしまったグランは追撃を止め、相手の様子を伺うことにした。

ジム・セークヴァ

連邦軍の主力機の名を冠し、エスペラント語でNextを意味する“Sekva”とつけられたこの機体は、次期主力機開発競争の中でロールアウトされた物である。

しかし敵機も次期モビルスーツの試作型であり、機動力は互角と見える。それが二機もいるのだから侮ってはこちらが撃墜されてしまうだろう。下手に手出しはできない。

「こちらグラン、クシナ、聞こえるか」

《このっ!このっ!!このおっ!!!》

彼女は絶賛交戦中の様だった。それもかなり一方的な。

「ちっ」

再び舌打ちし、正面の白い白兵戦型機と黒い射撃型機という正反対の機体を睨む。完全に弱点をカバーしあえる二機を相手にしては易々と手出しはできない。

お互い新型同士という点からか、場は膠着状態に入っていた。

さて、どう戦う

向かって右側、黒い射撃型がゆらりと両肩のウエポユニットをこ

こちらに向け、ミサイルを放つ

かに見えた刹那、白い白兵戦機がビームサーベルを構え、上半身を前のめりにし「突き」の姿勢で迫ってきた！

「なっ!?!」

回避運動に移ろうとすると、ガ・ゾウムに機体を掴まれ動きを封じられてしまった。

『こいつ、心中する気か!?!』

と思えばホールドが解かれ、ガクンツと背後から衝撃が襲った。

ガ・ゾウムがジム・セークヴァを背後から思いつき蹴り、前へ押し出したのだ。

サーベルの先端が迫り、コックピット内に光が広がってゆく。後コナマ数秒でグランの身体は宇宙の海に溶けていく

事はなかった

白い騎士はいつの間にか姿を消していた。前面には雄大な宇宙が広がっているだけで、遠くに小さな光が瞬いていた。

呆気にとられていると、再び右肩をガシンと掴まれ

《よう》

青紫にピンク色の機体からニロンの声がした。彼がプロトR・ジャジャを蹴り飛ばしていた。

タロは敵部隊隊長、東條と交戦中であつた。

ベルドルフの180m電磁砲から射出されるルナチタニウムニードル弾を避けながら距離を詰める。しかし蜂のように舞いながら針を打ち込んでくる相手だ、そうそう懐に入らせてはくれまい。

音速を超える速度で打ち出されるニードル状のルナチタニウムを食らえば、いくらアウターの装甲と言えども無事で済むはずはない、この金属はモビルスーツの装甲に使われているガンダリウム合金でもあるのだから。

お互いつかず離れずの攻防が続いていた。長期戦は免れないかと思われた時

《パトリシアをこちらに渡して頂ければ引き揚げます》

敵機からの通信が入った。いつの間にか接触回線が取り付けられていたようだ。

「……パトリシア？」

少なくとも数時間前マイクロ・アーガマ隊に加わったタロには聞いたこともない名前だ。

《それと、そのガンダムの回収命令が出ている。パトリシアとガンダムの二つをこちらに渡してもらえば我々はすぐにでも引き上げる》

その条件は飲むべきではない、タロは漠然と思った。それに敵機の男からはわずかに焦りが感じられた。押し殺した微弱な焦りが。

「パトリシアなんて人は知らない。それに、これを渡すことも出来ない!!」

《……なら用はない、死ね!》

回線が切れると、敵機は人が変わったかのように電磁砲をマシンガンの様に連射し始めた。

「なっ!」

最早乱れ撃ちであり相手がどこを狙っているか、いや、どこも狙っていないので弾道が全く読めなくなった。集中し直す隙も与えられなかったタロは無心で逃げるしかない。

激昂にも似た感情が東條を支配していた。

パスン

ニードル弾が切れるとバックパックから電磁砲を切り離し、そのままアウターの背後に廻り、ビームサーベルでコックピットを確実に狙う

空を斬った

アウターは「上」から来た。矢の様に鋭角に。

東條は間一髪で避けるも矢はコックピットをかすり、全天周モニターの中から映像ではない宇宙が顔をのぞかせ、彼の肝は一瞬にして冷えた。

「まあいい……」

本能的な恐怖を感じて機体の奪取任務の放棄を決めると、目的地で

あるコロニーを一瞥した。

ベルドルフから信号弾が放たれ眩い光が辺りを照らし、戦闘がピタリと止んだ。しかしクシナはその明かりを視界に入れることはなく、Z Mk-IIは相も変わらずビームサーベルで敵機を叩くことに夢中になっていた。

《おい!!!》

「なに!!」

コックピットの内部スピーカーからニロンの怒声が爆発し、彼女の手は止まった。

《敵さんが停戦信号を出した。そこまでにしときなよ》

「こいつまたっ・・・てあれ？」後方へ振り返ると先ほど一戦を交えた機体があった。「ニロンだよね？どしたのそれ？」

《変な奴が乗り捨てたのをパクったんだよ》

二機の話し込む隙を見て迫水の乗るガ・ゾウムは撤収していた。

「あーあいつ逃げたな!!」

《停戦信号見落としたら家族共々死刑らしいぞ、やめとけ》

「・・・あいつら何しに来たんだ？」

突如襲来した敵部隊が引き上げていくとグランが呟いた。

≠

《はあく?!取り逃がしたあく?!》

ギンター達隊員が帰還しメインブリッジ手前まで来ると、キューベルのチェンソーのような金切り声が聞こえてきた。どうやら一足先に戻った隊長の東條がこっぴどくお叱りを受けているようだ。

《あんた何やってんの?!両方取り逃がすなんてバカじゃないのこのバカ!アホ!!ノロマ!!!》

決して彼自身はバカでもアホでもノロマでもないのだが、何一つ手土産を持たずに戻ってきたおかげで怠け者の烙印を押されてしまった。

「うわぁ・・・入りたくねえ・・・」

こういう時ほど日常で面倒くさいことはない。ヒスを起こしたら冷めるまで待つしかなく、ギンターが入るのをためらっていた。

「なにやってんだよ早く行こうぜ」

キューベルのチェーンソーボイスが鼓膜に届いていないのか、どちらか問えば彼のほうがノロマという言葉にはあっている迫水は、ぬるりと扉を開け修羅場の中へ突入した。

これで罵倒も少しはやむかに思われたが、彼女は一向に気にせず東條を切りつけていた。

「艦長」怒号の嵐の中で、東條が静かに言った。

「なに」

「アウター・ガンダムは捉えられませんでした、もう一つの標的の見当はついています」

「……どい」

キューベルは態度を1ミリも変えず、キンつと凍った声で返した。

「確証はありませんが」と言って東條はモニターに映るコロニー、カピラバストウを指さした。「私の見立てでは敵艦にパトリシアはいません」

「へえ、なんでわかるの」

「アウター・ガンダムのパイロットのおかげです」

「あ、あのお」

場がシンとしてひと段落着いたころ、エヴァが今にも消え入りそうな細々とした声をあげてゼーレーヴエ隊全員の帰還を知らせた。キューベルはそれをちらつと見ると

「進路、依然変更なし！」

と舵を取った。

第5話 無題

「なぜ火星圏なんだ？」

「えっ？」

火星圏へ向かう補給艦の操舵席で、シヤアは唐突にカーン・J r.に尋ねた。「いくら連邦の目が届かないとはいえ、これでは物資の補給もままならないだろう？」

「あ、ああ、アクシズからの援助があるからな」

「ほう、それなら君の『姉』はよっぽど肩入れしているらしいな」

「いや・・・正確にはグレミー・トトという者からだ」

「グレミー・トト？・・・ハマーンの直属か？」

「詳しくはわからない、顔くらいしか・・・指令書でしかやり取りしていないし・・・」

なんともあやふやな情報にシヤアは眉をしかめた。

「アクシズの人間というのは間違いないのか？」

「それは間違いない。ただ・・・随分若く見えた」

「そのグレミー・トトとやらは誰かの差し金なのか？でなければ」

「グレミーを騙った何者かの指示・・・？」

「まあいいさ、まともな補給があるという事はアクシズと見ていい。それより、なぜ火星圏なのかを教えてくださいとありがたいんだが」

シヤアはそれまで僅かに外していた視線を明確にカーン・J r.の目に向けた。

「他に目的があるのか？」

アウターガンダムを勝手に一人の少年に渡したこの男をどこまで信用しているものか・・・とカーン・J r.が口ごもるとシヤアは「私もおまえと目的は同じはずだ」と適当なことをぬかした。

「えっ？そ、そうか、そうだな、疑ってすまない」カーン・J r.は容易く術中にはまる。

「いや、疑われて当然のことをしたのだ。すまないと思っている」

「そ、そうだな・・・まず」この時、カーン・J r.には視えてなかったが、シヤアの口元は、わずかに歪んでいた。「我々が火星圏に行くの

は、さらに遠くへ、木星へ行くためだ」

「ほう？」

「シャリア・ブル、パプテマス・シロッコ：お前にとっても馴染みはあるだろうか？」

「・・・ああ」

「この二人の共通点はニュータイプであり木星帰り、つまり」

「ニュータイプは木星に大きく関係しているということか」

「そうだ。なぜそうなるのかは見当もつかないが・・・そういう素質を持った粒子や細菌が漂っているって話もある」

「何と眉唾物な話題だろうか。いや、広大な未知の領域においてはそれも言い切れないが。」

「・・・あと、これはあまり知られていないことだけど：木星に行っただ人はほとんど必ずと言っていいほど『何か』を視るんだ」

その時、存在を消してたカーン・Jr. の部下ウイノナが口を開いた。「アリエス基地から通信が入りました」

「よし、繋げ」

回線がつながると次の瞬間、『アリエス』という美麗な響きから想像もつかないほどの醜悪なブ男の顔面がデカく映し出され、カーン・Jr. は思わずひっくり返りそうになった。

「・・・そうか、この男がグレミーか」

「そんなわけないだろ!!誰だ貴様!」

髪が一本もない頭に、瞼と顎に随分な贅肉が着いたずんぐりとした顔は見れば見るほど醜悪な面構えだ。

《お初にお目にかかります、カーン・Jr. 様、そして・・・》瞼で殆ど隠れた眼球がシャアを見た。《シャア・アズナブル大佐、いえ・・・総帥》

シャアの顔が真剣身を帯びる。

《私はヨドルフ・ヒトリーン、こちらで総帥の代わりを務めさせていただきます》

旧世紀の独裁者の名を足して割ったような名前の男は画面を通して臭ってきそうな下卑たにやけ面で自己紹介をした。

「グレミー・トトという者に代わっていただけませんか？」
するとヒトリーンの表情からそれまでのにやけ面が消え、いぶかしげな表情になった。《グレミートトという者はこちらにはおりませんか……》

人間離れた顔をしているが割と表情豊かである。案外正直者なのかもしれない。

「そのはずはない、この指令書はそちらがよこしたものだろー！」
お互いに共有された画面上にアリエスからの指令書が表れるとヒトリーンは訝しげな表情でしげしげと舐めるように見た。

《確かにこちらから送ったものですが……確かにグレミー・トトと書かれていますな》 彼の頭上にはいくつものクエスチョンマークが浮かんでいた。どうやら本当に身に覚えがないらしい。

「まあいい、そちらが送ったので間違いなければ問題はない。今更引き返すわけにもいかんさ」

《はあ……ではお待ちしております》
「ヒトリーン、私は本来の目的を聞かされていない。火星圏で何をしているのか教えてもらえないか」
ヒトリーンの顔に再び臭いときのスマイルが戻り《ジオンの再興ですよ》と言って通信が切れ画面が暗転した。

「私はその方法を聞いたんだがな」やれやれとでも言うようにシヤアは肩をすくめた。

≠

《パトリシアはどこだあああああああ！》
クルーがマイクロ・アーガマへ帰艦しメインブリッジに近づくと、騒がしい声がドアの向こうから豪速球で叩きつけられた。どこぞの誰が発狂しているのか。

「パトリシア？ 誰？」
先の戦闘でそれぞれの神経をすり減らした彼らは今すぐにでも眠りにつきたかった。クシナにとっても消化不良に終わり、彼女はいささか不機嫌であった。

《だから何度言ったらわかるんだこの野郎！》《鎮静剤早く！》

一人の発狂した青年が数人がかりで捕らえられている、それがメイブリッジに入ってまず飛び込んできた光景だった。

「俺ちよつと休みたいんだけど」

ニロンは拳を握りしめると騒動の中心人物へ近づき

「ただ今もどりましたあああああああ!!」

喧騒の源である男を殴り飛ばし「じゃあ俺ちと休憩しますんでまたなんかあったら」自分の個室に向かっていった。

「で？誰なんだこいつは」ニロンの拳を食らい、気を失って無重力に身を任せている男を見てグランが言った。

「君が出撃した時に侵入してきたんだよ」

オスカの手には鎮静剤が握られていた。ニロンが殴らなければあと一步で針が男に突き刺さっていたのだろう。

「・・・あ」

「あ？どうした？」

タロが何かを思い出して口を開いた。

「いや、あの…さつき戦った人が、パトリシアを渡せば引き上げるって」

「そんなこと言われても知らないもんは知らないよ！」クシナは子供の様に頬を膨らませた。

「とりあえずこいつしまつときますわ」

メカニック班のオリガは、この男を独房室へ運んでいた際に意識を取り戻して取り乱した彼と一悶着を起こしていた。

「また暴れたら面倒だから誰か手伝ってよ」帰艦したばかりの彼らを巻き込むように言った。

「おい、お前も手伝え」

「え？あ、はい！」

オリガが気を失っている男を肩で担ぎ、グランとタロはその後をついていくように独房室へ向かう。その道中

「モビルスーツに乗るといつもあんな感じですか？」

タロの漠然とした質問に、グランは呆気にとられた顔を向けた。タロ自身のボキヤブラリーでは先ほど味わった感触をうまく言語化で

きない。

「なんていうか・・・戦っているうちに自分に馴染んでいくというか・・・」

「そりゃ何戦かやった後の話だ。たった一回の、いや二回目か、その程度の場合で慣れてくなんてことはほとんどねえ。」

よつぽどセンスがあるか、お前みたいにニュータイプとかいう人種じゃなけりやあな」

「開けて」

いつの間にか彼らは目的地前まで来ていた。オリガは男たちの会話などお構いなしとでも言うように断ち切り、彼らを顎で使った。

「ニュータイプって言われんのはイヤか？」独房の扉をあけながらグランは言った。まるで尻にしかれた亭主の様な状況下なので格好がつく物もこれではつかない。

「いい気はしないですね」

半ば情けない背中に、タロとしてはもう少し入り組んだ話をしたかった。それは、ベルドルフとの交戦中でのことだ。

背後から迫る敵機を認識した途端、タロの纏う肉の鎧は、彼の意志に応えるようにスラストを噴かして翻し、身を槍のようにしてベルドルフへ向かっていったのであった。

『モビルスーツが自分の意志を読むことなんてあるんだろうか：：あの時、僅かだけど、気のせいかもしれないけど早く動いたような・・・』

なんてことを考えている間に気を失った男は独房室に放り入れられた。

「んじゃ、戻ろっか」オリガはまるでやっと一仕事終えたかのような爽やかな女の顔をしていた。

≠

クビツエクが連邦軍の戦艦の独房に放り入れられたことなど露知らず、ゼーレーヴェ艦はカピラバストウコロニーへ入港していた。

「うっわ・・・」

「ほんとに行くんですかあ・・・」

コロニーの様子を見たキューベル艦長がドン引きし、エヴァが雀のような声をあげた。

砂塵の舞うスラム街はどう見てもごみ溜めそのもので、果たしてここにターゲットがいるのか、というよりいてほしくない思いが彼らに浸透していった。

「すぐにもこんなところ出たいけど・・・アルマ！アレ出して」

「はいー！」

オペレーターのアルマがアレという言葉だけで即座にメインスクリーンへ指令書を映し出し、そこには次のような文字が羅列していた。

「エンドラ級ゼーレーヴェ艦長 キューベル・ポルシエ殿

貴公ラ海驢隊二次ノ通り指示ス

リモーネ・パトリシア・プルツカノ回収ヲ命ズル

尚、アウター・ガンダムノ回収ハ此方デ別動隊ニ指示スルノデ必要

無

以上

レヴァハン・M・

ヴィルヘルム」

つい先ほどのことを地獄耳で聞きつけたような指令書に一同はため息をついた。

「意地でも回収しろってことよ。各員ノーマルスーツを着て！」

気を取り直すようにキューベルはパンツと手を叩いて指令書に従うことを決めた。

「モビルスーツに乗った方が早いのでは？」東條だ。

「どういうこと？」

「誘き出しやすいという事です」

彼女は少しの間東條の言葉を内で反芻して熟考し「先にエヴァと迫水二人が聞き込み！3時間手掛かりをつかめなければアンタとギョンターがモビルスーツで出て！以上！」

「えええええ?!おれえ・・・?」

「がぞーむちゃんがいいなあ・・・」

迫水は素足で虫を踏みつぶしたような顔になりエヴァも迫水程でないにしろ不満を漏らしていた。

「うっさいわね！艦長命令なんだからさっさと行きなさい！！」駄々につきあう道理はない。

キューベルが金属バットで殴ったような声で彼らの反論を叩き潰すと、先発の二人はぶつくさ言いながらノーマルスーツで街へ赴いた。

「それにしてもこの別動隊ってなんすかね？」ギョんターが纏め上げた茶髪をポリポリと掻きながらカットをかけるように聞いた。「それにこのレヴァハン・M・ヴィルヘルムって誰っすか？」

「アクシズ…ネオ・ジオンのニュータイプ研究所の所長らしいわ。詳しくは知らないけどね」

「なーんでそんなところから指令書が来るんすかねー」

「指令じゃないわ」キューベルは懐から煙草を取出し火をつけた。「ただの雑用よ」

≠

マイクロ・アーガマのモビルスーツデッキではメカニック班がアウターの装甲を取り外し機械構造を調べていた。

なぜかというそれは次の通り、オリガが男を独房へ放り込んでメインブリッジへの帰路でのこと

「君さあ、タロ君だっけ？さっきコイツに言っただけどき…えーつと、なんだったっけ？」「コイツ」のところでグランを指差した。「えつと…モビルスーツが自分に馴染んでいくっていうか」

「そうそうそれぞれ！それさあ、ちよつと引つかかるんだよねえ」オリガは体をくるりとタロの方に向け、後ろ歩きになった。「あんたニュータイプなんだっけ？」

「…はい」

「ならちよつと見てみたい事があるから付き合ってよ！グラン、あとよろしく」

後ろに進んでいた足をぴたりと止め、タロを捕まえるとグランを残して来た道に戻る様に流れていった。

そして今に至るのだが……

「ん〜……タロ君」装甲が外され内部の機械構造が剥き出しになったアウターがオリガの目に映っていた。「こいつの装甲外して何かおかしいと思っただらさ、アナハイム製とそれ以外のパーツが混じってんのコレ」

「ええつと、それは……?」

モビルスーツ、ことにそのパーツといえばコロニーでジャンク屋が拾って売っていた物でしかないタロにとって、メカニックのことなど無知の領域である。

「んー何って言ったらいかなあ……簡単に言うとな連邦とネオ・ジオンの機械構造がごっちゃませになつてんの。わかる?」

「はあ、まあ」

噛み砕かれた説明は幸いにも伝わった。

「あの変なモビルスーツもいじったから気付けたようなもんだけど……」

一方その変なモビルスーツ、ガザDには同じくメカニック班がとりついていた。その中から一人、といつても4人程度しかないが、眼鏡のガラスを割りそうなくらい目を大きくしながらヒヨコのような声で見た目も幼い新米のファイア・ヤンチャイが彼女らのもとに流れてきた。

「オリガさん! やっぱりですつ! 同じパーツが使われてますつ!」

「だよねえ。あー、こういうのってややこしいんだよなあ……ちよつとまだそつち見てて」「はいっ!」ファイアの小さな体がまた小さくなつていった。

「あの」

「ん?」

「なにがややこしいんですか? なんとなくはわかりますけど」

「ああ、兵器は軍が全部を作っているわけじゃないからね〜」

「そうなんですか」

「だいたい兵器つてのは軍じゃなくて製造会社が殆ど造るんだよ。

例えば一年戦争の時は……連邦だったらアナハイム・エレクトロ

ニクス、ジオンだったらジオニック社とかツイマッド、MIPとかいった会社がモビルスーツとかモビルアーマーを開発してただけど、ほら、連邦が勝ったじゃん？

だから今は実践に投入されるモビルスーツはアナハイムが殆ど造ってんじゃないかなあ？」

「・・・なんで、そんなことするんですか？」

「え？」

「だって、同じところが造ってるんでしょ？それだったら戦争なんか起きないんじゃない？」

「ほお、キミは言葉を知らないだけで頭はいいんだねえ」

いかにも予想外だという反応をしたかと思うと彼女はタロの肩をがっしりと掴んだ。「でもね…これは、今のキミが知る事じゃない」

タロに死の商人の話はまだ早い、オリガの息が少年の鼻腔を擦った。

「どーだあ？なんかわかったか？」

少年の瞳がさらに青くなつた時、モビルスーツデッキにジョブ・ジョンの声が響いた。

オリガは「造るところと戦うところは違う。今はそれだけ覚えておきな」と言い残しジョブ・ジョンに振り返った。

「あ、はい。結構ややこしいことがわかりました」

「ややこしい事？」

オリガとジョブ・ジョンの話はタロの耳に届かず、彼女に言われたことが頭を駆け巡っており、彼らを見る青い眼光が鋭くなっていた。

「オリガさんっ！あつ艦長っ！」フィアが小さな体で大きく敬礼をしたのが微笑ましく見え、タロの表情筋は和らいだ。

「やあ、そんなかしこまらなくていいぞ。で、何か見つかったのかい？」

ジョブ・ジョンもよい子を相手にするように身をかがませていた。

「は、はい！コックピットに文字がっ」

「よし、俺も見よう」

「アウターへ身を近づけていくと、彼は愕然とした。「……なんだよこりやあ」

剥き出しになった中身をよく見れば、油圧パイプやラジエーターなどの機械構造中に無数のファイバーが血管のように張り巡らされていた。

それを辿っていくと、そのすべてがコックピットから冬虫夏草の様に突き破り出ている。そしてそのコックピットの外殻に、文字が書かれていた。

Strategic Tactics Research Institute and ROM

「S. T. R. I. . . 戦略戦術研究所なら連邦政府の下請け企業だったはず. . . しかしアンドロムってのは.」

オリガが外殻に書かれていた文字を読み上げる。ジョブ・ジョンの中でやがて一つの仮説が組み上がった。

「タロ君。ちよつとこいつのテストしてみようか」

「テスト?」

「うん。とりあえずコックピットに入っていてくれ」

そして

「おーい!今からカタパルトハッチ開けんぞー!」

「いや、ちよつと待っていてくれ」

彼がデツキを出て行き、取り残されたタロとメカニック班は、なんだか手持無沙汰になってしまった。

「あの、テストって何するんですか?」

「宇宙(そと) 出て模擬戦でもするかと思っただけど」

「もぎせん?」

「そ、ペイント弾使ってね。でもなんか違うみたいね」

いまいち何が始まるのかわかってない両者のもとに艦長兼メカニックの男が何やら有り余るほどの機器を手にして舞い戻ってきた。いくつもの大きめの金属でできた板挟みのような物があり、なんとも大荷物である。

「それは. . . ?」

「これをそのよくわからないファイバーに取り付けてくれ」

「は、はい！」

メカニック班がアウターの周りを取り囲み、血管のようなファイバーに次々とコードを取り付けている間、ジョブ・ジョンはモニターを起動させていた。

「よし！タロ君、まずアウターを少し動かしてくれ」あらかた適当に取り付けられ、彼の言葉に従うようにアウターが起動した。

「えーつと…何をすれば…」

「そうだな、まず軽く動かしてみてくれ、手とか。あと外部スピーカーに切り替えて！」

「はい」タロの声がデツキ内に響く。「動かします。離れてください」アウターの右アームが上がり、掴むようにマニピュレーターを動かした。

ジョブ・ジョンの眺めるモニターには、ファイバーに取り付けられた電極からワイヤレスで受信した信号がグラフで表示されていた。しかし、そのグラフに然したる変化は見られない。

「これ何ですか？」変化のないグラフに首をかしげていると、背後からオリガもモニターを見ていた。

「簡単な電極を取り付けたんだ。アウターが動いたらなんかわかると思っただけだなあ……やっぱ模擬戦しかないか」

≠

独房室。その中で眠っていた男が目を覚ました。

「んっ……と……ここ……は？あたッ！」

顔の右半分に鈍痛が走り、気を失う前の光景が脳内にフラッシュバックした。「そうだ……パトリシア……！早く、連れ戻さないと」

≠

「んっ……」

ファナが目を開けると、香ばしい匂いが漂ってきた。いつの間にか眠ってしまったようだ。

体を起こすと8時を示す時計が目に入った。

「あ、おはようっ！よく眠れた？」

寝ぼけまなこを擦りながら寝室を出てリビングへ向かうと、すっかり回復したリモーネの声が耳に朝を告げる。

「あ……おはようございます。」

「コーヒー淹れちゃったんだけど大丈夫かな？」

リモーネの元気な声が目覚ましのベルの様に室内を駆け巡る。

「……あれ？」

昨日はいつのまにかソファに寄りかかったまま寝てしまっていた。そんなフアナを運んだのは

「あつ……だめ……だった？」 キッチンに立って目を潤ませている彼女だろう。

「ううん、ありがとう！」

フアナはわずかに悲しげに微笑んだ。

「よかったー！パンと昨日の残ってるのどっちにしようかなあ……」
彼女は次の問題に勝手に直面していた。朝から忙しい人だ。「パンにしよっかなー！」

食卓にパンとコーヒーが上り、くすんだ朝のひかりが2人を照らす。

「ここはいいところだねえ」

リモーネはパンをかじりコーヒーを一口すすってやっと落ち着いたので、窓の外を見つめながらそう言った。

「ここが……ですか？」

「うん、ここはいいなあ」

窓の向こうの砂塵の舞う景色を見ながら、彼女は穏やかな表情になつていた。「あ、あの……」

「ねえ！あとで買い物いこっ！」

「あ、買い物だったら私が」

「ううん！一人だと危ないでしょ？だから一緒に行こっ」

「……う、うん」

彼女の目を見れば聞くべきことを聞けず、ただ時間だけが過ぎていった。

第6話 胎動くFetal movementく

アリエス——火星圏内に位置するこの小惑星で、ジオンの亡霊たちが密かに再興の種を蒔いている。

その総統室の椅子に、似合わない大型の男がずっしりと腰を掛けていた。

アリエス分屯地の現司令官ヨドルフ・ヒトリーン。『現』司令官とここでわざわざ表記するのは後にこの役職がシヤアへ移ることが決まっているからである。

「ヒトリーン司令。」

現司令官の現秘書レヴァハン・M・ヴィルヘルム、青い髪に四角いフレームの眼鏡をかけている。

「まもなくカピラバストウから一番隊が到着いたします。なお総帥を乗せた艦はもうしばらくかかるとのことですよ。」

「うむ、報告ご苦労。時にレバハン」ヒトリーンは葉巻を燻らせながら聞いた。

「はい。」

「あの……何と言ったかな？シヤアの隣にいた……」

「カーン・Jr.……彼がどうかいたしましたか？」

「そうそうあの男……ん？男だったのか？」

「ええ。」

ヒトリーンは燻らせていた葉巻に咽つつも続ける。

「……まあいい、その男は木星には同行しないようだが？」

「ええ……彼は非常に重要な人材です。」

「そうか。それと……対未確認用兵器の具合はどうだ？」

「とても順調に進んでおります。」

レヴァハンの四角いフレームがゆらりと光った。

≠

「随分と分厚い小説だな、フィクションか？」

アリエスに向かう補給艦の中で、シヤアは一冊の分厚い本をカーン・Jr. から受け取り、ぱらぱらとページを捲っていた。その背表

紙には著者名が書かれていた。

「この名前は……たしか歴史小説家だったか？」

「基本的にはな、SFやファンタジーも書いているが」

タイトルを見れば歴史小説とは少し違うものであり、強いて言えば伝記の様ではあるのだが……

「で、これが木星とどう関係している？」

中身をざっと見る限りでは異星人同士の争いが書かれており、どう考えても歴史小説ではなかった。

「この本に最初の木星帰りが視たすべてが書かれていると言ったらどうだ？」

「最初の、か……」

最初の木星帰りが何を意味するのか、シヤアはそこに或る可能性を見出しつつあった。

「木星帰りは必ずと言っていいほど『何か』を視る……ただのファンタジー小説ではないということか」

「いつどのようにして木星へ行つたのかは明らかになっていない。しかし彼が歴史小説を書きはじめたのはこの本を書いた時期と近い。アリエスに到着するまでの間、『史実』として読んでくれ」

「ジオン再興の鍵が御伽話とはな」

シヤアはふつと自嘲気味に笑った。

「感想は読んでから聞く、詳しい話はそれからだ。私はすこし休む」
カーン・Jr. は自室に戻っていき、メインブリッジには本を読むシヤアの姿があった。

≠

《おりやあつ！》

火星圏から地球圏へと航路を辿るマイクロ・アーガマの周りで、四機のモビルスーツが乱舞していた。

アウター・ガンダムのコックピット内でロックオンを知らせる警告が鳴り、その方を見ればZ Mk-IIがこちらに照準を合わせていた。

別の方向からはジム・セークヴァアが、また別からはガザDがアウ

タワーに狙いを定めていた。

1対3、アウターにとつて、ましてや戦闘経験の殆どないタロにとつて不利極まりのない状況が形成されていた。

《よし囲んだな・・・一斉射撃、撃てエツ！》

アウターに3方向から何百発の弾が迫り、スラスタを最大稼働させ縦横無尽に弾を避ける。

「ぐうっ！」

全天周モニターを包む閃光、タロの視界が弾け飛ぶ。

《こんのやろおおおお!!!》

《クシナツ！サーベルの出力弱くツ！》

『クシナが来るー！』Z Mk-IIが閃光の中をサーベルを突き立てながら迫ってくる。それを感知した瞬間『まただ・・・この感覚・・・』タロの身体は、アウターという肉の鎧によつて自分の意識が及ばぬうちに、Z Mk-IIの斬撃を回避していた。

『次は・・・後ろだ』

たった今躲した態勢の背後から、ガザDがモビルアーマー形態になりメガ粒子砲を連射してアウターに迫ってきていた。

「このっ・・・！」

《かかったなあっ!!!》

メガ粒子砲を躲したその先で、頭上のグランが駆るジム・セークヴアのビームサーベルが振り下ろされる。

「しまっ・・・!!」

タロの恐怖心を読み取ったかのように右腕前腕部が開いて、粒子の刃が型を成し、ジム・セークヴアのサーベルを受け止めた。

《ハイそこまでー!!!》アウターとアウターを取り巻く全機体にマイクロ・アーガマ艦長の声が炸裂した。

《模擬戦終了、戻つてきな》オリガの艶めかしくも芯のある声が戦闘終了の合図となった。

「何かわかりました？」

テストを終えたタロがコックピットから降りてきた。

「さっき見たアウターのファイバーがあるだろ？あれに電極を付け

てテストしてみたけど、それがたまに強い反応をみせたんだ。これ、見てごらん」

ジョブ・ジョンはタロだけでなく、今テストを終えたばかりのグラ
ンとニロン、クシナ、そして彼らを取り巻くメカニック班も巻き込み、
モニターに映る心電図のようなグラフを再生した。

「最初のうちは反応は見られなかったけど・・・ほらここ！」
それまで平坦だったグラフの線がいきなり刃物を突き立てたかの
ように鋭角に盛り上がっているのを指した。

「ここから強い反応が連続している・・・そして最後、ここが一番反
応が強いんだ、最高潮とも言える！ここで俺が終了の合図を出したん
だけど・・・」

そこは、アウターが振り下ろされるビームサーベルを、自身のそれ
で防御したところだった。

「その時は・・・やられると思って・・・」

「とっさの判断にしてはよく動けた、と思わないか？」

タロは首を横に振り

「違うんです、なんていうか・・・勝手に動いたっていうか・・・」

「さっき言ってたよね、自分に馴染んでいくって」オリガだ。

「・・・はい」

「MSN―0xって機体番号を見る限りじゃジオンのニュータイプ
専用機だろうね」彼女は視線をタロからアウターに移してなおも続け
た。

「二年戦争でニュータイプ、先の抗争じゃ人工ニュータイプまで出
てきた。これもその一つかもしれないね・・・ジオンは何をやっ
ていてもおかしくない」

オリガは自分でも気づかないうちに拳を握り、僅かに声を震わせて
いた。

「そうそうそんでもう一つ」

わずかに空気が重くなった中、ジョブ・ジョンがオリガの後を続け
た。

「これは試作タイプなんじゃないかと俺は思うんだ」

「試作タイプ?」

「見てわかる様に、こんな風にファイバーを機械に絡ませたらどう故障したっておかしくないだろう? てことはこれは実戦用につくられたわけじゃない」

「はあ……」

どう故障してもおかしくないという事はいつ機体が自爆してもおかしくないとも取れるのだが……彼の言い方も相まってそれほど深刻なものではないように感じる。

「さすがに自爆はしないとは思うけどな、いずれにしてもこれに乗る時は気を付けた方がいい」

彼はそう言いながらも、タロが見た中では一番真剣な面持ちをしている。しかしそれもすぐに消えた。

「幸いここはまだ火星圏内だ! あいつらもそうポンポン攻めてはこないだろ、それまではゆっくりしようじゃないか。解散!」これで締めだとも言わんばかりに手をぱんつと叩いた。

「そういえば今はどこに向かってんです?」ニロンだ。

「予定じゃ旧サイド6だ。補給も兼ねて一番安全なことと言えば、な?」

≠

「パトリシア……まさかとは思うけど……」

模擬戦実験を終え、モビルスーツデッキを出たオリガはひとり独房室へ向かっていた。あの男がしきりに叫んでいた名前が彼女の心の奥底に引つかかっていた。

「誰かあーっ! いないんですかあーっ!」

独房室の方から例の男の声がした。先ほど放り込んだあの男の声だとすれば幾分か落ち着きを取り戻しているようだ。オリガはその前まで行き扉を開けた。

「おおっ開いた! ぼ、僕はヨーゼフ・クビツェク、気が付いたらここに入れられてそれで思い返してみると、っそうだ! 僕はもともとゼーレーヴエ艦に乗っていてなんで乗っていたかという」と

「おい、パトリシアってのはリモーネの事か?」

マイクロ・アーガマ隊がカピラバストウコロニーを後にして数時間後、港には再び人だかりが出来ていた。その群衆の視線の先には、艦から降りたばかりの迫水とエヴァがいた。

「なあ、どーしたらいいんだ？これ」

「んゝ．．．」

「飯はまだかあ」とゾンビの様に迫水とエヴァにコロニーの住人の手が迫り、二人は完全に足止めを食らっていた。

「あのねえ！俺たち人捜してんの！この子知らない!?ねえ!!」迫水がどんなに声を大にして叫ぼうと半死人共の耳には届かない。

「なあゝ、どーするよこれ」

「あゝっ！いま触られたあ！」

この状況と、この状況においてもどこか呑気なエヴァに迫水はため息をつかずにいられなかった。「一旦戻るか．．．」

「うおーい！ちよつとちよつとお！」

殆ど諦め状態に入っていた迫水の耳に、群衆の叫びに紛れながらも活発な声が届いた。

しかしその方を見ても、声は聞こえていても、姿は群衆に埋もれて見えない。

「こつちだよこつち！」

「おー！」

自分たちに大量の手が迫る中、奥の方で上方向にびよんぴよんと小さな手が撥ねた。何とか視線をそのまま降ろすと、痩せた子供が飛び跳ねていた。

「よし！行くぞエヴァー！」

「そゝですねえゝもどりましょゝ」

「違えよ、アレだよアレ！」

「あゝ」

エヴァもやっと気づいたようで、迫水は彼女を引っ張ってなんとか群衆を掻き分けていく。「こつちこつち！」

子供は細い路地に入り廃墟のような、といってもあらかたそうなの

だが、建物の小さな裏口へ二人を案内した。

「ここなら追いかけてこねえだろ！で、あんたら誰探してんの？」痩せ細った小さな体よりも何倍も活気のある声だ。

裏口から入ると冷たく固い床、生地が破れ中のボロボロの木が見えたソファがあり、寝泊まりはできそうにない部屋だった。

「ああいや、ありがとうね。この女の子、女の人なんだけど・・・」
迫水は、長居は無用と早速、タブレット端末に表示されたパトリシアの画像を見せた。

「ん~~~~~……ん？」

わざとらしいまでのしかめっ面で睨んでいたがそれはすぐに嘘のように消え「タロ兄ちゃんのねえちゃんと歩いてたかもー！」

「タロニーちゃん？」

聞きなれない人物名に随分とおかしなイントネーションで聞き返してしまった。

「いつも食い物かっぱらって来てくれんだ！おとといくらいから来てないけどー！」

ニカツと笑う少年を横目に『物騒なのがいるんだなあ』と迫水は思った。

「へえ〜そうなんだあ〜」

「うん！」少年は勢いよく頷いた。

「タロニーちゃんの家知ってるかい？」ただの談笑で終わってしまったのをおかしなイントネーションのまま救い上げた。危ういところだった。

「あっちの方！」少年はタロニーちゃんがいつも歩いてくる方向を指さす。

「あっちか！サンキュー！少年！」

「おう！じゃあ食いもんくれよ！」

「……は??！」

無邪気な少年は最初から等価交換の話をしていたのだ。思わぬ落とし穴である。この街で生きていく事はそういうことなのかもしれない。

「食いもんだよオ、教えてあげたじゃん！」少年に悪気はない、今までそうしてきたことをただやってるに過ぎない。

「あー・・・参ったなあ」

2人はノーマルスーツに着替えてしまい、必要最低限の物しか持ち合わせていなかった。当然、誰かにあげるようなものなど持っていない。

「いやあ・・・俺ら食い物持っていないんだよ」

「えーっ!?なんもくれないのかよオ？」そう不満たつぷりに言うと少年は表の窓から「おーい！どろぼうだアー！誰かアーっ！」と外へ向かって叫んだ。

「わかったわかった!!悪かった！なんかやるよ!!」

「なにくれんの？」「・・・食い物じゃなくていいか？」

迫水はおそろおそろ聞いた。

「ほんつとに持ってないのかよお」

少年は思いつきりへそを曲げていた。ここまでされてはこちらの落ち度を感じてしまう。

「エヴァ、なんかなのか？」

「うくん、これはどうかなあ？」

エヴァはヘルメットを脱ぎへアピンを手に取った。束ねていた長いブロンドの髪が靡き、柚子の香りが広がった。ピンの先には青い蝶がついていた。

「んー・・・」

少年がそれをかざすと、くすんだ明かりが蝶に青いベールを纏わせた。

「うんーいいよこれで！」

ほつと迫水は胸をなでおろし、心の中でエヴァに礼を言った。

「じゃあ行くかあ」

「はあい」

二人が外へ出ようとしたとき

「ねえちゃん！」

少年は

「ありがとう！」

笑った。

≠

「久しぶりだなーこういうの！」

フアナとリモーネはコロニーの人通りのない街を歩いていた。

「久しぶりって……」

「10年ぶりくらいかな！」

「……あの」

「あれ？」

フアナが聞けなかったことを聞こうとした時、彼女は何かに気が付いた。「……あそこって港だよな？」

リモーネの視線の先には人だかりがあり、その向こうにネオ・ジオンの戦艦が入港しているのが見えた。

「……ねえ、ちよつとこつちに行つてみていい？」リモーネは人通りのない薄暗い路地裏を指差した。

「え？そつちには何も」

「いいじゃん！行こ行こ！」

どこから、なぜ逃げてきたのか、またしても彼女から話を聞き出すタイミングを失ってしまった。

≠

どれくらい時間が経過しただろうか……追水とエヴァは途方に暮れかけていた。少年からは『あっちの方』としか教えてもらっていない。

街道に道行く人の陰もなく、二人はうつろな目でふらふらと歩き、このの住民と化していた。

「あ、いたー！お、おいアンター！この女を」

「ひいっ」

やっと見つけたかと思えばこのように逃げられしまい、なかなか尋ねられずにいた。砂塵が、砂の粒が肌にびったりついたノーマルスーツに当たる。

「くっそお……もつと聞き出せばよかった」

「もうあげるものないですよお？」

迫水がはあ、とため息を吐いていると

「おいその！あんたらなにしてんだ」みすぼらしい恰好をした中年の男が声を掛けてきた。「おお・・・！」

声を掛ければ必ずと言っているほど避けられる中、わざわざ自ら赴くみすぼらしいただの男が、迫水の目には砂漠の中のオアシスにすら見えた。

「俺たちこういう人を探してるんですよ・・・見てないですか？」

男は端末に表示された女の画像をしばらく眺めると口を歪めた。

「ああ見たよ」

「本当か!!」

「ああ」

「いやあく助かったあく！この奴らえらく不親切でねえ、人の話を聞かないどころか逃げだす始末で」迫水は水を得た魚の如く謝意を最大限に表したついでに、余談という名の鬱憤を彼にぶつけた。

「逃げだすねえ・・・」

「なんというか、凶悪犯を見たようにねえ？こちとら何もしてないってーのに」

「そりゃきつとあんたら格好だろうなあ」男はにひひと不気味に笑う。

「はあ？」ジオン軍のノーマルスーツに何の文句があるんだと言わんばかりに、迫水は不服の態度で「こんな僻地でなにをいまさら」

「ここには定期的に今のあんたら格好したやつらが食料とかの物資を届けに来るんだ」

「あー、ここ降りた時に囲われましたよ」

そういうことかと半ば呆れつつ、さらに話を聞くと、なんとも気味の悪い話を男が始めた。

「そんでな、それと同時にこのコロニーから何人かが消えるのさ」

「消える・・・？」

「ああ、人さらいだよ。配給が来る度に何人かなくなるのさ。等価交換ってやつかもなあ」

「つ、つまりそれは・・・ジオンがここでナニカをやってるっていうことか・・・?」

「さあなあ、俺も詳しく知らねえよ。けどなあ、さらわれた奴は二度と帰ってこねえ。不思議だなあ」

「そ・・・そうか」

急転直下、後味の悪さと薄気味悪さに、迫水は口が乾いていくのを感じずにはいられなかった。

≠

リモーネとファナの二人は相も変わらず景色の殆ど変わらないヒビだらけの路地裏を躓きながら歩き続けていた。

「ふう・・・ちよつと疲れちゃったね」

「はい・・・」

「アイス食べたいなあ・・・」

「あれっ?! タロ兄ちゃんのねえちゃんじゃん!」

2人がコロニーの天を見あげていると活発な声がした。その方を見ると痩せた少年がいた。

「あ! えーつと・・・」

「ケンだよ! タロ兄ちゃんいないの?」

「あ・・・うん」

「なんだあー? 昨日も来てないんだぜ?」

兄のタロ・アサティは家どころかこのコロニーの何処にもいない。すでに手の届かない所へ行ってしまった。その思いが「・・・ごめんね」という言葉と共に目からおちる。

「あつ!」と少年は声をあげると、リモーネを指さした。「さっきこのねーちゃんのことさがしてる人がいたぜ!」

リモーネはドクンツと胸が脈打ち、胃液を吐き出しそうになった。なんとか吐き気をこらえて

「じゃあそれまでキミの家で休んでいいかな?」

とケンに言ったとき

「よおく少年!」時間切れの鐘が鳴った。「さつきおっさんに聞いたらこつち行つたつつわれてさーって・・・」

「おお、解決ですね」

そこには先ほどまで群衆に囲まれていた依頼主、ゼーレーヴェ隊の迫水とエヴァがいた。

「あつーあの人が探してたのー!」ケンはずらに「いたぞー!」と二人の依頼主にパトリシアを指差しながら言った。

「・・・キミ、先に家まで行っててくれる?」

「え?なんで?」

「ちよつとこの人たちとお話しするから」

柔らかに微笑みながら言うパトリシアの表情は『ズレ』ていた。
「う、うん、わかった」

ケンがこの場から逃げると彼女は、二人を見据えた。「私を連れ戻しに来たのでしょうか?早く連れていきなさい」

言葉とは裏腹にどこか殺気を孕むパトリシアに2人は身構え、金縛りの如く固まっていた。

「ああ、ええつとじゃあ:ほら、連絡いれて」

「あ、はーい」

「ファナちゃん、ニュータイプって聞いたことある?」

着々と連行の手筈が進む中で、彼女は遺言を残すかのように昔話を始めた。

ニュータイプという言葉に、ファナの脳裏に兄との別れがフラッシュバックする。

「エスパーのように人よりも勘が鋭い人のことをいうの。」

一年戦争の時からジオンはその研究に力を入れて、ニュータイプと呼ばれる人たちを実験台にして兵器を開発していった。戦争に負けてからもその研究は続けられていて・・・私はその研究所に入られた。

最初はニュータイプの脳波検査とか新しい兵器のテストパイロットとかだった。でもジオンの研究は、ニュータイプを造りだすようにまでなっていたの・・・ニュータイプの、クローンを

私はその実験台の一人になった。何人もの私が造られ、失敗してはゴミの様に捨てられた。やっと人のかたちになっても実験は続けら

れて……

10歳の私たちが戦場へ出ていくことが決まったの。もう何も考えられなかった。そんな時に新しい実験で別の場所へ行くことになって、その途中で逃げ出してきたの」

ファナは言葉を紡げずにいた。彼女の明るいあのふるまいからはとても想像できることではない。

彼女だけでなく迫水とエヴァも同様だった。ただ彼女を目的地まで運ぶ〴〵程度の名目しかない迫水に受け止められるものではない。

「リモーネさん……」

「ごめんね。これが私の在り方だから」

「えっと……じゃあこれで」

命令に背いて予定外の行動をとるわけにもいかず、パトリシアを拘束し港に停泊している艦へ向かおうとした時、

「あの……」ファナが静かに口を開いた。

「その人を連れて行くなら、わたしも連れて行ってください」

彼らだけでなくパトリシアまで振り返った。ファナが何を言ったのか、誰も呑みこめていない。「いま……なんて……」

「わたし、なにもできないから、今までお兄ちゃんに頼りつきり……だったから」

「だめ……ダメだよ……それ以上いっちゃだめ！」ファナを行かせてはいけない、その先に、その向こう側にあるものは……

「いいんです」

いつから心に決めていたのか、ファナの目は揺るぎない意志を宿していた。

「良くない！私と来ることがどういうことかわかっているの!?あなたにはまだ」

「ここにないができるっていうの!!!」

激昂

もはや誰も、ファナ・コ・アサティを止められなかった。

「あなたたちはニュータイプが欲しいんでしょう?リモーネさんはニュータイプだから、だから捕まえに来たんでしょ?」

「わたしもニュータイプです。これでいいですか？」
この時、パトリシアは、ファナの辿る運命を感じとっていた。

「ねーちゃんたち来ないなあ」ケンひとり、冷たい部屋で、もう来ることのない客人を待っていた。

≠

ラグランジュ・ポイント、宇宙空間において、二つの天体の引力により軌道の安定する場所である。

これにより太陽と火星、太陽と木星のそれぞれのラグランジュ・ポイントでは小惑星帯が形成されていたりする。

また、太陽と地球のラグランジュ・ポイントは5つあり、スペースコロニーを建設するにあたって最も重要な場所となっている。

ラグランジュ・ポイント4、太陽と地球とをそれぞれ線で結ぶと三角形ができる位置にあり、軌道が安定しているおかげでサイド2とサイド6が形成されている。

その2つのコロニー群の間に6隻のエンドラ級軽巡洋艦を従えた重巡洋艦が鎮座していた。

「少佐、こちらが五番隊の受け取ったものです」

スクリーンにはO—アウター—ガンダム回収指令が記されていた。

「MSN—0X、これがエンジンになるのか・・・」

少佐と呼ばれた少年が、操舵室の奥で凍てつく笑みを浮かべた。

第7話 リボー・コロニーにて・・・
ing Rainbows) chas

マイクロ・アーガマが火星圏への航路に出てから早4ヶ月ほどが経過していた。

エウーゴ、テイターズ、アクシズの三つ巴の動乱は終結し、ハマーン率いるアクシズはネオ・ジオンへと改称。地球圏は次のステージへ移っていた。

「もうこんな経つてたのかあ…許可はとれたか？」

ジョブ・ジョンの手元のパネルにはJuryの文字があり、表示された航路図の行き先はサイド5、旧サイド6のリボー・コロニーを示していた。

「ええ、ですが…ネオ・ジオンの動きが活発になって来ているので長期の滞在は難しいとのことですよ」マークだ。

「まあ仕方ないな。OK!じゃあ予定通りに」

宇宙世紀0079一月、一年戦争開戦直後にサイド6は中立宣言をし、現在まで変わることなくその立場を貫いている。変わったことと言えば、コロニー再生計画によるサイド6からサイド5への改称くらいだ。

その中にあるリボー・コロニーは一年戦争時から連邦軍が施設を設けていた。安全面と物資の補給という点で最適の場所であり、彼らはそこで一時的な休息をとることになった。

≠

若い陽の光がコロニーの『河』から街を染めてゆくころ、時計の針は6時を指していた。

目覚ましのベルが鳴る。

窓から差し込む日の光に瞼をこすりベルを止め、ベッドを抜け出して朝のニュースをBGMに朝食をとる。

「ごちそうさま」

歯を磨き、身支度を整えて家のドアを開けて

「行つてきますー！」

朝靄に包まれながら深呼吸をして、彼の一日が今日も始まった。

≠

「ふんふんふんふんふんふん ふんふんふんふんふん♪んっ？」

クシナが鼻歌を歌いながら下船の支度を整えていると部屋のチャイムが鳴った。ドアの向こうにはタロがいた。

「どしたの??」

「なにしたらいいかわからなくてさ・・・オリガさんもここ最近ピリピリしてるし」

タロはコロニーに降りる際の事を聞けずにいた。

約4ヶ月間の殆どをマイクロ・アーガマという閉鎖空間で過ごしたクルー達の醸すその空気は、多感な年頃であればニュータイプでなくとも感じ取れてしまう。

しかしクシナだけは別だった。

クルーの中で安心できるのは、それを醸し出していないのは、戦闘時以外なら温厚で明るい彼女だけだ。

というよりも彼女自身、それが近づくにつれ次第にテンションがあがっていた。

「ふくん、じゃあちよつとコレ手伝つてよ！」

そう言つてクシナが指さした先には纏めきつていない荷物があつた。

≠

リボー・コロニーのベイエリア、円筒の軸の端にある民間用でない専用の港へ、マイクロ・アーガマが誘導灯を頼りに入港していた。

「以上が規約になりますのでここにサインしてください」

ジヨブ・ジョンは被民間用ドックの役員の指示通りに滞在許可、入国許可などの誓約書にサインをして、

「あゝ、修理もなんですけど補給の方を・・・」思わず小声で尋ねた。

中立のコロニーである建前、いくら地球連邦配下と言えどネオ・ジオンが目を光らせている今、そのようなことには細心の注意をしなければならぬのだ。

「ああその件ですね。承っております」

「よろしく願います。あ、それと」ヨーゼフ・クビツェクの軍への身柄引き渡しの件についてである。

「そーですかあ・・・ちよつとこちらで確認してまいりますのでお待ちください」といって、このドックの主任はこの場を離れていった。「我々はここで物資の補給などを行う。中立のコロニーだから敵の奇襲は無いと思われる。24時間後に出発予定だ、それまで一時解散とする！」

マイクロ・アーガマクルーはブリッジを後にしていった。

「さて、俺たちはもう少し仕事をやらなくっちゃあな」

クルーが下船していく中、タロは一人自室に籠っていた。

「いた、行かないの？」

ドアが開き、クシナが立っていた。

「気が向かなくなってます」

タロにとつてこのような場所を出歩いたのは十年近くも昔のことだ。あまり気乗りはしない。

「じゃあ一緒に行こー！はいこれ入国許可証」彼女は白い歯を褐色の顔に浮かべていた。「リラックスした方がいいって！」

クシナに引つ張られ特別管理区域の無重力ブロックの先にある埠頭まで来ると、眼下にはリボー・コロニーの大通りが広がっていた。

タロはそのあまりにも「ぶつう」な街に、どこか懐かしさを感じていた。

電気自動車と人々が行き交う普通の街

やわらかな風の吹く、おだやかな街

埠頭を出ると、街には夏の風が吹いていた。

「そっか、7月って夏だったっけ」

夏の陽光が降り注ぎ、行きかう人々は半袖の服を着て涼しげな恰好で歩いている。

「あたしの生まれたとこって今冬なんだよね」

約4か月ぶりに思いつきり羽を伸ばせる事になり、そのような「些細なこと」はクシナの頭からすつ飛んでいた。

「いや〜まいったな〜…」タロはボロのジーンズ、クシナはレザーのジャケットという季節にそぐわない恰好で街に降り立っていた。

「ん〜ん〜ん〜…」

クシナはタロの頭からつま先までをなめるように視ると、「よし！」と言ってタロをメインストリートの中へ引つ張っていった。

「どお？」

「うん。涼しそう」

2人は最初に目についた服屋に入り、クシナは試着室であれやこれやと選別していた。

「似合うかどうか聞いてんのっ！」

「ああ、うん。似合ってるんじゃないかな？お店の人もそういつてるし」

「もういいっ！自分で決めるっ」

クシナは試着室のカーテンを勢いよく閉めた。

三十分後、タロが窓ガラスからにぎやかな通りを見下ろしていると後ろから「どう？」とクシナの声があった。ふり返るとレモン色のワンピースを着た彼女がいた。

褐色の肌と透き通る黄色のコントラストに、タロは目を奪われた。

「…ねえ、感想まつてるんだけど」

口が半開きのまま惚けて何も言わない彼を少しじれったく感じる。

「…いいと、思う」

「ほんとにいい？まあいいけど…って着替えてないじゃん！」タロは相も変わらずボロの出で立ちだった。

「どうやったたら盗れるか思いつかなくてさ」

「……………」

タロが「今朝何も食べてなくてさ」というようなテンションでとてもないことを言うのでクシナは愕然と溜息をついた。

彼女は新たに服を買ってそれをタロに渡した。「はい、これに着替えてー！」

数分後、においの染みついたボロボロの古衣からまっさらなシャツとジーンズ姿になると

「うん！いいじゃん！あ、これ捨てていただきますい」とタロのお古を店員に渡した。

「え?! あっ、ちよつと!」

「どーせポロなんだからいいでしょ?」

「いや、長いこと着てたし」

「そーいうのは捨てるものなの! いい?」

「・・・まあいいか」と言いつつも中々腑に落ちない。

「断捨離よだんしやり! ほら、時間ないんだからつぎ行かなきゃ!」

いくらコロニーといえども季節は夏、大地と対角線上の空にある『河』と呼ばれる透過部分から差し込む太陽光がジリジリと大通りを照り付けていた。

二人は暑さをしのぐためとある店の前にいた。

「コロニーなんだからもうちよつと涼しくてもいいのに、バカになってるのかしら?」と愚痴を漏らしながらクシナはシャーベットを選んでいる。

「ご注文は?」妙齢な店員が顔を出した。

「ブルーハワイ一つ! あとはく: : : どれ?」

「どれでもいいや」

「じゃあ二つ! カードで!」

「カード?」

「いちいち両替面倒だもん」新サイド5は今でも独自の通貨を流通させているのだ。

「はい、どうぞ」

「ありがとっ! はい!」

タロは差し出されたブルーハワイシャーベットに目を疑った。スラム街でもこのような真つ青な食べ物はない。

「毒じゃないよな?」

「あたりまえでしょ、んーおいしっ!」

クシナがシャーベットをひとすくい食べたのを見て、タロも舌の上に転がした。シャーベットが舌を冷やし、通りに吹くコロニーの風と共にタロの火照った体を冷ましてゆく。

そうして清涼感を味わいながら歩いていると、タロの興味は別の建物へ移った。

「何だ(´▽｀)?」

「なに? ゲームセンター行きたいの?」

店に入り外の熱さから逃れると、ガチャガチャとあらゆるサウンドが鼓膜を叩きつけた。そんな中、クシナの心は一瞬で妙な形のぬいぐるみに釘付けになっていた。

「わーかわいい! これほしい!」

「・・・なにこれ」

UFO キャッチャーの中にあるそのぬいぐるみは変わった形をしており、2頭身の身体に、宇宙服のメットのようなデカイ頭部から髪の毛のように6本の白い束が生えていた。

「で、これをどうすんの?」

と言ってる間にクシナはマネーカードをタッチして操縦桿を握りUFOを動かしていた。

獲物の頭上ぴつたりUFOを止め、アームを開いて降下させる。

「よし、そのままそのまま・・・」

4本のアームががっしりと獲物をつかむ。

「いけいけいけいけいけ!」

引き上げる

4本のアームは嘘のように力を失ってぬいぐるみを落としてしまった。

「あくもうっアーム弱すぎ!! もう一回!!」

UFOはまたしても標的を捉え、パラシュート部隊の様に降下していく。しかしやはり引き上げる際にアームの力が抜けてしまい、ぬいぐるみはうつ伏せになった。

「なんでそこでえ・・・っ! もう一回!!」 なんとしても取らないと収まらない怒りと共にカードを叩きつけると

「ちよっとやってみていい?」 タロがさらっと操縦桿を握った。「こ
うすれば取れるんじゃないかって思ってた」

ところがUFOは先ほどの標的からは的外れなところで止まり

「ちよつと」

そのまま降下していった。

「……なにしてんの下手くそ」

「いや、これでいけると思う」

呆れるクシナをよそにUFOはアームを全開にして降下していった。案の定、アームは標的の本体を捉える事はなく着地した。
「……………」

「……」タロがアームの一本を指差すとタグが引つかかっていた。
「……引っかけたら行けるんじゃないかって思ってたさ」

UFOの浮上が始まるとぬいぐるみはタグにつられ徐々に逆立ちの態勢に、やがて宙吊りとなり振り子のように振られながらダクト上へ迫ると、反動によってタグと共に一気にアームを滑り降りた。

「ああっ!!」

またしても失敗に終わったかと思ったその時、開いてゆくアームがタグを誘導し、コロニーの僅かな慣性も相まって軌道を描き、ぬいぐるみはダクトの中へと吸い込まれて景品取り出し口へ転がった。

「な?引っ掛けりや大体盗れるんだ」

タロは人型ということ以外なんの形かよくわからないぬいぐるみを360°隅々回し見ると、タグに『抱きしめキングくん』と書かれていた。

「はい」

「えっ?!」

「欲しいって言ってたし」

「あ……う、うん……ありがとう」

クシナはキングくんをうけとると、頬を少し赤らめながら文字通り抱きしめた。しかしこの御代は彼女自身が出しているのを忘れていた。

二人はその後モシューティングゲームや昆虫人型メカの対戦ゲームなどを遊びつくしてゲームセンターを出た。

「あれ?」

「どしたの?」

「あれ」

タロが指を指した大通りの向こう、行きかうエレカの間から、細い路地に入ってゆくオリガとグランの姿を捉えた。

「どこ行くんだろ？」

「さあね」クシナにはそれがどういふことかの察しはついていたのでその話をスルーした。

「俺達もいくか」

「ぼっ……いくわけないでしょ！あーいふのはほっとくものなの！ああいうのはほら、そういう関係の二人が……あく、ほら！あつちに行こー！」

クシナはタロの注意を通りの先の映画館へと逸らした。

「んっ……」

勢いで映画館に来たはいいものの、どれを見るか中々決まらずにいた。

「ああ、き、ウル……おうりつ、うちゅう……」クシナが悩んでいるその横で、タロは上映中のタイトルをただ読んでいた。

「決めたーこれ2名くださいー！」

クシナが選んだのは『シャークレシア』というタイトルだった。内容はサメの細胞とラフレシアの細胞を合成して生み出された不明生物が密林で暴れまわるといふものだった。

≠

マイクロ・アーガマの停泊している港のドックで、連邦軍基地から派遣された整備士が修理や物資の補給などを行っていた。

「しかし、こんだけしかないとはなあ……」

艦長とオペレーターの3人は、艦の外からその様子を見下ろしていた。

派遣されてきた整備士は5人しかおらず、いくら小型艦とはいえここで整備できるのかジョブ・ジョンは疑問だった。

「仕方ないんじゃないですか？今はネオ・ジオンが見ているかもしれないし」

「それに中立ですからねえ」マーカーの後にオスカーが続いた。係

員の一人が彼らのもとに上って来た。

「すみません、整備士がモビルスーツデッキに行きたいとのことですが、よろしいですか?」

「ああどうぞ、こちらのメカニックも数人いますのでよろしく願いします」

すると、ジヨブ・ジョンは何かを忘れていたことに気が付いた。

「あの、身柄引き渡しの場合なんですけど・・・あれ?」

「はい?」

「いや・・・主任の方はどちらに?」

「ああ、主任は今別の方をあたっております」

「そうですね・・・ご苦勞様です」

ジヨブ・ジョンの第六感がうつつすらと違和感を告げていた。もつとも彼はニュータイプではないが。

「今のやつ・・・いつからいたんだ?」

≠

夕刻、コロニーに入る光量も少なくなり、街には『新世界より』第2楽章が流れていた。

「せんせーさよーならー!」

「気をつけて帰れよー!」

夕日を背に浴びて帰ってゆく子供たちを見送りながら一日の終わりを感じる、それが学校の先生である彼の日課でもあった。

『俺がこれくらいの頃はもっとやんちゃだったけどなあ』などと物思いに耽っていると

「あのおく、すみません」若い、そんなに年の変わらない褐色の女性が目の前にいた。「大通りに出たいんですけど、迷っちゃって・・・」

「それならこの道の3ブロック先を右に曲がっていけば出られますよ」

「ありがとうございます!」

彼女が案内をすると、彼女は少し離れた距離にいる青年とまでは言い切れない少年のもとへ走っていった。あの二人は恋人同士なのだろう。

「グランさんとオリガさんが入っていった店に行ってもよかつたんじゃない」

「…バカじゃないの」

などと他愛のない話をしながら歩いていく2人を挟むように子供たちが駆け抜けていった。

≠

日没、マイクロ・アーガマの停泊するドックに、ニロンは戻って来ていた。

「やっぱこつちが落ち着くんだよなあ俺は。えーつと確かここを……ん？」

特別に立ち入りが許可された無重力ブロックの通路を進んでいると左の頬に生暖かい感触がピトリとついた。そこを手で掬い取ると、指先が黒く染まつていた。

横を見ると、『関係者以外立ち入り禁止』と書かれた扉から、赤黒い液状の球体が滲み出てきている。

「なんだよこれ……」

扉を開けた先に、裸の男達が体に黒い穴をあけ、血をあたりに漂わせながら力なく浮かんでいた。

≠

「すいませーん、この機体を点検したいのですがよろしいですか？少し問題があるようなので」

マイクロ・アーガマのデッキ内で、整備士がアウターを指しながら、艦内に残って作業をしているメカニック班に尋ねていた。

「ええっ？点検ですか？」メカニック班の中でもひと際小さなフィアが目を丸くしていた。

「はい、少し動作のチェックを」

アウターはまだ自分たちにすらわかっていないことが多く、彼らの手に負えるようなものではない。

「こ、この機体はややくしくて、私たちにもよくわかんなくて……つて、あのっ！」

整備士は半ば強引にアウター・ガンダムのコックピットへ向かつ

た。

それとほぼ同時に、ニロンがデツキへやってきた。

「おい！あつちに死体が！」

「チイツ」

アウターへ近づく整備士が懐から銃を取り出していたのをニロンは見逃さなかった。

「そいつをアウターに近づけさせるな！」

その時、整備士だけではなく作業をしていた係員までもが次々と銃を取り出した。

「動くな！」

膠着状態へ入る前にニロンは一番近くの機体、ジム・セークヴァへと向かいながらアウターに向かう係員へ引き金を引いた。

乾いた排莖音の後に呻き声をあげ、作業服に朱が滲んでいく。

それでも尚アウターへの進行を止めない相手に再度引き金を引いた時、鉛の弾がニロンの左ももに食い込んだ。

「うぐうツ・・・！」

ニロンはなんとかコックピットにたどり着き、鋼鉄の防壁で身の安全を確保すると、ジョブ・ジョンへ緊急回線を開いた。

「艦長、緊急事態だ！アウターが乗っ取られた！ここは敵に囲まれている！」

《なんだと!?くそっ・・・!!》

間もなく、ジョブ・ジョンからマイクロ・アーガマ乗組員達に第一戦闘配置の知らせが届いた。「ここにいるものは直ちに配置について白兵戦に備えろ!!」

≠

反射鏡が太陽光を遮り、コロニーの陽は完全に落ちていた。タロとクシナは、夏の夜風が肌にあたる丘から街を眺めていた。

「きれい・・・」

夜空にはまた別の街の明かりが星のように瞬いていた。タロの中には、コロニーに置いてきた妹の姿があった。フアナも連れてきたほうが良かったのだろうか？そしたら今頃は、この景色を・・・

「地球ってさ、空に見える光は全部星なんだって」
クシナがポツリいう。

「コロニー生まれだからさ、行ったことないんだ」

「そうか、行ってみたいな」

「うん」

2人は思いつきり空気を吸うと、人工の大地にあおむけに倒れ込んだ。
だ。

「腹減ったな」

「泊まるとこも探さないとね」

「ここでもいいや」

この背中の向こうには宇宙が広がっている。造られたゆりかごに包まれながら、悠久の海にとけてしまいたいそうだった。しばらくこの安らぎの中に身をゆだねていたい。

「あつ！流れ星！」

コロニーのそら、街の隣にある『河』の向こうには星が瞬いていた。そこにきらりと一筋の光が流れた。

「天の光はすべて星、か・・・」

「え?」

「そんな本があるんだ」

「いい題名だな」

気が付けば、タロはクシナの、クシナはタロの目を見つめていた。鼓動が次第に高鳴ってゆく

互いの息をまさぐり、ぬくもりを感じあい・・・このまま・・・
バリーイイイイン

爆音がし、上空でグラスが砕け散った。スペースコロニーの中心軸である無重力帯が割れ、中から3機のモビルスーツが姿を現した。

「なに・・・あれ・・・」

ジム・セークヴァとアウター・ガンダムが中空で閃光を描きながら激突していた。

《タロ！クシナ！今どこにいる!?》二人の持っていた通信機が鳴り、ジヨブ・ジョンの声が響いた。

「なにがあつたんですか!？」通信機にクシナの唾えきがかかる。

《アウターが奪われた!今は二ロンが交戦しているが……》
通信機から聞こえる声を聞いても、上空で繰り広げられている光景を見ても状況を呑みこめない。

《すまない!こちらの不注意でこんなことに……!》

「……今から向かいます!」

《来るな!そこで待機している!!》違う声が答えた。

「グランさん!?なぜです!!」

《こっちは銃撃戦だ!》

「えっ……」

通信機の向こうから届く生々しい銃声が、クシナをじわじわと締め付けていった。《お前はアウターを取り返せ!!》

その時、鈍い轟音が街の方から聞こえ、街には赤黒い炎が上がった。不協和音を奏でるサイレンと共に声明が響き渡った。

『ただいま、緊急避難警報が発令されました。直ちにお近くのシエルターへ避難してください』

タロはクシナの腕を引つ張って戦場へ向かっていた。シエルターへ避難する人々の波を掻き分け、逆らいながら

かつて見た戦火の灯火がそこに上がっていた。今日を過ぎした街が、戦渦にのまれた『あの日』と化していた。一つ目の巨人が街を焼いた、あの日へと

『この日だ……俺はこの日から……!』

「おい!!どこへ行くんだ!!」

タロの耳に届いた声は、あの学校にいた先生の声だった。

「あなた……さっきの」

「君たちは……!とにかくこっちへ!!」

タロとクシナが “先生” に誘導されシエルターへたどりつくくと、日常を燃やした火から逃げ延びた人たちが、薄暗い蛍光灯の中で寄り添って身を震わせていた。

「いったい何考えてるんですか!街へ向かっていくなんて」

“先生” がタロとクシナを叱っていると、彼の教え子と思われる子

供たちが駆け寄ってきた。

「せんせえ……ぼくたちかえれないの……？しんじやうの？」

「だいじょうぶ！きつとすぐに終わる……！」

教え子たちをなだめる彼の姿に、タロは過去を少しづつ感じ取っていた。

「それで？なんで街へ向かってたんです」

再び2人に子供を叱る時の目を向けるが「……ガンダムが奪われたんです」というタロの言葉に、彼の瞳孔が開いていった。

「なんだって……？」

「わたし達は連邦軍の軍人で一時的にここに寄っていたんです。

でも、その間に私たちの艦がジオンに襲われて、ガンダムが、私たちの機体が敵に奪われてしまったんです。

だからあの機体は……ガンダムはタロが乗っているものなんです。私たちはそれを取り戻そうとして……」

「……そうだったのか」彼は歯を食いしばり沈鬱な表情を浮かべると、彼の教え子の一人がタロの元へ寄ってきた。

「なあつ、さつきモビルスーツが落ちてくの見たぜ、オレ！」教え子のその言葉に、えもいわれぬ不安が押し寄せてくる。

「ねえつ、それどこ？」クシナは前屈みになって少年と目線を合わせた。

「あ、あつちの森」

「あつちか……ありがとー」

クシナはタロの手を掴んでシエルターの外へ走り出した。「お、おい！なんだよ?!」

「決まってるでしょ！」タロが見たクシナの眼は初めて見るものだった。「そいつに乗って取り返しに行くの！」

戦場へ向かう二人の背中を、哀と苦に満ち満ちながら彼は視ていた。

『行かなきゃ』

いつの間にか彼は、教え子たちの声も聞こえずに若い命を追っていた。理由はなかった。シエルターの外へ出ると、夏の風ではない熱風

が吹いている。

街には戦火があり、河の向こうには巨大な一つの影があった。その光景が一枚絵となり、彼の忘れたくても忘れたくない戦争を蘇らせ、河を渡って木立を抜けた向こうへと走り出していた。

反射鏡によって太陽光が差し込む透明な地面、『河』を渡って木立を抜けると、巨大な鋼の黒い影があった。

「こいつは……」

木々をなぎ倒してそこに横たわる巨人に、彼は見覚えがあった。記憶の中と形は違うものの、その発展型であることは、頭部を見れば明らかだった。

「……ザク」

コックピットの上で、クシナがジオンのノーマルスーツをなんとか引きずり出していた。

パイロットは気を失っており、全体重が彼女にかかっていた。

「はあ……はあ……はあ、ねえちよつとは手伝ってよ!」

「ねえクシナ」

「なに?」

「なんでそんな楽観的でいられるの?」

「……え?」

「アウターの性能は俺が一番わかってる」

「……なに言ってるの?」

「アウターガンダムを相手にすることがどういうことかわかるだろうか?」

「なにそれ……ガンダムが奪われてもいいってこと?」

「そうじゃない」

「じゃあここの街が燃えるのを黙って見てるの?」

クシナの中で感情が膨らんでいく。

「何もしないでこのまま大人しく見てるの!?!あたし達のせいになつたかもしれないんだよ?!それなのに黙って見てられるの!?!」

「違う!!」

「じゃあなによ!!?」

「アウターとやるなんて死に行くようなもんだろ!!こいつに乗ったところで……」タロは目の前に横たわる巨人に指を差して叫んだ。「ただのザクでなにができるっていうんだよ!!!」

「ふぎけるなあっ!!!」

それまで黙って見ていた「先生」の声が黒い木立に響き、静寂がおとずれた。

「ガンダムだからなんだってんだよ……」

彼は自分でも気づかぬ程に全身を震わせ、手のひらを握りしめていた。

「その程度で投げ出すのかよ……」

そこには彼の戦争が、彼の中の戦争があった。

「ザクしかなくなっちゃってなあっ……!」

ひとりの少年と、ひとりの青年の姿があった。

「死ぬかもしれないってなあっ……!!」

それでもバーニイは戦ったんだ

かつて少年だった「先生」は大粒の涙をボロボロと流していた。嗚咽にまみれ、ただとまらない涙を拭いながら

「いこう」クシナはタロの手をきゅっと掴んだ。「あたしも乗るからさ」

2人はザクのコックピットに乗り込んだ。左側にタロ、右側にクシナが一つの操縦席についた。グオンと暗闇にモノアイが光り、シユウツとダクトから放熱すると、鋼鉄の巨人は重い腰を上げた。

モノアイを「先生」から黒煙の上がる街に移すとバーニアを噴かせ、ザクは再び戦場に舞い戻っていった。

「おかしいな……止めようと思ったのに……」

彼はそれを目に焼き付けながら、無言の敬礼を送った。

「基本操作は変わらない……機体名称は……ザクⅢ試験型か」

彼らが今日を過ごした大通りは見る影もなく瓦礫の山になっていた。クシナは胸が張り裂けそうだった。

「この野郎……!」

眼下ではアウター・ガンダムとジム・セークヴァアが膠着状態にあった。この二機の間にはザクで割り込むのは聊か妙な感じがする。

「そうだ」

ザクはアウター・ガンダムの前に着地させた。ジム・セークヴァアが警戒の色をこちらに向ける。ザクの右腕に握られたヒートホークが赤く染まっっていく。

《無事だったか……こいつをやって引き上げるぞ……ここまで大事になつてはわが軍の……うぐっ……》

アウターを奪ったパイロットの息も絶え絶えな声がスピーカーから流れた。

「ああ、そうだ……なッ!」

ザクはアウターへ振り返りながらヒートホークを垂直に振り下ろした。

《なにっ!?!》

反撃の手を出されない内にすかさず体当たりをすると、アウターは大通りになぞるように弧を描いた。「軽いだろ?ガンダムって」

アウターはバーニアを噴かせ、そのまま空へ舞いあがる。そこを逃すまいとジム・セークヴァアがアウターに突貫。機体を密着させ、バーニアの噴射を緩める事なくそのまま大通りを抜け、先ほどまでザクのいた木立へとアウターを押し倒した。

ザクも引き返すように後に続けと、きつと中空で逆転したのだろう。アウターはジム・セークヴァアにまたがり、今にもコックピットをビームサーベルで焼こうとしていた。

「このやろおおおおお!!!」

ザクはアウターを狙ってヒートホークを振り下ろした。

それは空を斬り、危うくジム・セークヴァアのコックピットを熱で断絶しかけた。

《危ねえじゃねえかおい!》

「ニロンさん！」

《お前、タロか!? どうしたんだ?》

「盗んだの!」

《クシナもいるのか・・・ぐうあつ》ニロンも息を荒げ、呻いていた。

「大丈夫ですか!」

《さつき食らっちゃってな・・・ただ、そいつもやられている、アウターに乗る前に俺が肩にブチ込んでやった》

相手は肉体的に限界を迎えている。ザクはアウターに向き直った。

「タロ・・・このまま行って」

ザクはヒートホークを、アウターはビームサーベルを構えて対峙した。

次の一手で勝負が決する。

「・・・うううううおおあああああ
!!!!!!」

ヒートホークを振り上げ、懐が開いたザクのコックピットにガンダムのビームサーベルが迫る

そして

ザクはヒートホークを振り下ろすことなく止まっていた

ガンダムのビームサーベルは、ザクの左腕を落としていた

ザクのボディには、ビームサーベルの轍が出来ていた。

アウターのサーベルがコックピットへ到達する直前、クシナが操縦桿を握りザクの重心を右へずらしていたのだ。

殆ど気力のみで戦っていたのだろう、アウターのコックピットの中で、男は決着がついたと安堵し、気を失っていた。

≠

避難命令が解除され、シエルターに籠っていた住民は次々と帰路についていた。家が残っていない人もいる。身内を、隣人を亡くした人もいる。リボー・コロニーは再び戦禍にのまれてしまったのだから。

鏡が次第に光の矢を反射し、コロニーの中を染めていった。先生は二人の若い軍人との名残を惜しんでいた。

「もう行くのか?」

「ああ」

「そうか、残念だ…」

「大丈夫だよ。あんたが叫んだ時、なんとなくわかった」

「え?」

「オレ、ニュータイプってやつだからさ」

タロがそういうと、彼は安堵とも憂いともつかない顔をしていた。

「……なあ、またこのコロニーに来てくれよ」

「えっ……?」

「次はオレが案内してやるからさ」

「……ああ、いつか来るよ!」この戦いが終わるまでこの身がどうなるかもわからない。それでもタロは

「必ずさ」思いを押し殺して彼に約束した。

タロとクシナはアウターに乗りこみ、互いが見えなくなるまで手を振っていた。

ハッチが完全に閉まると、教え子に囲まれた先生が全天周モニターに映し出された。

彼は目から一筋の涙を流して何かを言った。

言葉は聞き取れなかったが、タロにはわかっていた。「……さすが先生だな」

朝、若い陽の光がコロニーの『河』から街を染めてゆくころ、時計の針は6時を指していた。

陽の登る中を、白いモビルスーツが翔び立っていった。

黄金の靄に包まれながら深呼吸をすると、彼の長い一日が終わりを告げた。

おはよう、バーニイ

港の襲撃も鎮圧し、艦内には白兵戦で飛び散った生暖かい血がこびりついていた。ネオ・ジオンによる係員と連邦軍整備士を偽つての奇襲により、クルーたちは肉体的にも精神的にも大きな傷を負っていた。

「艦長である私の不注意でこんなことになってしまった。すまない」

もつとすっかりしていれば、と責めるものはジョブ・ジョン自身だった。

「残念ながら、物資は僅かしかなく補給もままなっていない。我々はまず地球へ進路を取り、近くの連邦艦隊と落ち合う。」

ニロンが手をあげた。

「それよりも連邦側のコロニーに行った方がいいんじゃないのか？ここから地球にたどり着く間にいつネオ・ジオンの襲撃にあうか」

「正直言うとなんもそうしたい。ただ・・・今回の事を考えれば、連邦側だろうが何だろうが奴らは侵入できてしまうということだ」

「そりゃあここが中立だからだろ？」

「いや、あいつらは『連邦軍基地』から来た、ということとは軍自体にも侵入できるってことだ」

「そりゃ考えすぎだぜ・・・」

「それに、先の抗争で連邦そのものの地盤が緩くなっている。ジオンの手がどこまで伸びてるか把握できない現段階ではこうするしかない」

「じゃあ地球へ行っても無駄かもな」

疑心暗鬼、誰もが事を冷静に考えられず、安全圏を見出せないでいた。

マイクロ・アーガマがリボー・コロニーを出ると、そこから昨夜の傷跡が見えた。

「わたし達のせいで・・・こんなことに・・・」

「そういう考えはやめろ、身がもたねえぞ」クシナにニロンが棘をつけて返した。

言葉を喉に詰まらせたまま、彼らは一分間の黙禱を捧げた。

「まもなく戦闘禁止区域を抜けます」

「コロニーでやってきちまつたけどな」

「艦長……これ……」と言ったオスカアの声色は震えていた。

「なんだと……」それは、まだ事件が終わらないことを告げた。

リーダーには、五つの敵戦艦と数十機ものモビルスーツの機影があった。

「くそおつ……くそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

敵は、万が一アウターを奪取できなかった際の事を見越し、歩兵とモビルスーツの二重包囲網を形成していた。

「総員第一種戦闘配置につけー」

「いや待てー」

突如マークアが下した命令をジョブ・ジョンはすかさず止めた。

「持久戦はできない……白旗をあげて降伏をするしか……って、おいたろ！何する気だ!?!」

彼が回避方法を模索していると、それをかき回すようにタロ・アサティは走り出していた。

「俺がアウターであいつらを殲滅してきます」

「馬鹿野郎！何考えてんだ！おい待てえっ!!」

タロは艦長の制止も聞かずにモビルスーツデッキへ向かい、アウター・ガンダムに乗り込んだ。操縦室のシートには、まだ血がべつとりとついていた。

「ハッチ開けてください。壊してでも行きますよ」

「艦長……」オスカア、マークアの二人がジョブ・ジョンの指示を仰いだ。

「開けてやれ……壊されるよりマシだ」

カタパルトハッチが開いていきアウターが解放された、タロの意思に応えるように敵陣の中へと進撃した。

第8話 Out of sight

「んっ……んううう……うああああああああああああ!!!」
火星圏へと向かう補給艦の中で、カーン・J・R. は身体中をミミズ
が這うような悪夢にうなされていた。

「はあっ……はあっ……」悪夢から逃れた彼の身体は汗にまみれ、
床をしつとりと濡らしていた。「まただ……またあの夢が……!」

火星圏へと近づくにつれ悪夢は頻度を増し、いつも男が現れた。そ
の姿はシルエットとなり、顔はわからない。

部屋のモニターから呼び出し音が鳴り、画面にウイノナが現れた。

《およそ24時間後にアリエスへ到着いたします。どうされまし
た?》

「いや……なんでもない」

《そうですか》

「報告ありがとうございます」

モニターの通信が切れると、彼はベッドに体を沈め、ただぼんやり
と宙を眺めた。

≠

『白いモビルスーツが勝つわ』

宇宙世紀0079、12月——

戦争も終局に差し掛かっていたころ、サイド6ではそのごくわずか
な一端がテレビによって映し出されていた。

彼らの目が見つめるカメラの向こうでは、一機の白いモビルスー
ツが鬼神のごとく敵を墜としていた。

後に救世主、または悪魔とも呼ばれる『ガンダム』の姿だった。

あるものはそれを遠い国の事のように、またあるものはそれをど
か絵空事のように感じていたのかもしれない。

その白いモビルスーツの中で、少年は第六感を極限まで研ぎ澄ま
せ、ニュータイプとしての更なる覚醒を始めていた。

そして、宇宙世紀0088、7月

「ううおおおおああああああああああああああああああああ
!!!!!!!」

タロ・アサティは白亜の鎧を身に纏い、この空域でほんの少しだけ、ずれた道を辿っていた。

日常に染み付いた無意識の行動を取る様に、ただ淡々と、襲い掛かるモビルスーツを祓っていた。

彼の意識は脊髄反射のその先まで高まり、やがて全身麻酔のようにスウツと底の闇へと落ちていった。

≠

「ツ……!?!」

ゼーレーヴ艦内の栽培室

ファナの顔は青ざめ、ユニットから摘んだ野菜をゆっくりと床へ落とすとした。

「どうしたの?!」

「あ……うん、だ……だいじょうぶ……」

パトリシアが心配そうに見る中《ただいま火星圏内に入りました!》というアルマの弾けるような声が艦内スピーカーから響く。

「……そろそろ食堂行こうか」

「う、うん」

えもいわれぬ不安がファナの心を締め付けた。

食堂の厨房では料理長のヒムラがファナとパトリシアをにこやかに出迎えた。

「おおありがとうー!いつもすまないねえ」

「いえー少しでもできることがあったら手伝いたくって!」それが、心を紛らわせるファナなりの方法でもあった。

しばらくして、東條を除くゼーレーヴエ隊一同と艦長が食堂へやってきた。

「おおおおお飯だああ!!でも肉はないんだよなあ……合成肉でもいいからさあ」

「ないものはないんだから文句言わない」

ギョントーのはしやぎつぷりにキューベルは釘を刺した。

ここしばらくを宇宙食で食いつないでいた彼らにとって、ファナとパトリシアが並べていく夕食は豪勢なものだ。

「今夜は火星圏に入ったこともあって少しだけ豪勢にしてみました」という料理長のにこやかなごあいさつが、いただきますの合図となった。

皆が黙々と食べている時、ギウンターが口を開いた。

「へはは、へう」

「口に物入れて喋らないで」

「んぐっ……てかさ、べる…キューベル艦長」

「なに」

「あの二人、向こう着いたらどうすんの？」パトリシアとファナのこ
とだ。

「さあ、そつから先は私たちの仕事じゃないし…そもそも何であの娘
を届けるのかだって」

「プルちゃんはともかくとして、ファナちゃんは？」

「それは……」

ファナはパトリシアがゼーレーヴェへ収監されるときについてき
てしまったのもあり、イレギュラーな存在であった。

「確かあの子って兄貴がいるんだろ？そいつはどうしたんだよ？」

「なんであんたはそう土足でズカズカと」

何を目的として乗り込んだかもはつきりとわかっていないので艦
長であるキューベルは一先ず保留としていた。

「俺たちが見つけたときはたしか、ニュータイプとか言ってたな」

「難しいおはなししてたあ」

ファナとパトリシアは少し離れた席で食器を鳴らして、自分たちで
作ったシチューを食べていた。

「うん！おいしい！……ねえ、だいじょうぶ？」

「えっ？」

スプーンを口に運ぶたびに、ファナの目は潤んでいた。「やっぱり、
さっきの野菜室でなにか」

「あ、そうじゃないの！なんていうか……懐かしくって」

「ねえ！ちよつと聞きたいんだけどさ」

ギウンターが彼女たちの間に割って入った。キューベルは額に手

を当てため息をついた。

「プルちゃんは何で火星に行くのか知ってるのかい？」と聞かれ、パトリシアは少しむっとした表情を返した。

「だ、だってほら！そもそも始まりはプルちゃんがさ」

「あ、あの」キューベル以外の視線がパトリシアに集まる。「リモーネとか、パトリシアでいい・・・プルちゃん」って変な感じがするし」

「呼びやすいのになあ・・・ってのはおいといて、ねえなんで？」

「わたしも詳しくは知らない。でも」

「でも？」

「メモリークローン…みたいなことをあいつが言ってた」

今はマイクロ・アーガマにいるヨーゼフ・クビツェクの事だが、まあ誰も覚えていないだろう。

「メモリー・・・クローン・・・？」

「ニュータイプ研究の一つだと思う、たぶん。

迫水さんとエヴァちゃんは知ってると思うけど、私は研究所でクローン実験の被検体だったの。それで」

「メモリークローンはその流れの一つだということね」キューベルだ。

「その、クローン実験つてのは成功したの？」ギンターがずいっと身を乗り出してきた。

「ええ、もうすぐ私のクローンが戦闘配備されるはず。いや、もうしてるかも」

「・・・け、けど、メモリーつて記憶だろ？それでクローンつて…わっかんねえなあ」

聞いてはいけない事を聞いてしまったような、そんな空気を一掃するため颯爽と次の質問に移った。キューベルは小さく「馬鹿」と彼を小突いた。

「よくはわからない。でもきつと、記憶を他の人に植え付けて何かをするのかも・・・それで私がよばれたんだと思う。どうしたんですか？」

「ま、まあ今はそれは置いて！こっちききて食べようぜ！」
パトリシアがさりりととんでもないことを言ったのでギョんター
が慌てて取り繕った。

フアナとパトリシアは、彼らの食卓に加わった。

≠

タロが再び意識を取り戻すと、知らない天井が広がっていた。

「目を開けたぞー運べー！」

タロは手術台の上に乗せられていた。

『ここは……？』

部屋の中を視界の許す限り見渡していると、周りには見張りと思われる男がひとり。

『どこかのコロニーかな？』などと考えながら、タロは手術台に乗せられたままどこかへ運ばれた。

いかに自分の認識が甘かったか、やがてそこはジオンの戦艦の中と
いうことがわかった。

「少佐、あいつらの処分はどういたしますか？」

「うくんそうだなあ……しばらくは人質として役立ってもらおうよ」
まだ遠くに感じつつも、とても歪な少年の声でタロは意識を完全に取
り戻した。

「やめろおっ!!!!ここはどこだ！あんたら誰だ!!」

手術台を飛び起き、少佐と呼ばれる自分よりも明らかに年下の少年
に掴みかかったその瞬間、見張りの男がタロに銃を突き付けた。

「やあ、タロ・アサティ、だったっけ？まずここは交渉といこうじゃ
ない。とりあえずこれ見て」

メインブリッジが暗転すると

《タロ!? タロおっ!!》スクリーンからやつと聞き覚えのある声が
飛んできた。

「なっ……!!?」

そこには、この2ヶ月あまりを共に過ごしたマイクロ・アーガマの
クルーが両手首を後ろで縛られた状態で、銃を突きつけられている映
像だった。

「これはリアルタイムだよ、わるいけど乗り込ませてもらったんだ」
《まつ！待ってくれっ！私は彼らとは関係ないんだっ！》
クビツェクがこの期に及んでまたしても気をおかしくしたような
声をあげている。《わわわわたしはっ！ネオ・ジオンのニュータイプ研
究所の者でこいつらとは何の関係も》

喚く面の皮を銃弾がかすめ、彼は反射的に口を閉じた。
少佐がパンツと手を叩いて合図を送ると、スクリーンの映像が真っ
暗な宇宙へと切り替わった。

画面両脇から二隻ずつの戦艦が前進していく。

《高熱源体を確認！機体番号：MSN-0xと判明！》

《全艦モビルスーツ射出、身を捧げてでも任務を遂行しろ》

絶対零度の少佐の声で数十機ものモビルスーツが艦から出撃する
と

『オオオオオオオオオオオオ．．．』という大気の振動にも似た音が轟き、キラ
リと星が流れた瞬間、光が満ちた。

先陣を切った機体の爆光だった。

それを皮切りに、タロの駆るアウターが姿を現し

粒子の塊が、刃が、

鉄と共に肉まで貫き、切り裂き

白い悪魔の呼び名にふさわしく、次々と命を吸っていった

「なんだ．．．これ．．．」

それが、映像に映る「自分」を視たタロの口から出た言葉だった。
何故なら彼は、それを覚えていないのだから

覚えていないほどまでに彼は一心不乱だったのだから。

「ち：ちがう．．．おれはこんな．．．おれが．．．」

脳裏に忘れていた、思い出さないうようにしていた記憶がフラッシュ
バックし、腸の底から来る吐き気がタロを満たしていった。「うつ：
!!」

パイロットを焼いた死の感触がタロを襲い、胃液が勢いよくブリッ
ジへと吐き出された。

「あーあしょうがないなあ、ったく．．．じゃあ24時間あげるよ。

ぼくたちはジオンと連邦の…というより

反ネオ・ジオン反地球連邦連合義勇軍エスタンジア

コロニーでは仲間が世話になった。さて」

再び映像がマイクロ・アーガマに切り替わり、映像の中の男たちは銃を突き付けていた。

「ぼくらにMSN-0x：アウター・ガンダムを渡してもらえば解放しよう

といたいところだけど、僕らの存在を知ってしまったからには帰すわけにはいかない。

ここに残るか、身体だけここに置いて行くか…アウター・ガンダムを使うキミが決める」

決断の時はいつも突然訪れる。例え赤子だろうと老人だろうと、どんな時だろうと容赦なく。

『俺が決める…？なんで…』

「エスタンジアの存在はまだ誰にも知られてはいけない。まだ正義じゃないんだ、ぼく達は…」

もちろん君たちが記憶をきれいさっぱり消してくれるならなにも問題はないさ、けどそうもいかないだろ？

「…僕はアドルフ・ドウカヴニー、いい返事を期待しているよ」

≠

小惑星アリエス、それが彼らゼーレーヴェエ隊が向かう拠点である。

ヴェスヴィオ火山を上下に合わせたような外観を一望すれば、その向こうに一つ、ぽつかりと赤い星が浮かんでいる。

その数あるベイの一つに、シヤアとカーン・Jrらを乗せた補給艦が入港していた。

「クワトロ大尉、後続隊の到着は我々の24時間後になるようです」

「そうか、よく無事に送り届けてくれた。礼を言う」

「まだ任務は達成していませんがね」

「着艦だ」カーン・Jr. がジェノヴァを遮りシヤアの前に躍り出た。「さあ行こう…シヤア」

補給艦のタラップを降りると、例によってあの醜悪な面構えと体型の男が出迎えた。

「遠路遙々お出頂きありがとうございます。シヤア・アズナブル総帥、そしてカーン・ジュニア様、長旅お疲れ様です」

「はは、来て早々総帥は勘弁願いたいな」

「これはこれは失礼いたしました。それではシヤア大佐、立ち話も何ですから早速ご案内したいと思います」

醜悪な顔から発せられる丁寧な言葉に違和感を覚えつつも、彼に誘導され第一ハッチをくぐると、通路の両脇に兵士たちが整列していた。

『おお・・・』『あれが・・・』『赤い彗星・・・！』

声こそ聞こえなかったが、そのような感嘆の息が伝わってくる。

『やはりここもか・・・』一年戦争で時が止まった亡霊たちがそこにいる光景はアクシズを思い出させた。

「どうされました?！」

カーン・J r. の部下であるウイノナが珍しくも頓狂な声をあげた。

その方へ振り返ると、カーン・J r. が顔を青ざめて全身をカタカタと震わせていた。

「・・・私だけでも構わないか?！」

「え、ええ…カーン・ジュニア様にはお部屋でお休みになられて頂きましょう。では、案内には彼も同行させます」

少し戸惑いを見せながら、太くて短い指を似合わずもパチンと鳴らした。

ジオンの亡霊たちの中から場違いともいえるような、ヒトリーンとは真逆の、青い髪をした端正な顔立ちの長身の男がスウツとあらわれた。

「レヴァハン・M・ヴィルヘルムです。ここで彼の補佐、並び技術研究員をしています。」

「では参りましょう」

カーンJr.と部下のウイノナは総統室と書かれたパネルのある両扉を開け、その中の左側にある戸の向こうへと案内されていた。

「それではごゆっくりお休みください」案内係が出ていくと、カーン・Jr.はベッドの上へ落ちるように腰を下ろした。

「ではカーン・Jr.様の代わりにアリエス内を見てください」

「まって…….シヤアに言わなくちゃ……あいつには気を付けろつて」

傍を離れようとするウイノナを呼び止めると子犬の様に身を震わせ、両腕で自分を抱くようにうずくまった。「でもダメなんだ……体が言うことを聞いてくれない……」

「カーン・Jr.様……」

「頭の中を蛇があつ……!ああつ……ウイノナ……おねがい……あああああつ!」

「んっ」ウイノナはカーン・Jr.の口を唇で塞ぎ「こんなに震えて…….かわいそうに……」華奢な肢体を、ベッドの上に押し倒した。

≠

「こちらが居住施設です」

「アクシズとはだいぶ違うな」

一年戦争終結直後、シヤアのいたアクシズのモウサと呼ばれる居住区にはファースト・フードや衣料品などの店が立ち並んでいた。

そこと比べるとアリエスの居住区はなんとも味気のないものだ。

「ここは軍事施設が主なのでそのような場所を作る必要はありません。それにこのような僻地です。商業施設を設けたところで大して役には立たんでしよう」

「精神的な安らぎはあつた方がいい」

「ご安心ください。そのような場所は設けてあります」

モビルスーツドックに向かうまで、一般兵がすれ違いざま彼に敬礼をしていた。

「こちらがわが軍のモビルスーツ並び、モビルアーマーです。」

地球圏と火星圏のはずれのコロニーで見たグラウンド・ザック、その

隣に一風変わった形のモビルスーツが並んでいた。

そのモビルスーツには頭部と下腹部から長い角のようなものが生えていた。「これは・・・水陸両用というわけではなさそうだが？」

「キタラと言いまして・・・あの先からビーム状の刃を形成して前から来る機体へ、ガンー！」と

「なかなか使い手を選びそうだな」

「そしてこちらはヌバフオック、我が軍の次期主力モビルスーツです。この機体はデュアルアイを搭載しております」

キタラの向かい側にはそれこそ水陸両用のようなずんぐりとした肩のモビルスーツが並んでいるが、シヤアはモビルスーツが立ち並ぶ奥の方に二本の脚で立つ特徴的な巨大な影を見ていた。

「ビグザムです、改良型です。この他にもペズン・ドワツジ、リック・ギガン、ドガツシヤなどがありますが、ただ今出払っております」

「そろそろ教えていただきたい・・・木星には何があるのかな？」

「は、はい？」

「このモビルスーツやモビルアーマーの数・・・軍隊を組織しているようなものだ」

「あ、は、はい・・・すでに現地へ向かっている先遣隊からこのような画像が送られてきました」

額から脂汗を流すヒトーリンの言葉に合わせるように、レヴァンは手に持っていたタブレット状端末の画面をシヤアに見せた。

そこには岩盤に人の形をした何かが張り付いている画像が映し出されていた。「これは・・・？」

「そしてもう一枚」

拡大画像には機械の繊維が人型に張り付いており、その横には小さく人形のようなものを取りついていた。そこを拡大すると

「・・・ザクがこのサイズとなればかなりの大きさだ」

「我々はこれがニュータイプの鍵を握るものと見ています。この物体の謎がわかればニュータイプの謎も」

「それがわかったところでどうするつもりだ？」シヤアの青く鋭い眼光がヒトーリンに突き刺さった。

「そつ、それは、その…」

「では・・・私の研究施設へ向かいましょうか」

冷や汗をかくヒトリーンに代わり、レヴァハン・メンゲレ・ヴィルヘルムの感情のない声が木霊し、静寂がおとずれた。

『No Trespassing』と書かれた扉をくぐると、薄暗い蛍光灯に照らされた機械の密集した空間があった。

その中に、無数の管がついた人ひとりが入れるカプセルが一つ。レヴァハンはそれを一瞥してシャアの方へくると向いた。

「少しテストをして頂いてもかまいませんか？」

≠

「はあつ・・・はあつ・・・うえつ…!!」

総統室横の部屋のバスルーム、カーンJr. は一糸纏わぬ汗にまみれた姿のまま嗚咽と共に液を垂れ流していた。彼もまた、封じられていた記憶を呼び覚ましていた。

「そうか・・・私は…いや・・・!」

「カーン・Jr. 様・・・?」

ウイノナの濡れた胸が、彼の背に密着した。

「いや…いいい…だいじょうぶ」カーン・Jr. は小刻みに体を震わせ、掴んでいる自分の腕に爪を立てた。

「すべて思い出した・・・あの男の事も・・・生かしておけない奴だつてのも」

≠

機械まみれの部屋の中で、テストを終えたシャアが静かに座っていた。

「おつかれさまでした。おかげで素晴らしいデータが取れました。」

「それはよかった」

受けたテストはモビルスーツの戦闘シミュレーションという一見シンプルなものだった。

「こちらは今後の技術開発に役立たせていただきます。」

「一つ聞きたいのだが」

「はい。」

シヤアはこの空間の壁に遮られたさらに向こうを見つめた。
「……いや、この向こうを見せてもらいたい」

「わかりました。」

レヴァハンが懐からリモコンを取出して壁の方へ向けると、鈍い光が部屋を満たしていった。

「これは……！」

さらなる空間が広がっていた。18メートルのモビルスーツが何機も横たわる事が出来るくらいの空間があった。

しかしそこには100メートルはあろうかという巨大なモビルスーツが、機械を剥き出しにして横たわっていた。そのシルエットには、倍以上の大きさがあるものの、見覚えがあった。

「サイコガンダムか……？」

「ええ。今はまだ開発中ですがサイコガンダムとは別物と言ってもいいかもしれません。これはアウター・ガンダムの発展機でもありません。総帥の手に一度わたったと思いますが。」

先ほどのテストはサイコガンダムMk-IV、つまりこの機体に総帥の戦闘データを搭載するのが目的でもあるのです。」

「……あまり私を甘く見ないで頂きたいな」まるでプログラムで返しているかのようなレヴァハンの口調に、シヤアは声を尖らせた。

「申し訳ありません、今はこう説明するしかないのです。まだ実験段階なものですから。」

≠

マイクロ・アーガマで一夜が明け、ジョブ・ジョン達クルーはその間殆ど口を聞かなかった。

彼らの前に置かれたモニターが24時間ぶりに点灯し、タロとアドルフ少佐が再び画面に現れた。

《じゃ、タロ・アサテイ、答えを聞かせて》

少佐が画面越しに右手で合図を送ると、マイクロ・アーガマクルーに再び機関銃が突き付けられた。この右手が振り下ろされた時、彼らは……

《………》

《何も言わないの?》

「タロおー!なんか言ええっ!」

少佐の小さな右手がゆっくりと振り下ろされていき、突き付けられる銃の引き金に力が加わっていく重圧に耐えきれなくなったクシナが叫ぶ。

《そっか……哀しいけどこれでお別れだね、さような》

《約束したんだ》

《ん?》

《今よりもいい世の中にするってさ。俺が……ニュータイプの魁になつてさ》

アドルフは眉間にしわを寄せ、タロを見ていた。

《エステンジアならさ、できるんだろ?》

タロが右手をスツと差し出し、アドルフはそれに応じた。すると、タロの意識が彼の中に流れ込み、アドルフの口角が上がった。
《………そのための義勇軍だよ》

「………交渉成立、か」

手を取り合う二人の姿にジョブ・ジョンは、安堵と一抹の不安を感じていた。

「じゃあ見に行こうか、地球に魂を引かれている奴らを。ケツアル
コアトルのエンジンがこちらにある今、急ぐことはない」

≠

火星圏小惑星アリエス基地の総統室の客間で、シヤアは部下のキグ
ナンと通信でやり取りをしていた。

「今回はとても助かった」

《いえ、私は今回はただの仲介ですから大したことは》

「彼を紹介してくれただけでもありがたい。ただ、ここにも長くはい
させられまい……私が地球圏へ連れて戻ったその時には、改めて協
力してくれ」

《了解いたしました、大佐》

「それと……こういうのも何だが、今回協力したあの男……」

《彼がなにか？》

その時、総統室のドアがノックされた。「いや・・・どうやら無事に到着したみたいだ。感謝する」

シヤアは通信を切り、扉の向こうの者たちに入るよう促した。

ドアがカチャリと開くと、二人の女に連れられた年端も行かぬ少女が姿を現した。

「お待ちしておりました、ミネバ様」

シヤアはどこかいたずらっぽく、少女を迎え入れた。

第9話 gear is Neutral

小惑星アリエス第0ドックベイ――

基地内でも限られた人間しか知らない裏門ともいえる港にまた一つ、船が到着していた。その中にはサイド0、カピラバストウコロニーからの住人達が連れてこられていた。

「ワインスタイン卿、到着いたしました」

「ここでは私のことはワインスタインではなくヴィルヘルムと呼んでください。では早速身体と脳波の検査を、ああそれと・・・」

青い髪をした端正な顔立ちの男は、表情を1ミリも動かさずにゆらりと眼鏡をかけ直した。

「第一補給艦乗組員全員の身体検査のデータをお願いします。」

「総帥もですか？」

「あのコロニーから来られたのですから当然です。」

そう言いながらヴィルヘルムの見ているモニターには、先の抗争の戦闘宙域の映像が流れていた。

「これがバイオセンサーの光・・・」

宇宙の闇にそぐわない怪光をズームすると、ガンダムタイプのモビルスーツの姿があった。

「この機体とパイロットの情報が欲しいのですが頼めますか？」

「伝手はありますので当たってみます」

「よろしく願います。それと、ラプラスの情報は？」

「餌は蒔いておきましたが、まだ何も」

「わかりました。なるべく早く鍵を完成させましょう。」

彼らが後にした研究室では、"リユース・サイコ・デバイス"の資料データが鈍い光を放っていた。

≠

エスタンジアの所有するエンドラ級巡洋艦バレンドラ、そのメインブリッジでは囚われの身となっているマイクロ・アーガマ隊を前に、アドルフが指令を下していた。

「ネオ・ジオンのハマーン・カーンがミネバ・ザビを連れ地球へ降下

する。そこで、ダカールへ降下し現地徴用兵として紛れ込む。幸いにもネオ・ジオン軍の地盤は緩いからね」

「なんでそんなことすんのさ」オリガだ。

「僕らは反地球連邦であり反ネオ・ジオン、受け入れられるためには双方の権威をここで落としておきたいんだ」

ダカールには地球連邦の首都が置かれていたが、8月29日をもってネオ・ジオンの占領下にあった。

「それにうまくいけば戦力も手に入る。僕たちならではの狩場でもあるんだ」アドルフはタロの顔写真の付いた偽造軍人証を差し出した。

「私はそんな作戦やらないからね……！あんな……ひどいこと……」クシナは焼けていくコロニーの街を思い出していた。

「それなら心配ないよ」

アドルフはスクリーンに映る碧い水の星へ

「タロ・アサティ以外はここに人質として残ってもらうからね」
愛をこめた。

≠

手術室、サイコガンダムの建造ドックを挟んだ機械まみれの研究室の向かい側にそれはあり、その手術室の隣のコンピューター室にヴィルヘルムはいた。

「基準値を超えていたのは10名弱……では彼らを金属繊維にサイコ・ファイバーを使用した脳と脊髄のR・P・D実験、他を通常のR・P・Dの実験にまわします。」

それから間もなく、空に血の臭いが広がった。

≠

ゼーレーヴエ艦、火星圏小惑星基地アリエスまで残り二日——

東條は自室に籠りアリエス司令部からの指令書に返信をしていた。『被検体の回収完了及びニュータイプを一名確保。ラプラスの手掛りは依然ナシ』

「煙草くれる？切らしちゃって……」

キューベルの声でタイプの手を止め、煙草を一本指に挟み、彼女が啜ると火をつけた。「で、どう?」

「アウター・ガンダムのデータ、それとラプラスの尻尾を掴め、と」
「……なにそれ?ラプラス?」耳馴染みのない語感に顔をしかめる。

「俺も見当がつかん……ラプラスの箱が空けば連邦政府が崩壊するらしい」尻尾と言うのは手掛かりのことを言っているようだ。

「……はあ?都市伝説か何か?」キューベルはあまりにも眉唾な話にため息をついた。「それ、わたし達じゃなくてもいいんじゃない?」

「文面を見る限り他にも送っているな。ラプラスの件だけ違和感がある」

「私たちの他に別動隊がいるってことね……」
部屋には沈黙が流れ、やがて煙草の火も消えた。

「もう一本吸うか?」

「いいわ、悪いもの」

キューベルが部屋を出ていき、残香が漂った。

≠

旧世紀、科学者であり宇宙旅行の父ツイオルコフスキーの残した言葉に、『地球は人類のゆりかごである』とある。

またその後には『ゆりかごで一生を過ごす者はいない』と続くが、宇宙世紀という新世紀を迎えても、人類は未だゆりかごから少し出る程度であった。

しかし同時に、そのゆりかごから少し出た所で一生を過ごす者も現れている。

スペース・ノイド——宇宙へ進出した人類がスペースコロニーという人工の島を作り、そこで子を産み、育て、死んでいく、新たな生活形態を獲得した人間が生まれていた。

半世紀以上が経過すると、島からゆりかごへ逆行するものもいる。そして彼らは殆どと言っていいほど試験にさらされるのだ。

季節によつて差はあるものの、人の造りしモノらしくスペースコロ

ニーは快適な気温に設定されており、創造主に過酷な試練を与えることとはない。

しかし、ゆりかごはそうはいかない。

人類が文明を獲得してから造りかえられてはいるが、人の手の届いていない場所では彼らに容赦なく試練を与え、時には命を土に還すことすらあるのだ。

地球上の砂漠と呼ばれる地帯では、昼夜の気温差が激しく見渡す限り砂しかない。そこに今、二人分の足跡が次々と刻まれていた。

「悪いなあこんな味気ないことしちまつて」ニロンの口からはつらつらと心のない言葉が湯水のように流れ出ていた。「クシナとがよかったよなあ」

「え．．．？ああ、まあ．．．はい」

天を仰げば街の光ではない、幾百、幾万、幾億の星が瞬いている。街の光ではない本物の瞬きを目に、クシナとコロニーでの会話を思い出していた。

タロの意識は今にも一千万年の銀河の中へ吸い込まれていきそうだった。

二人はエスタンジア軍としてダカール降下作戦を始めていた。マイクロ・アーガマ隊の参加者はタロのみの予定だったが、口の上しいニロンがアドルフを言いくるめて作戦に同行していたのだ。

目的地の迎賓館のある市街地までは20kmほどあるが、怪しまれない程度の距離にコムサイで地球へ降下していた。

「どうした？」

「いや．．．体が重くて」

「そりゃ地球だからな」

本物の重力が身体にのしかかり、二人の口からはただ息が漏れていた。

「すげえなあ．．．俺達は今まであの中にいたんだぜ？」ニロンは恋人にもはかないような台詞をはく。「なんつーかさあ、今まで地球つてのは閉鎖されたもんだと思ってたんだよ。わかるか？」

もはや独白と化した言葉は、強いて言えばこのゆりかごに向けてい

た。

「でもいざ降りてみるとすごい解放された気分だ」

「……………」

「宇宙って案外閉鎖されてんだよなあ、コロニーの中にいるか、コックピットの中にいるか、あるいは宇宙服に閉じ込められているか」

タロはこの時間がとても奇妙に感じていた。これも、ゆりかごで生身を晒して解放されたからだろうか。

「裸で宇宙に出たらどうなるか知ってるか？」

「……………」

「-274℃の真空と放射線にさらされて沸騰すんだとき。怖いよなあ」

「……………はあ」

「ここも日が当たるとバカみたいに熱くなるんだぜ？50℃だったかなあ

コロニーの方がはるかにましだ」

タロは会話として成り立たせる努力もやめ、最早返事をしなかった。勝手に喋ってくれれば余計な労力を使うことなく退屈のぎになってくれる。

またしばらく、靴の音だけが鳴った。

「なあ、猿食ったことあるか？」

今までの話からの脈絡がなく、タロは戸惑った。

「さ、さあ…缶詰でなら…たぶん」

「そうか」

それからまたしばらくニロンは口を閉ざした。日ごろからマイペースというのか、独特の間があったが、地球と言う特殊な環境下が彼の脳のセーフティロックを幾分か解除していたようだ。

砂丘を一つ越えたころ、再びニロンの口から言葉が流れた。

「昔、俺はジオンにいてなあ…降下作戦でジャブローってとこに降りることになったんだ」

「……………」

「さあ降りるか！って時俺は叫んだね、降りられるのかよって

まあ、無事にはおりられなかったんだけどな」

瞬く星空の下で、ニロンの話は次第に生々しさを帯びていった。

「ザクに弾が当たって、爆発する前に何とか脱出して、生きてるやつを探した。」

けどな、残骸しか見つからないんだよ、何度探してもな。俺は地獄にでも来たのかと思った」

タロはただ聞いていた。なにも口にせず、ただ聞いていた。

「そうして歩いてるうちにいつの間にか気を失ってな、気が付いたら同じ隊の奴が肉をくれたんだ。腹減ってる事すら忘れてたから必死に食いついた」

「それが…猿の肉…」

「……まあな、美味かったよ」

「その肉って…もしかして」タロには言葉の奥にある意味がわかってしまった。「なんで軍人やってんですか…なんで連邦で…」

「運よくモビルスーツから脱出したやつ肉片がぼとぼと落ちてくるんだよ。ジャブローはそんなところだった。」

中にはそういうのがトラウマになって眠れなくなったり発狂したりする奴もいるんだよなあ」

「……なんでそんなことを話せるんですか」

「なんでだろうなあ…あんなもんずつと見てたらおかしくなるのが普通だからな。たぶん壊れちまつてるんだ、俺は」

タロは力の行き場を失い、いうことを聞かない体はただ硬直していた。

「なあ、俺たちが銃を突きつけられている間、お前はあいつらにこう言ってたよな？」

「今よりもいい時代にする、って」

「いい時代ってなんだ？」

ニロンのヤマアラシの様に急に尖った意識がタロの心臓に突き付けられた。

いつも一歩引いて何処か虚ろだった彼の眼は今、はつきりとタロに向けられ、普段の昼行燈は張り付いていなかった。

「戦争を・・・無くして」

「戦争が無けりや平和なのか？」

彼のその問いかけは、簡単なようで、タロの中にあるものではなかった。

≠

R・P・Dの試験を一先ず終え、ヴィルヘルムは実験データを眺めていた。

「やはりこの二つの成功率は低いですね。」

「ええ、脊髄はゼロではないですが脳は不可能です。特に脳への信号は一番ダイレクトなため負担が大きすぎます」

「では今まで通り脳はメモリー移植をメインにしましょう。」

「はい。それと、例のパイロットのデータを入手いたしました」

デバイスにチップが差し込まれ、顔写真と共にパイロットのプロファイルがモニターに現れた。

「・・・カミュー・ビダン、ですか。彼は今どちらに？」

「消息不明です」

「そうですか。それは残念。」

「おそらく彼のニュータイプとしての能力は非常に高く、バイオセンサーの光もそれゆえのものと思われれます。もし彼の所在がつかめれば私たちの実験に協力してもらうのですが・・・」

「我々は無差別に生体実験をしているわけではありません、そこをお忘れなく。ああそれと・・・」

第0ドックベイのエアロックが開き、人だった物が放出された。

≠

広大な砂の地平線が光を帯び、じりじりと大地が熱せられてゆくころ、タロとニロンは迎賓館へたどり着き別行動を取っていた。

他にもエスタンジアからの潜入者がいるのだが艦の違う別動隊であり、顔も声も認識していない。

「おい、ここで何してる！」タロがうろうろしていると、まだ若そうな男の声に呼び止められた。

「あ、ああ、えつと・・・」

「俺はラド・カデイハだ！わからないことがあれば何でも聞いてくれ！」

偽造した身分証をかざすと、若い男は手を差し伸べてきた。

「あ、あの…俺はどうすれば？」

「そろそろミネバ様のパレードが始まる。通りの警備に就け！」

ラド・カデイハはまだ若く、護衛任務に張り切っていた。そのおかげで、タロの無礼な態度も咎めることはなかった。

陽が真上に登る頃には迎賓館へ続く大通りを人が埋め、間もなくして華やかなパレードが行われていた。

タロがジオンの軍服を身に纏い、人込みを掻き分け警備位置に着くと、紙吹雪の舞う中をバイクを先導に、3台の黒いオープンリムジンが民衆に応えるようにゆっくりと走り抜けていった。

タロはその先頭車両から手を振る年端も行かぬ少女、ネオ・ジオン総帥ミネバ・ラオ・ザビには目もくれず、2両目の中央座席に座るミネバの摂政でありネオ・ジオンの実質指導者に集中していた。

『あれがハマーンって人か…顔は似てる、っていうか同じだけど…』

カーン・Jr. の手を取った瞬間に垣間見たモノに、彼女の姿はな
い。

クリアな景色、表面的な薄い景色、濁った景色、混濁した意識、その奥には或る男の顔と声、そこに触れようとした途端、拒絶されたのだ。

『この人、違う…！』

それがタロの感じた事だった。

そして今、彼女を観て一つ分かったことがあった。

『同じだ…黒い部分が、けど…この人はそれがもっと深いところにある…』

あいつは…もっと表面にあった、ような…ん…？』

背後からやや強めの視線を感じたが、すぐにいずこへ消えた。

「気のせいか…」

その視線の正体はこの後騒ぎを起こすアーガマの少年達だが、タロ

と直に接触することはなかった。

真上にあつた陽は再び地平線に沈み、ダカールの地は再び夜に包まれていった。

昼間の業務をそつなくこなしたタロ・アサティは、迎賓館の警護用に配置されたモビルスーツの一つ、ドワツジに乗り込みながらエスタンジアからの合図を待っていた。

連邦軍へ潜入した別動隊が迎賓館へ攻撃を仕掛け、こちらが迎え撃つ体でわざと撃破され、ネオ・ジオンの権威を落とすというなんとも回りくどく命知らずな作戦である。

しかし、現状ではただの賊でしかないエスタンジアがとれる数少ない手段でもあった。

ネオ・ジオン総帥、ミネバ・ザビ妃殿下である。妃殿下は、地球圏より遠く離れたアクシズの地より、アースノイドと、スペースノイドの融和、そして繁栄を日夜祈っておられた。今日この良き日に、ダカールの地に、ネオ・ジオンの足跡を記すことを妃殿下はこの上なくお喜びである。

かくも盛大にお集まりいただき、妃殿下の後見人たるこのハマーン、妃殿下に代わり、地球連邦政府の関係各位に、心よりお礼を申し上げる！

ハマーン・カーンの開式の辞と共に、一見和やかなパーティが始まった。場内の音声は警護隊に渡された無線により、合法的に盗聴“できるようになっていた。

《おい、そこで何してる》

いつの間にやらもう一機のドワツジの手が自機の肩を掴み、お肌のふれあい回線が開通していた。

「ああ、ニロンさん。今までどこいたんです」

《……なんだよノリ悪いなあ》

「ニュータイプなんで」

《ニュータイプを言い訳に使うんじゃないよ。それにニュータイプなら俺の考えくらい読み取れるだろ？》

「その上で、ですよ」

《なんつーかお前はもつと可愛げってもんを身につけた方がいいぞ?》

「嫌ですよめんどくさい」

《人間味つてのがどっか欠落してんだよお前は》

「あんたもでしょ」

《……おめでたい性格してんな》

「お互い様です。で、どこにいたんです?」

《昼は館内今こつち》

『地球連邦つて…ザビ家を倒そうとした大人の人たちだったんじゃないの?』

「え?」

《どうした?》

「今何か聞こえませんでした?」

《いや》

『なんなの、これ…!みんな…嘘をついてる!心から笑ってる人なんて、ここには誰もいない!』

それはタロだけに聞こえていた、タロだけが感じ取っていた少女の困惑と嫌悪から出る心の叫びだった。

『この卑屈さはなに?これが大人なの?!この人たちは一体なんなの!?!』

その少女のいる迎賓館へと意識を向けると、国を捨て己の保身に走り、大義を捨てネオ・ジオンに媚びへつらう地球連邦の大人達の俗念が渦巻いていた。

「そうか…これが、こいつらが魂を引かれた奴らか…!腐ってる……!」

ダウンッ

大きな粒子の塊が迎賓館付近に着弾した。

《よし、合図だ》

「違うー!」

タロはなぜかそう感じた。この光弾が合図ではないと、これは予定がないことだと。

数分と待たないうちに見たことのないモビルスーツたちが迎賓館前に上陸し、対峙する形となった。

金色の機体もいたが、その他の機体はカラーリングを見れば、さすがのタロにもわかった。

《よおーし作戦開始だ!》

「待ってください!こいつらは違います!」

《どういことだ》

その時、前方の重火器モビルスーツ、ズサが撃破された。

《みたいだな・・・ここは引くか!》

みなさん!落ち着いていただきたい!これもセレモニーであります!

《だとよ!肝が据わってんなあこの姉ちゃん》

無線からは相も変わらずハマーンの声が聞こえてくる。

「ええ、下手には動けないですね、どうします!」

《どっかの陰で脱出するしかねえだろ》

無線からクラシックな音楽が流れ出すと共に、ドワツジ両機に警報が鳴り、ガンダムMk-IIと金のモビルスーツ、百式が光弾を放ちながら接近してきた。

《ちっ!ロックオンかよ》

「やるしか・・・ないか」

全天周モニターの正面で「ガンダム」がビームサーベルを取出ながら迫る間に、ジャイアント・バズを腰につけ、背後からヒートサーベルを構えた。

「・・・またガンダムが敵かよ!」

二種類のサーベルが衝突し、鏝迫り合いの火花を散らした。

≠

「アドルフ様」「どうした?」

大気圏を遥か地にし、重力に掴まれないくらいの宙域にバレンドらは待機していた。

「カラバに潜伏した分隊からの報告によると、既にダカールで戦闘が始まっている模様です」

「そう」

「・・・てめえ、タロをどうする気だ」

傷がある程度塞がり、なんとか歩けるくらいまで回復したグランがアドルフに迫っていた。

「別に？どうもしない」

「なんだと？」

「もしこの作戦で死んだらそれまでだよ、生きて帰ってくる方がいいけどね」

「——ッ!!」

薄ら笑いを顔ではなく声に浮かべた少年の胸ぐらを掴みにかかるも、塞がりきつてない傷口がそれを止めた。「ぐうあッ——!」

「あーもう無理しちゃだめだよおっさん。タロにはもう一役二役かかってもらいたいんだ」

「あいつに連邦もジオンもぶっ潰してもらおうってか？あいつはそんなこと」

「先に面倒な奴を消す、タロにはそれを手伝ってもらうんだ」アドルフの眼はいつの間にかスクリーンに映った蒼い星を見ていた。「ニュータイプを食い物にするあいつを・・・」

≠

ダカール市街地と言うこともあり、モビルスーツの白兵戦は銃撃戦へ突入していた。

ライフルのビームが機体を掠める。

《動きが悪いな、どうした？機体があわないか》

「違いますよ！けど・・・」

《けどなんだ？》

タロは、リポークロニーを、そして戦争孤児になったあの日のことを思い出していた。

『もう・・・燃やすものか!』

『失望したぞジユドー・アーシター！お前がそれほど子どもだとは思わなかった』

『残念だったな、せつかくのパーティーがめっちゃめっちゃになって!』

『なんだ!?!』

タロは再び、無線を傍受するように、声を捉えた。

迎賓館内ではネオ・ジオンの女傑、ハマーン・カーンが銃口を向けていた。その先には、ガンダムを襲撃と共に館内に紛れ込んだもう一人のニュータイプ少年、ジウド・アーシタがいた。

二人のニュータイプの邂逅は、タロ・アサティの干渉を許した。

『動くな！お前にはわからないのか…このパーティーに駆けつける、我らネオ・ジオンに尻尾を振る大人どもこそ、この地球を腐らせる根源なのだ』

『だからって、あなたに正義があるとは思えない！』

『私はアステロイド・ベルトで…ぞつとするほど暗く冷たい宇宙を見つめながら、何年も生きてきた…』

その間に、地球の愚かな人間たちは何をした…地球再建に奔走するあまり、地球の汚染を顧みず！あろうことか汚染を拡大させてきた！それを許すわけには行かない…！』

漆黒のイメージがタロに流れ込んできた。『これが…この人の闇…?』

『フッフ…私はお前といると、すらすらと本心をしゃべってしまう…不思議なものだ』

本心…これが？

『そんなこと言っても、俺はあんたの物にはならない！』

『わかっている、お前には確かにニュータイプの要素を感じるが…お前は流れに乗るということを知らなさ過ぎる。直感だけに頼っていれば、いずれ破滅するぞ』

『ニュータイプなんて知らないね！俺はリイナを助けるだけだ！』

『この期に及んで、わたくしの感情で動くとは…初めは私に期待を抱かせ、最後の最後に私を裏切る…ジウド・アーシタ、お前もだ！』

銃声、その刹那、彼の体の痛みと彼女の心の痛みがタロに奔った。

『お兄ちゃん！』

『リイナ！』

『おにいちゃん……』

リイナと呼ばれたその声は、タロが先に聞いたあの少女のものだった。奇しくも自分と同じニュータイプの兄妹が「ここ」にもいた。

『どけリイナ！』『いや！今度はあたしがお兄ちゃんを助ける番よ！』

『嫌いだね！そういうベタベタしたのは……続きは天国とかでやるんだな!!』

どす黒い血のような「波」がタロに押し寄せた。「いけない!!そんな黒い感情を出したら……!!」

ジユドーに向けられた銃口から射出された一発の弾丸が、リイナに命中した。

妹が身を挺して、兄を守ったのだ。

ハマーンの黒い感情がリイナの鮮血により哀しみに染まる。しかし、それはすぐに怖れへと変わることになる。

リイナを撃たれた兄の、ジユドーの怒りの業火はハマーンを、そしてタロをも飲み込んでいった。

「あ……あああああああああ!!!」

タロはドワツジの持つジャイアント・バズの砲口をジユドーのいる迎賓館へ向けていた。

「おいバカー！なにやってんだ!」

弾はニロンが自機のアームで即座に砲身を掴んでずらしたおかげで起道が逸れ、迎賓館に着弾せずに済んだ。

「おまえ……」

《ニロンさん、降ります》

「あ？なんだって？」

《彼に会わなくちゃいけない!》

ドワツジのコックピットハッチが開き、タロが生身で市街地に降りて行った。「なに考えてんだあいつは……ま、このままどっか行っちゃおうのもありだな」

二機のドワツジは抜け殻のまま市街地に立っていた。

二人が迎賓館前までたどり着くと、正門で二人の男が揉めていた。金髪の若い男がもう一人の兵士の胸ぐらを掴んでいた。

『あの顔・・・そうだ、パレードの車に乗っていたやつだ』

「本当にリイナは、少年と一緒に出て行ったんだな?！」

「は、はいッ！グレミー様のご命令と言つて」

「誰が命令するものかつ!!」

グレミーと呼ばれた金髪の男は掴んでいた手をほどき、どこかへ走り去った。もう一人の兵士も、地面に何かを見つけるとグレミーの後を追つていった。

「よし、今だ！」

「ちよつと待て、なにすんのか聞いてねえぞ？」

「車で後をつけます。まだそう遠くへ行つていないはずだ・・・！」

「だから誰が！主語を言え主語を！」

「俺と同じニュータイプがいるんですよ!!」「誰だ！そこにいるのは?！」

タロの怒声がもう一人の護衛兵を呼び寄せてしまった。

しかしある意味では運がよかった。その護衛兵はタロと既に顔見知りだった。

「ラド！ラド・カデイハ！」

「お前は今朝の！えーつと・・・」

「俺ですよ、オレ！」タロは再び彼に軍人証を突きつけた。

「ああ、タロ・アサティ！状況はどうだ？」

「あ、は、はいっ！ええと・・・」

「やあどうも、俺たちは市街地でやってたんだが至急増援が必要になった。一刻も早くグレミー様に報告するために車が欲しい」

「だ、誰だ!？」

「上官」

ニロンが軍人証を見せラドを説き伏せた。

「し、失礼しました！こちらです、どうぞ！」

「すまないが運転も頼みたい」

ジオン軍人証を当たり前前のように振りかざすニロンをまだ若いラド

は寸分も疑わず、彼の言いなりになっていた。

「連れてくんですか？」

「連れて行って口封じしとかなきゃ後々面倒だろ」

ニロンは小さな声でやり取りすると「彼の言うとおりに車を進めてくれ」とラドと車を動かした。

車は市街地を抜け、木立のある砂浜へと走っていった。

≠

力が・・・入らない・・・だめ・・・こんなところでおわっちゃ・・・
おにいちゃんと・・・プルと・・・一緒に・・・

「ほんとにこんなところにいんのか？」

「俺の勘が間違いないければ」

「・・・おにいちゃん・・・？」

「二応銃構えとけ、こういうところはどうってつけどだからな」

ちがう・・・似てるけどおにいちゃんじゃない・・・！だれなの・・・

？

『わ、わかったよ、ルー！』『ルーさん！だめ！グレミーを信じちゃ

!!』

リイナが目を開けると、二人の男の顔があった。

「ルーさん？」

「戦闘が激しくなってきた、早く車に乗せるぞ」

「だ、だれ?!」リイナの声もよそに、二人の内のまだ若い方がリイナ

の身体を抱えた。「いたっ・・・」

「ニロンさん！この子ケガして」

「早くしろ！いつ流れ弾が来るかわかんねえぞ」

「・・・ゴメンな。ちよつと痛いけど・・・がまんしてな」

「まって！まだ、プル・・・が・・・」リイナは再び気を失った。

タロとニロンは木々の小屋の中で寝かされていたニュータイプの少女、リイナを車に乗せてその場を離れた。遙か遠くになった小屋はモビルスーツという流れ弾によって焼失していた。

「間一髪だったな」

「はい・・・」

ニロンは助手席に乗り、後部座席でタロがリイナのできる限りの看護をしていた。

「どうだ？血は止まったか？」タロは彼女の出血している個所をノーマルスーツ用の応急テープを地肌に貼り、できる限りの力で強く抑えていた。

「た、たぶん」

「ラド、この近くに医療施設はないのか？」

「い、医療団のホットラインにかけたので、ここら辺で待っていれば」

ラドは手際よくいつのまにやら自身のTシャツを目印代わりに車にくくりつけていた。辺りが暗くなっているのでどれほどの意味があるかはわからないが。

「お、おい！前！前！」

「え？うわあつつつ．．．！」

ラドが急ブレーキを踏んだ先には、ヘッドライトに照らされ浮かび上がった一台の白いキャンピングカーが止まっていた。

中から白い服に身を包んだ金髪の女性が姿を現し、車に乗った3人の「ジオン軍人」を一瞥した。

「治療の必要な方は？」

「ここです！この子…撃たれて」

「止血は？」

「応急テープと…圧迫で…なんとか」

「血液型は？」

「わ…わかりません」タロは何もできない自分に落胆しながらも、リイナを触診する彼女の姿が気になってしまっていた。

「．．．．あの人に似てる」

「はい？」

「あ、いえ．．．」

リイナの目にペンライトの光を当てる彼女の顔が、事の重大さを物語っていた。

「．．．非常に危険な状態です。どなたか同伴をお願いしたいので

すが」

「じゃあ俺が「ラド、お前が行け」

ニロンはタロの言葉を遮ってまでラドに命じた。

「え!?!」

「上官命令だ。俺はこのことを上部に伝えておく」それは、ニロンの礼の言葉であった。

「は、はいっ!了解です!」

「では、お願いします」

車の横で医療団の隊員がリイナを担架に乗せている間、彼女はタロを見ていた。

「あ……すみません、ほんとは俺がついてってやらないとなんですけど」

「えっ?え、ええ……大丈夫よ。後は私たちにまかせて」

リイナが医療車に乗せられたのを確認すると彼女は一礼し

「では、一段落したらこちらから連絡を差し上げます」

「あの……あの子にはお兄さんがいるみたいなので……目が覚めたら彼女に聞いてください」

「えっ?」

「ジユドー・アーシタ……だったと思います……確か」

彼女は何も言わずタロの目を、自分を同じ青い瞳を見つめていた。

「……わかりました。では後は私たちが」

「あ、あのっ!」タロは思わず声を張り上げていた。「……よろ

しくお願いします!!」

その姿に、それまで厳たる表情だった彼女が僅かに微笑んだ。

「……ええ大丈夫よ、だから泣くんじゃありません」

リイナを何とか送り届け帰路に就いた二人はダカールへ向かわず、降り立ったコムサイまで車を走らせていた。

「なんっ!か……人助けに地球に降りたって感じだな。どうすんだ?」

命令違反で軍法会議もんだぞ?賊に軍法会議なんてねーだろーけど」

「目的は達成してますよ。僕は地球人を見に行くだけでよかつたん

ですから」

「ニュータイプを考えてる事はわからねえや」ニロンはフツと夜空に投げかけた。「けど、やっと16歳に見えたよ、おまえ」

砂埃の混じる夜風が、二人に吹いた。

≠

「止血完了、何とか呼吸も安定しました」

医療者の中でリイナの体から銃弾が取り除かれ、一先ずの救命処置が終わった。幸いにも傷は銃創としては深くはなかった。「後は血液型しだいね」

彼女が「ふう」と一息つくくと、ラドが目を潤ませて「ありがとうございまして」と深々と頭を下げていた。

「まだ安心しきるのは早いわ・・・けど、あなたの応急処置がこの子を救ったのよ」

「い、いえ…私はほとんど何もしていません。あの二人が…あの少年が必死になってやっていたから」

「あの少年・・・」

「ええ、タロ・アサティという・・・」途端、彼女の顔が曇りラドは言葉を止めた。「どうしたんですか？」

「いえ、たいしたことじゃないわ。ただ」彼女は、遠い昔を見ていた。「あの子の目が、とても兄に似ている・・・」

「あれ？」医療団の一人から声が飛んできた。「ご兄弟いらっしやっただんですか？」

彼女はそれには答えず、通話機を手に取りどこかへ掛けていた。「お久しぶりね、カイ。調べてほしい人がいるのだけど・・・」

第10話 黄昏の渦く Twilight tour
billion)

ニュータイプ——

類人猿からの急激な進化を経た人間の、宇宙への環境適応能力が生み出した次なる段階の萌芽である。

常人よりはるかに高い空間認識能力と超感覚的知覚を持ち合わせた次世代型の人間と言えればわかりやすいだろう。

ここでいう超感覚的知覚は超能力よりも第六感の事と思っていただいてもかまわないのだが、世間では千里眼のようなエスパーとして捉えられていたりもする。

人類が棄民をきっかけに宇宙へ進出してから早半世紀以上の刻が経ち、そう呼ばれる人々が現れていた。

しかしそれは時としてオールドタイプと呼ばれる者たちの、まだ目覚めていない者たちの餌食になってしまう。ニュータイプの数が圧倒的に少ない故に、彼らは強制的に戦場に駆り出されることすらあるのだ。

さて、ここで一つ問題

ニュータイプが戦争の道具にされないためにはどうすれば済むだろうか？

答えはいたって簡単。

限られた同種をかき集め、目覚めていない者たちは覚醒させる。つまり数を増やせばよいのだ。

あるいは、力を手に入れる。

力とは立場であり、権力である。

しかしその力を手に入れるにはとても険しい荊の道を歩むことになる。たとえば人より感覚が優れていたところで、力が無ければ道具で終わってしまうのだ。

ところが時折その道を歩む靴が手に入る事がある。その靴は自分で探し出すか、偶然にも見つけるか

さて、この物語の登場人物にはそんな者が2人いる。一人はタロ・アサテイ、

そして――

エスタンジア――かつて第二次大戦以降、ナチスの残党が逃げ延びた幻の地としてまことしやかに囁かれていた。

その名は今、反地球連邦と反ネオ・ジオンの連合義勇軍の名として水面下で根を伸ばしている。

その徒党を束ねるのは齢十一歳のアドルフ・ドウカヴニー。

彼はなにも急にこの地位に就いたわけではない。かつてニュータイプ研究所に被検体として身を置いていた彼への、一つの実験が事の始まりだった。

ニュータイプ実験開発にサイコミュ搭載モビルアーマーなどが主流になっている中で、(サイコミュとはニュータイプの発する特殊な脳波を利用した機体制御システムである)

彼のいた研究所ではモビルスーツなどの白兵戦闘空域におけるサイコミュシステム搭載新型戦艦の開発計画が秘密裏に進められていた。

それに伴うニュータイプによる指揮系統の形成データ採集のためにアドルフにエンドラ級巡洋艦バレンドドラが与えられたのだ。

アドルフは、研究員という大人のいうことを静かに聴いている内に次第にこのような思いが芽生えた。

『なんでこいつらに利用されてるんだ?』

そして、自身の担当研究員が地球圏を離れたのをいいことに彼は、与えられた巡洋艦で海賊宙域への逃走を図り、今に至った。

ひとえにニュータイプと言っても所詮は子供、ある程度の精神的年季が無ければ力も発揮することはない。彼がもう少し歳を経ているらもつと狡猾なやり方ができただろう。

一方、もう一人の靴を与えられた少年、タロ・アサテイの中では緩やかな葛藤がおきていた。

地球降下作戦時「戦争が無けりや平和なのか」とニロンは訊いた。確かに戦争で流されたコロニーに戦争はなかった。しかしコロ

ニーで過ごした日々は平和だっただろうか？

記憶の底に微かに残る戦争以前の、父と母がいた、まだ家族で暮らしていた頃の方が心に安らぎがあった。

戦争さえなければと何度思ったことだろう。

家族を引き裂かれ、フアナと二人で何とか生き延びる道を探し、タロは誰に頼ることも甘えることも出来なかった。コロニーの乾いた大地は、心をやせさせていった。

いつからか、フアナを守るといふ思いが心のよりどころになっていた。

そんな中、突如として垂らされた赤い蜘蛛の糸は、彼をいつの間にかこんなところにまで引き込んでいた。

戦争が終われば本当にあの頃に戻るのだろうか

父さんも母さんも、もういないのに

なんで俺はここにいるんだろう

戦争を終わらせるため？戦争が終わってからは？

あのコロニーからフアナを連れてどこへ行けば・・・

地球降下作戦以来、そんな漠然とした思いがタロの中で湧き上がっていた。

「聞いているのか？タロ・アサティ」

「えっ？あ、ああ」

エスタンジアを率いる少年、アドルフ・ドウカヴニーの声でタロは我に返った。

「次の作戦は君のアウトターガンダムにかかっているんだよ」

「わかっている。で、ダカール制圧は？」

「え？」

「あ、いや…魂を引かれた奴らがダカールにいたから…あいつらが戦争を引き起こしてんじゃないかってさ」

「……そのために戦力を補充するのが今回の作戦だ。」

ただでさえ少ない戦力を君に半分も削られたんだ、その分きっちり働いてもらう」

その靴を手に入れたとしても最後まで履き潰さずに歩けるとは限

らない。

宇宙世紀0088、ジオン残党勢力アクシズがネオ・ジオンとして蜂起し、後に第一次ネオ・ジオン抗争と呼ばれる歴史の傍らで、記録に残らない小さな戦争があった。

≠

「あーもう！どこよ総統室は!!」

ゼーレーヴエ隊がアリエスに着いて数日、ネオ・ジオン総帥であるシヤア・アズナブルからの呼び出しがあった。

人が出払っているのか、案内人すら確保できていない彼ら、主に艦長であるキューベルはシヤアを探し当てるのに躍起になっていた。

「だいたい赤い彗星をとうとうこの目で拝めるって時になによ身体検査って！失礼だと思わないのかしら勝手に人を病人扱いして！」

「そりゃこんなへんぴな場所で変な病気が流行ったら困るからじゃないですかねえ」

「うるさいー！」

迫水はこういう時になだめ役のつもりなのだがご覧のとおり火に油を注いでしまう。

「そういえばシヤアって少し前にダカールで演説してたよな？」

迫水は特にリアクションもせず話題を変えた。エヴァが「それ見たあ〜」とのんきに返すのをよそに

「ああ、その時は名前を変えてエウーゴにいたらしいが」東條が応えた。

「それで次はネオ・ジオンの総帥かぁ・・・お忙しい人だ」

「あ、ここじゃないすか？」ギョんターが指さした先には、総統室と書かれた扉があった。

キューベルはゴクリと生唾を飲み込み「ゼーレーヴエ隊長キューベル・ポルシエ以下4名、総帥にごあいさつに伺いました！」「艦長じゃないの？」

「入りましたまえ」

扉の向こうからテレビやラジオで聞いた声に胸を押さえ、ゆっくりと扉を開けた。

部屋には総統執務室よろしくソファと木彫りのテーブルが両脇に置かれ、ソファにはその声からは似ても似つかないあどけない少女が座っていた。

「みっ、ミネバ様……?!」

予想外の人物に一同が呆然として、「そこで固まられるのは困るな」奥の総統机に、声の主であるシャアの姿があった。

「え、えと……あの……」憧れの赤い彗星よりも近くの距離にいる王女を目前に、キューベルの思考回路は停止していた。

「座りたまえ、君たちの話も聞きたい」

その言葉に従い、ゼーレーヴェ一行はちよこんと座っているミネバの向かい側のソファにドカツと座った。「ちよっ、何も全員こっちに座ることないじゃない!」

彼らが一先ず落ち着いたのを見計らうと

「さて……君たちがここまで来た訳を聞かせてくれないか？」シャアの猫撫で声が静かに響き渡った。

≠

「あれ?」

パトリシアが身体検査を終えるとキューベルたちではなく、オペレーターのアルマと数名のメカニックがいた。

「あ、あの」ファナがアルマに尋ねた。「あ!ファナさんとプルさん!」

「キューベルさんたちは……?」

「艦長なら総帥からお呼びがかかってましたよ?てつきり一緒に行かれたのかと」

「総帥……?」

「ええ!私も初めて知ったんですけど総帥ってあの赤い彗星のシャアなんですよ!」

≠

「ほう、ヴィルヘルムが?」

キューベルはニュータイプ of 被検体の護送任務により紆余曲折しながらアリエスへ辿り着いた経緯を話していた。

「ええ、私たちは彼から指令を受けてここまで来たんです」

「そうか・・・」シヤアはチラリとミネバを見て声を落とし「実をいうと私がここに来たのもほんの数週間前だな、彼らの素性が少しでも知りたい」

「で、では、その2人の情報収集のために私たちを・・・？」

「それもあるが：それよりも気にかかるのは先ほど言っていた2人だ」

「リモーネ・パトリシア・プルツカとファナ・コ・アサテイですか？」

「そうだ。彼女たちをヴィルヘルムに近づけない方がいい」

「えっ？それってどういう・・・」

「君たちも知っている様にヴィルヘルムはニュータイプ研究所のシヤアが言葉を言い終わらないうちに、ドンツと重く鈍い打音が室内を巡った。

「・・・誰かいるんですか？」

「ああ、私の秘書だ。今は少し気が立っていて・・・」シヤアに突然黙り、眉間に皺をよせ顎に指を当てた。

「あのく・・・」

訝しげな視線が突き刺さる中で

「いや、やはり彼にも加わってもらおう」おもむろに部屋の左奥へと歩いていき戸を開けた。

そこに現れた人物にキューベルらは目を疑った。

「ハマーン・・・さま・・・？」

「カーン・ジュニア、ハマーンの弟ということになっている。ここから先の話には君にも参加してもらおう、いいな？」

ハマーン・カーンと瓜二つの顔がこくりと頷いた。

「えっ?!お・・・弟?!」

キューベルとギユンターは口々に騒ぎ迫水とエヴァは呆気にとられ東條は信じられないといった表情で三白眼になりかけていた。

何も言わずにこちらを睨む彼を前にキューベル達の声は小さくなっていた。そして一同が静かになると、カーン・ジュニアが初めて口を開いた。

「私がヴィルヘルムについて話す」

≠

サイド3、月の裏側に位置し地球から最も遠いコロニー群である。その中の一つに、かつて一年戦争時代にニュータイプの研究機関として名を馳せたフラナガン機関の流れをくむニュータイプ研究所が密かにあった。

エスタンジアは小型輸送艦に白兵部隊とアウター・ガンダムを乗せて、狭いドックへ入港していた。

「これよりサイコミュ搭載新型艦の奪取を始める。第一段階で遂行に支障が出た場合、先行した五番隊がガスを散布し四番隊が後に続く・・・作戦開始」

《こちらカルヴェイン、五番隊、行きます》

「ミゲル所長代理、アクシズからの定期輸送便が入港しました」

「・・・いつもより早いわね」

現在、研究所の所長代理をナナイ・ミゲルという女が勤めていた。彼女は今朝起きてからというものの、ざらついた感覚が頭から離れなかった。俗にいう女の勘、とも違うものだった。

「あの子が帰って来たわ、警護体制を強化して」

「こちらが今回の分です」

「あれ？いつもより早いですね」

「ええ、ちよつと立て込んでましてね」

カルヴェイン率いる五番隊が作業員に成りすまして研究所職員と手続きを行っている中、輸送艦の中でフランチェスカ率いる四番隊が完全武装でスタンバっていた。

「では、物資搬入しますので後はお任せください」

五番隊のブレアが突入の合図を送ろうとしたその時、

「いえ、その必要はありません」

「え？」

「それよりも」職員は懐から銃を突きつけ「あなた方を調べてもよろしいですか？」

いつの間にか輸送艦はドックの4方から警護隊に囲まれていた。

「くそっ・・・散布開始!!」

隊長のカルヴィンの合図により、狭いドック内が白煙に満ちた。

「あのコロニーの時もこうやってたんだな」

「そうだよ、今回は血を流さずに済ませたいね」

タロ、そしてアドルフがアウターのコックピットで出撃を控えていた。

「なあ」

「なに」

「いや、別に・・・」

アドルフはなぜこんなところにいるのだろうか？タロはそう思っていた。「・・・」

「すぐ探ろうとするその癖、やめた方がいいよ」

「あ、ああ・・・」

「ま、一応言つとくと」アドルフは振り返り「“ここ”にいたからだよ、君にはわからないだろうけどね」

その時、五番隊隊長カルヴィンから通信が入った。《少佐：勘付かれています。直ちに・・・四番、隊をつ・・・》

「仕方ない・・・こうなったら強行突破だ、アウター出すよ」

「ま、待てよ・・・今アウターを動かしたら・・・!」

「大丈夫だよ。彼らは生身でガスを使えるんだから」その言葉が意味するところに、タロの中に晴らしどころのない感情が渦巻いた。

満ちた白煙の中に、18メートルの巨人の影が立ち上がった。

「ミゲル所長代理！ドック内にガスが撒かれ警護隊は撤退、さらに貨物艦からモビルスーツが現れたそうです！」ナナイ・ミゲルのもとに報告が入った。

「モビルスーツ？」

「ええ、こちらがその画像です。ガスでよく見えませんが」

渡された端末には撤退間際にとられたドックの様子が映っていた。

「帰ってきたのはあの子だけじゃなかったみたいね・・・できるだけ時間を稼ぐように伝えて」彼女は唇を軽く噛んだ。「この事を所長に報告しないと」

アリエスの総統執務室でキューベル達の頭は、カーン・ジュニアの話が進むにつれ重くなっていた。

「そして、奴は務めていたオーガスタ研究所から自身の研究資料と共に突如行方をくらました。」

新たな偽名でフラナガン機関の流れをくむジオンのニュータイプ研究所で、自身の研究を続けた。そうしているうちに……奴は悪魔のような閃きが……！」

彼はこみ上げてくる吐き気をこらえるように事の始まりを語った。

「強化人間の記憶操作とクローンの技術を用いれば……他人の記憶を植え付けることができるんじゃないか」

その刹那、キューベルの中で今まで不明瞭だった言葉が鮮明になった。

「それが……メモリー、クローン……」ただ啞然と、愕然と、茫然としていた。「なんで、そんなこと……」

「……君たちは、アドルフ・ヒトラーと言う人物を知っているかな？」カーン・ジュニアの代わりにシヤアが口を開いた。

「確か中世期の独裁者でしたね」東條だ。

「そうだ。彼が率いたナチスは第二次世界大戦を起こし、ヒトラーの死をもって敗戦。」

その後解体され、戦後しばらくはその残党が世界各地に逃げ延びていたそうだ」

「なんていうか……ジオンみたいだな」ギンターがぼつりと言った。

「ああ、歴史は繰り返すとはよく言ったものだ。そのナチス残党にはある一つの計画があった」

「……」

「アドルフ・ヒトラー蘇生計画」シヤアのあまりにも突拍子もない発言にキューベルはフツと力が抜けた。

「あの……今はそんな話をしているんじゃない……」こんな時に何を言っているのかと少し馬鹿にされたような気分でもあった。

「もちろんこれは冗談さ。しかし」シヤアはカーン・ジュニアをほん

のわずかに一瞥した。

「彼らの行った非人道的な人体実験が医学を飛躍的に発展させ、軍事技術がコンピューターや宇宙開発の元を築いた科学力を考えればあり得ない話ではない。それに、既にナチスの登場以前から遺体を冷凍保存する技術はあったそうだ」

キューベルが「えっ」と小さく息を吸った。「で、でもそれがどうメモリークローンに」

「わからないか？」

語り部は再びカーン・ジュニアへ移った。

「指導者を生き返らせれば軍隊を動かす脳として、群衆を扇動するプロパガンダとして利用できる」

徐々に混沌と怒りが露わになってゆく彼の姿にキューベルの胸はざわついた。

「強化人間とクローンの技術があれば人工授精も必要ない……脳と身体をいじれば生きてようが死んでようが限りなく本人に近い複製人間を造ることだって出来てしまうんだ!!」

「……ちよ、ちよつと待って、じゃあ……あなた、やっぱり……!」

「ああ……そうだ」カーン・ジュニアはこくりと頷いた。「私はその実験体だ」

「そんな……そんなことって……」

≠

「次のブロックを左」

タロはアドルフにされるがままにアウターを手足としていた。

「そしてまっすぐ、その先にあるはずだ」彼の言うとおりに進んでいると、目的地までのブロックのハッチが次々と閉まり始めていた。

「いそげー!」いちいち防壁を溶解する時間はもうなかった。

バーニアを限界までふかした。ブロックが次々と隔離されていく中、ついに最後のブロックに達した。しかし既に、奥から漏れる光はわずかになっていた。

「さすがにもう無理か……こうなったら!」アウターの左腕に取り付けられたシールドを外し右手に持ち替え、ぶん投げた。

シールドは矢のように飛んでいき防壁の隙間に突き刺さる。しかし、それでもアウターが通るには光が足りなかった。

「ここまで来て下がれるかよおっ！」アウターが衝突する直前、どういわけか隙間が開いた。

「よしー行けるー！」

「いけない！罠だ!!」

アドルフの警告がタロに届いた時には、既にアウターは敵の術中にはまっていた。

奪取目標物であるサイコミュ搭載新型艦があるはずのドックにはドムの最終形態であるドライセンが3機、モビルスーツ用宇宙移動砲台スキウレとガトルが4台づつ、そして海ヘビとビーム・バズを装備した高出力のドラツツエ2機が待ち構えていた。

踵を返そうとすると、シールドの抵抗もむなしく、防壁は完全に閉まっていた。

「やられた……」アドルフが茫然自失していると

グヴオオン

モノアイが一斉に点灯した。

≠

キューベルだけでなくギョンターも、迫水も、さらにはエヴァまでもが言葉を失っている中で

「二つよろしいですか？」一人冷静な東條が口を開いた。「まさかとは思いますがそちらにいらっしやるミネバ様は……」

「ん？ああ、この方は御本人だ。私がお呼びした」

「では、ネオ・ジオンの本拠地をこちらに移す、と言うことでしょうか？」

「彼女はもうジオンとは関係ないので気にしないでいただきたい。それに、ここはジオン再興のための一時的な施設にすぎない」

「……では、いずれまた地球圏へ？」

「ああ、今はハマーンがよくやってくれている」

シャアの青い瞳が深くなった。そして、それを視たのはザビ家の忘れ形見であるミネバのみであった。

大統領執務室からゼーレーヴェ一行が去り、静かになった。

「シャア、いつまで奴を野放しにしておくんだ。彼らにあいつを殺させることだってできるだろう」

「人には適材適所というものがあるからな。それに、ヴィルヘルムが死んだところで何が変わるといっわけでもあるまい」

「あなたは……いつになったら仮面を外すんだ……」

シャアは少しの沈黙の後「タロ・アサティという少年を覚えているか？」と聞いた。

「……当たり前だ」

「彼のような若者が新しい時代をつくらなくてはな」

「木星圏の様子はどうなっている」

シャア・アズナブルがネオ・ジオン総統に就任し、アリエス拠点長であるヒトリーンは水面下で蠢いていた。

「ええ、やはり例の『遺跡』と見て間違いありません」

「そうかあ」ぐひひと下卑笑い「これで我の神聖ジオン帝国が現実のものに……」

独り言をいう醜い後ろ姿をヴィルヘルムは冷めた目で、というより何も感情のない眼で眺めていた。

「ゼーレーヴェ隊の機体性能向上案が出ておりますがいかがいたしますか？」

「ああ？ やっておけ」

「わかりました」

「おおそうだ」ヒトリーンは何かを思い出し獣人のような凶体の割には素早い動きでヴィルヘルムに振り向いた。「なぜミネバ様がこられたのだ？」

「総帥のご意思によるものなので私にはわかりかねます」

「ふむう……今はどちらにいる？」

「ミネバ様なら今は大統領室にいらっしやるかと」

「そうかあ……よし、木星へ立つ準備をしろ」

ヒトリーンの脳内でろくでもない歯車が回り始めているのをよそ

に、ヴィルヘルムの持つ端末には一通の知らせが届いていた。

≠

アウターは降りそそぐ鋼弾、光弾を躲し続けるも、開発用ドックという閉ざされた空間では限界があった。

コックピットに2人いるせいか、うまく動かせないことも原因の一つだった。ガトルの四方包囲射撃に翻弄されていると

「ぐうあつー！」

背面からジャイアント・バズ改の弾が背面に直撃した。そこを見計らったようにスキウレの大型ビームがコックピットに迫るのを全天周モニターが映していた。

「くそおつー！」

両脇にはドラッツエのビームサーベルが待ち構えていた。

「上だー！しまっ・・・」

高度少ない天井へ逃げると一機のドライセンがアウターへ鉄槌を振り下ろした。

アウターが真つ逆さまに堕ちていくその先に、別のドライセンがヒートサーベルを振りかざしていた。タロはビームサーベルを握った。

ピカッ

スキウレのザクから放たれた閃光弾がまばゆい光を放った。

「めくらましなんてえっ!!」

スラストーをわずかに吹かして機体をずらし、アウターはそのままサーベルでドライセンを貫いた。

《《そこまでにしなさい、アドルフ》》女の声と共に、攻撃が止んだ。

《《あなたが欲しかったおもちゃをあげるわ》》

《《なんだって?》》

「好きに使うといいわ、持っていてきなさい」

「い、いいんですか?」

ナナイ・ミゲルはマイクのスイッチを一時的に切った。

「ワインスタイン所長から新型戦艦を譲渡するよう示達があったのよ。戦艦の形をしているだけで戦艦としての機能は期待できないわ。

それに、すでにお払い箱みたいだし」

サイコミュ搭載新型戦艦開発計画は開発途中から分岐し、より戦闘に特化したモビルアーマー、ゾディ・アックがすでに開発されていた。それでも、一度開発した兵器はなんとしてもニュータイプ開発に一役買わせる研究所の意地があった。ナナイは再び外部スピーカーと各機に繋ぐマイクの電源を入れた。

「すぐに出すわ、外に出ていなさい」

タロはアウターをコロニー外へと走らせていた。アドルフは状況が終了したことを知らせていた。

「四番隊各位、五番隊を回収して撤収。どうしたの？」背後で操縦桿を握るタロが震えていた。

「さつきから頭の中で呻き声かしてるんだ……魂が溶ける音を聴いてからずーつとだ……ずつと」その音を聴いたのはアウターがドレイセンにビームサーベルを突き刺した時だった。

「いいんだよ、望んだことなんだから」そういうアドルフの声も、僅かに震えていた。

コロニー外へ抜けると別の港のハッチが開き、グワンバンを基に設計された艦体の船尾から船首にかけて400メートルを超える流線型のフォルムがズズズズズと姿を現した。

宇宙の闇に浮かぶ漆黒の姿は、暗黒星雲を思わせた。

《アウターと直結することで性能を十分に引き出せるわ》という言葉を残し、ナナイは通信を切った。

「だから取りにきたんだよ」

≠

ゼーレーヴェ隊のモビルスーツはどれも試作段階のもので、地球圏では少し型落ち機体となってしまうている。

ドックではそれぞれのモビルスーツを基に木星圏で想定される戦闘を考慮した新機体の開発プランが実行に移されていた。

迫水とエヴァのガ・ゾウムはガザ系モビルスーツの発展系である。ネオ・ジオンの主力機として量産され戦場に投入されているが元より新たなガザタイプの開発計画が二つあり、それを実行に移している。

機体名はガザX、ガザY

東條の乗るベルドルフは『ガンダムMk-Ⅴ』のデータを基に開発された機体であり、その別系統の発展機にドーベン・ウルフという機体がある。ネオ・ジオンではこちらが正式採用され、当機は完全にバニシングマシンとなってしまうている。この機体の新開発プランは分岐の再統合である。機体名はヴェルデ・エア

R・ジャジャ、ネオ・ジオンで正式採用されており先行試作型であるギョントター機よりも性能が向上している。しかしやはり白兵戦特化機体であり、乗り手を選ぶモビルスーツである。一年戦争時代、ゲルググに開発競争で敗れたギヤンの正統発展後継機ともいえる機体であり、この機体の新開発プランはギヤン最終型である。機体名はガルヴァドス

「お前これ改修ってレベルじゃないだろ・・・」

ギョントターの目には自身のモビルスーツが跡形もなくパーツレベルで分解されている光景があった。

「いやあすごいですよ！ここに来てよかった！」

当然のごとくゼーレーヴエ艦にもメカニックがいるわけで、彼らもアリエスの技術班に加わってモビルスーツの大幅な改修を行っていた。

「完成したらテストしないとな」

「ああ・・・そうだな」

キューベルたちはファナとパトリシアの捜索中にメカニック班にとつつかまっていた。

機体スペックについて熱弁をふるうメカニックのシユペーアにノれずにいると、「あーいた！」タイミングよくパトリシアの声が響き渡った。彼女の後にはファナもいた。

「ねえ、私はどうすればいいの？」

第一声とはうってかわって温度の下がった声がキューベルに向けられた。

ところがキューベルはパトリシアをギュッと抱きしめ

「絶対に私たちから離れないで、いい？」今にもこぼれそうな涙を浮

かべる目とは裏腹に決意の色を宿していた。

「・・・わかった」

キューベルの思いを受け取ったパトリシアの声は穏やかだった。

「ねえ」

居住ブロックに戻るなかで、キューベルがファナに尋ねた。

「ずっとわからなかったんだけど・・・なんできたの？」

「え？」

「悪いとかそういうことを言ってるんじゃないかって・・・なんていうか、ニュータイプだからっていうのがわからなくなつて・・・」

「ああ、それは」ファナは澄んだ瞳でキューベルを見た。「そうすればお兄ちゃんにもう一回だけ会えるって思ってたんです」

「・・・お兄ちゃん」

「はい、それだけです」

≠

それから、数週間が経ったある日のこと

「なに！ミネバが!？」

「私がお世話をしていたのですが今朝お部屋に伺ったら・・・」

ミネバ・ラオ・ザビの部屋はもぬけの殻になっており、行方知れずとなつてしまつていた。うつつを抜かしていたわけではないシヤアだったが、自分の甘さを呪つた。

ミネバの世話係のジュリアがしどろもどろしている横で、シヤアは手掛かりを探っていた。

彼女が誘拐されたとすればその心当たりはただ一人、昨日から今朝にかけて木星圏へ一足早く発つたヨドルフ・ヒトーリンだった。

シヤアは「君のせいではない」とジュリアの肩に手を当て、もう一人の重要参考人のもとへ走った。「ちいっ、こゝも仇になるとは」

ヴィルヘルムに注意を向けていたばかりに、ヒトーリンがそのような行動を起こす事を考えていなかった。

その男を見つけると出会い頭に胸ぐらを掴んだ。「ミネバをどこへやった！」

「私は存じ上げませんが。」ヴィルヘルムは表情筋一つ変えずに答え

た。彼に心臓があるのだろうかとすら疑う反応だった。

「そんな事はわかってている…！ヒトリーンは?!」

「ヒトリーン司令なら6時間前に木星へ発たれましたが。」

「ツ……ええい！」

シヤアは掴んでいた胸ぐらを突き離し大統領執務室へ駆けて行った。その様子を見送るとヴィルヘルムは部下へ次のようなことを伝えた。

「フアナ・コ・アサティを呼び出してください。ニュータイプのテストをします。」

「行くのか…シヤア」

「ああ、奴を野放しにはできん。準備が整い次第木星へ発つ」

「そうか……」

大統領執務室で、シヤアの離別とも取れる言葉にカーン・ジュニアは目を伏せた。

彼とはもう二度と会うこともない、そう感じていた。

「ここは、お前の好きにするといい」

「……はい」

≠

エスタンジアという勢力下にいるものの、再び火星圏へ向かう中でマイクロ・アーガマ隊には安息の時間が訪れていた。

地球圏を脱してしてから面倒を起こしても、どちらにも利益はなかった。それに面倒を起こす気力もない。

そんな環境の中、与えられた部屋でクシナが休んでいると

「……タロ」

「おれ、どうしたらいいんだろう」

「……いいよ、来て」

宙の冷気が伝わる部屋で、タロは愛の肉体に包まれた。

≠

「カーン、ジュニア様…もうよいのですか?」

シヤアはアリエスの勢力の1/3を引き連れ木星へ旅立っていた。それからカーン・ジュニアはしばらく塞ぎ込み、自室から大統領執務

室に、ウイノナの前に姿を現した彼は幾分か痩せていた。

「ああ……なんとか整理がついた」彼は総統机からナイフを取出し、手にしていた。「ウイノナ、今まで世話になった」

「カーンジュニア様?!」

彼はそのナイフで、自身の後ろ髪をバツサリと切り落とした。

「カーン・ジュニアじゃない……ブラッド・ワインスタインだ」

≠

アリエス全域に、敵勢力の接近を告げる警告がワインスタインより発せられた。

「所属不明勢力がわが軍の新型戦艦を奪いこちらに向かっていて、配置につき迎撃態勢をとれ」

第11話 アベニールをさがして

『ねえ…どこ行くの』

お兄ちゃんがきてるの

『行っちゃだめ!』

どうして?..

『そっちにいったら…あなたは…』

いいの、せつかくここまで来たんだから

『まって…まって…!!』「行っちゃダメえっ!!」

パトリシアが目を覚ますと、そこにファナの姿はなく

『…行っちゃった——』彼女の目からは涙が流れていた。

機械仕掛けの暗室で、ヴィルヘルムは眼下に広がる対伝説巨神用決戦兵器の開発ドックを見下ろしていた。

モビルアーマー、もはや超巨大モビルスーツと言ってもいい機械の塊には、防弾チョッキのようにサイコファイバーが織り込まれた装甲が着々と取り付けられていた。

「スパイラル・コードは全てエラー…わかりました。ではこちらは破棄しましょう。」

宇宙世紀〇〇八八、十二月二十四日

アリエス全域に敵勢力の接近を告げる警報が発せられた。

《所属不明勢力がわが軍の新型戦艦を奪いこちらに向かっている。配置につき迎撃態勢をとれ!》

居住ブロックから軍事ブロックに向かう途中、キューベルは聞き覚えのある声に足を止めた。

「この声…ハマーン様の…!」

シヤアが木星へ発ってからヒトローリンもすでにいないアリエスで、総統の地位に着く人間といえれば彼かもう一人

「てつきりヴィルヘルムが指揮を執るかと思ったがな」

「ただの操り人形かもしれねえぜ」

「それはないわ！だって彼は…」

「すでに脳をいじられてるんだろ？いつあいつの手に堕ちたつて」

「と、とにかく行きましょ…というか」キューベルの脳裏にフアナとパトリシアの姿がよぎった。「あの二人どこに行ったのかしら」

「え？知らないんですか？」

「今朝二人の部屋に行っただけど…誰もいなかったの」

≠

「第一陣は先行して不明勢力を待ち伏せ、第二陣は一陣の後に続きゼーレーヴエ隊とR・P・D部隊はいつでも出撃できるよう配置しておけ！ハチカは命令があるまで待機！」

ブラッド・ワインスタインは、今もなおカーン・ジュニアとして総司令の地位に着いていた。

《やあ、中々うまくやっているじゃないか。》

唐突に、温度の感じられない声が鼓膜をついた。《失敗作だと思っていたが、ハマーン・カーンの記憶は君にいい副作用をもたらしたようだ。》

「…ええ」

《もう少しだけ、持ち場を頼むよ。テスカトリポカの最終調整がまだかかるからね。》

「…わかりました、兄さん」

アリエスから、十機のグラウンド・ザックを筆頭に第一陣が迎撃へ向かった。

≠

スクリーンに赤い星が映し出されるほどまでに、エスタンジアは目的地に差し掛かっていた。

マイクロ・アーガマ、今ではエスタンジアの所有物であるこの艦に少しの間、あるべき姿が戻っていた。艦長であるジョブ・ジョン、オペレーターのおスカとマーカーを始めとするマイクロ・アーガマ艦乗組員の姿があった。

「これより作戦が始まる。流れに乗って来てしまった我々に、意味のある戦いではない」

だからどうか生き延びてほしい

再びこの場に集まることを誓って……マイクロ・アーガマ隊、解散！」

ジョブ・ジョンの声が行きわたる空間には、彼の言葉を外部へと流す機具が仕掛けられていた。アドルフはただ一人、艦隊のしんがりを務めるサイコミュ搭載新型戦艦ケツアルコアトルの中で、奥歯を食いしばった。

全方位ダイヤ型に展開した艦隊の隊列の中心をバレンドラ艦が務め、アドルフの腹心であるハインリヒが艦長の座に就いて指揮を執っていた。

《熱源接近、機影は……》宇宙塵も捉えているレーダーに前方から来る五つの機影が目立つ。

「ミノフスキーの影響が始めている、慎重に行け」

マイクロ・アーガマ艦はバレンドラ艦とケツアルコアトルの間に位置し、乗組員たちは再びバレンドラに捕らえられていた。

先鋒艦マゼラン改級タカナミ（エスタンジア特別仕様）から二機のザクフリツパーと五機のネモ強襲型が出撃

「こ、これは……うわあっ！」

赤い星を目前にした真空の闇に、青い閃光が迸る。《海蛇です！ウミヘビが張り巡らされています!!》

宇宙ゴミに混じって設置されたワイヤーから広がるプラズマが合図となり、艦隊前列を囲むように起動した敵機の集中砲火が始まった。

「既に瓦礫に混じっていたか……第二陣、出撃！」

第二警戒隊とムサイ改級のクロシオ、オヤシオなどの駆逐隊からジムⅢ、マラサイ改から編成された二十機、ガンキャノン・ディテクター、ザクⅢから編成された十五機が出撃した。

≠

アリエス第二陣に出撃命令が下り、五隻のムサイ改級から頭部と下腹部から長い角のようなものが生えた三日月のようなシルエットの

キタラが五機、両肩のシールドにより丸みを帯びたシルエットのヌバフオック、二十五機が蜂の巣をつついたようにズワァッと展開した。

≠

エスタンジア艦隊を取り囲むように姿を現したグラランド・ザックに対し、キヤタピラの代わりに巨大なバーニアとメガ粒子キャノンを装備した高機動宇宙戦特化型ガンタンク十機で編成された砲撃隊が円状に展開していた。

そして、艦隊前方では

「何だあの機体は……」

ジムⅢの全天周モニターが、海蛇から逃れたネモ強襲型が敵新型モビルスーツ、キタラの展開したビームの刃に溶断される様を映す。

三日月に手足が生えたようなモビルスーツは、自らの前面に展開したビームの刃により半月型になっていた。そして手足を折りたたむと、狙いをこちらに切り替え弾丸の如く迫ってきた！

「クソッ」ビームライフルを放つも、キタラは機体を回転させビームの刃で粒子の弾を弾いた。「そっちが刃物で来るなら……！」

ジムⅢはビームサーベルを構え、弧を描くようにキタラの側面へ迫る。しかし

「なっ!?」別のモビルスーツがモニターの下からぬるつと現れ「……ガスマスク」

彼はヌバフオックのビームダガーに焼かれた。

丸いヘルメットにゴーグル状のデュアルアイと円形ラジエーターのついた頭部はガスマスクを思わせた。

ずんぐりとした黒いボディにビーム・マシンガンやショットライフルを構えたその姿は、もはや生身の人間が重武装しているだけのように見える。しかし、18メートルの巨体をみれば、やはりモビルスーツなのだ。

ジムⅢとマラサイ改はキタラとヌバフオックの猛威の前に次々と倒れていった。

「後衛迎撃隊出撃、ジムⅢ、マラサイ改は艦隊周辺の処理に迎え。砲撃隊とガンキャノン、ザクⅢは前方に集中、マイクロ・アーガマ隊を

前衛に出撃させる」

バレンドラのカタパルトデッキで、出撃の時を迎えたマイクロ・アーガマ隊をオリガが送り出していった。

《ジム・セークヴァアはほかの機体のパーツを流用してなんとか改修しといたわ》

「お、サンキュー。んじゃあ二ロン・アラダール、ジム・セークヴァア、行ってきます」

「じゃあ、行ってくる」《まって、傷はどう?》「痛みならもうとつくに引いちまったよ」《・・・気をつけてね》「ああ、グラン・マツクイーン、出る!」

バレンドラから二機のジム・セークヴァアが戦域へと向かっていった。

《Z Mk-IIは可能な限り改造して機体の性能をあげておいたからやれると思う。》

・・・タロのこと頼んだよ》

「うん・・・ありがとう」

クシナ・カーデンロイド:「行きます!」

ZガンダムMk-IIフルブーストが真空の闇へ飛び立った。

《アウターは下手にいじれなかったからコックピットのカバーだけ変えといた》

オリガの言葉にタロは思わずこけそうになった。「は、はあ...そうすか」

《血いついてたシートのままだったのも気分悪いだろ?》

「わざわざ言わなくなったって・・・気分悪くなってきた」

《・・・あんださあ》「はい?」《抱かれたろ?》

「

はあ?!なんですか急に!」

《抱いたのか?》

「いや...それはあ・・・」

《今のアンド、なんか軽くてさあ・・・まあいいや》息を吐くノイ

ズがした。

「そんなこと・・・あるわけないじゃないですか」

《とにかく死ぬんじゃないよ》《がんばってください！》《オリガの奥からファイアの声が聞こえた。

「・・・はい！タロ・アサティ、アウター・ガンダム行きます!!」
タロ・アサティとしての、最後の戦いが始まった。

≠

アリエス総合指令室にはレヴァハン・M・ヴィルヘルムが入室していた。

「アウターガンダムは出てきたか？」

何故その名が今出るのか、ヴィルヘルムがアリエス全域に影を落とすしてゆく。

「いや、アウターがいるかは・・・」

「なら餌を撒こう。イルダーマを出撃させなさい。」「餌・・・？」
「そろそろデータを取ろう。」

「・・・わかりました。全艦発進」

ブラッドの命でアリエスの全残存艦隊が発進し、やがてイルダーマが五十機解き放たれた。

グラウンド・ザックをベースに開発されたものの、そのフォルムはガンダムタイプであった。変わったところと言えぱリユース・サイコ・デバイス搭載機体であることと、眼が単一ということである。その中の一部に手と脚からだけでなく、脳からの電気信号も直接読み取って動かす特殊仕様の赤い機体もあった。

「ハチカMk-IIの出撃準備を指せておきなさい。テスカトリポカの準備ができ次第ともに出撃させます。」ヴィルヘルムが総合指令室からそう指示を送ると

「これでニューロタイプ、ステロタイプへの革新が始まる」

彼の無機質な目が躍動していた。

彼にとってこの戦場はあくまでもニュータイプの実験場でしかないのだ。それでもブラッド・ウィンスタインは、まだ逆らわなかった。ゼーレーヴエ艦が戦闘宙域に差し掛かかり、キューベルが声をあげ

た。

「前方で戦闘を確認したわ、全機発進して！」

《《迫水新一、ガザY、出撃》》

《《エヴァ・アルバトロス、ガザX・・・出る》》

《《ギョントー！ガルヴァドス！行きますッ》》

《《東條、ヴェルデ・エア、行くぞ》》

ゼーレーヴェ艦からモビルスーツが発進し、先行する迫水のガザX、エヴァのガザYの後方で、ギョントーの駆る漆黒の機体、ガルヴァドスがランスカクタスの柄を握った。

再び、ゼーレーヴェ隊にアウターと邂逅の時が訪れた。

≠

「このおっ！」

出力を上げバーニアの数を増やしより高機動となったZ MkⅡの機体はニュータイプではない彼女の異常な集中力を十二分に補っていた。キタラの襲撃を直前でかわし、側面からビームサーベルを刺すほどまでに。

「ビーム・コンフューズ!!」

クシナはヌバフオックが数機固まっているところにビームサーベルを投げて狙い撃ち、粒子の拡散で彼らが怯んだ隙を突き急接近し、着実に撃破していった。

ニロンとグランの駆るジム・セークヴァリアは、ロングレンジプラズマライフルで防衛ラインに迫る敵機体を迎撃していた。

「数が多いなあくそつたれが！」

その時、背後から強烈な光が瞬いた。「なんだ!?!」

即座にその方を確認すると先鋒艦マゼラン改級タカナミが二つの粒子に貫かれていた。さらに第二射がダイヤ状に展開した艦隊の外側を削り取ってゆく。一機はモビルアーマー形態としてX状になり腹部から、もう一機は閉じた脚部を一つの砲塔とし、メガ粒子を発射していた。

《《上方十時と二時の方向に敵機あり！迎撃に迎え!!》》

G・ザック群を片付けた高機動宇宙戦特化型ガンタンクが下半身の

バーニアを噴かし、二手に分かれ両ガザタイプに向かっていき、二ロ
ンとグランも二手に分かれ後に続いた。

マラサイ改のパイロット、ドミンゴは目の前の戦争をただ眺めてい
た。《おい、何ボサツとしてんだ》

接触回線がザクⅢのパイロットより繋がった。

「いや、俺たち何をやってんのかなって・・・なんの意味があつてこん
な・・・」

《：んなもん終わんなきゃわかんねえよ、今は目の前に集中しろ》
「・・・なあ、一つ聞いていいか？」

《あ？》

「この戦いが終わったらどうするんだ？」

《まあ・・・とりあえず郷に帰って：》

ザツというノイズを最後に声が消え、通信が途絶えた。

「・・・え？」

ドミンゴがその方を見ると、ザクⅢのコックピットをランスが貫い
ており、漆黒の影の中から妖しく光るモノアイがこちらを見ていた。

ランスの尖鋭な切っ先から流れるように太くなった剣身から、無数
のビームの針がサボテンの様に突き出し、ザクⅢはパイロットの亡骸
と共に無に還った。爆ぜるその姿はまるで、サボテンが花をつけてい
るようだった。

「う・・・うううあああああ!!!」

絶叫と咆哮が入り混じった弾を乱射するも、漆黒の騎士はふわりと
避け、ランスの無数の針でマラサイ改をドミンゴごと溶かした。

さらに2機のザクⅢを鮮やかに葬ると、漆黒の騎士ガルヴァドスは
ガンキャノン・ディテクターの展開する防衛ラインに向かつていつ
た。

そんな中で、タロのニュータイプとしての感覚は、これまでにない
ほど研ぎ澄まされていた。リボーコロニー空域でエスタンジアと衝
突した時のような、アウターの持つサイコファイバーの力に呑み込ま
れていくというよりは、溶け合い、同化してゆくような感覚だった。

肉体としての意識が、神経が、アウターガンダムを動かす器として鮮明に澄みわたってゆく。

それは、敵機を鮮やかに葬ると共に、死の一瞬の苦しみと魂が溶けてゆく感覚を刻み付けられる代償を払うことでもあった。

ニロンは、ガザXの機動力に翻弄されていた。ジム・セークヴァリアもそれほど劣っているわけではないが、主武装であるロングレンジプラズマライフルで戦うには距離が近すぎる、かといって遠くから狙えば優に躲されるだろう。メガ粒子を一発の弾としても発射できるガザXは遠距離だろうと近接距離だろうと関係がない。

そんな相手への有効な一手を模索している間にも、高機動宇宙戦特化型ガンタンクが撃破されていた。

「……ま、これしかねえか」

ニロンはメガ粒子砲の真正面で、ライフルを構えた。

既に十三隻、エスタンジア艦の約半数が骸と化した。アリエスのモビルスーツ群の三日月とガスマスク歩兵のシルエットは気が付けば、モノアイの白いモビルスーツに塗り替わっていた。

「なんなの……これ……」

クシナはそのガンダムタイプの群れから黒い血が滲み出ているような錯覚を覚えた。ビームライフルを放ちながら、絡みつくツタを引きちぎる様の中へ飛び込もうと脚を踏み込んだ時、行く手をアウターの背が塞いだ。

「タロ……?」

彼は何も言わずにイルダーマの群れへと向かっていった。そして、光が広がっていった。

光の中を、タロが歩いていた。彼の声がクシナの中に響いた。

『きみは……未来へ……!』

我に返ると、変わらぬ戦場があり、アウターが単身でイルダーマ群へ向かっていた。

「あしたへ、って……」彼女は思わずおなかに手を当てていた。

Z Mk—IIの元に、ガザXが近づいていた。

ガンキヤノン・デイテクターとザクIIIの計六機が一斉にビームキヤノンを構えた。「撃てえ!!!」

ガルヴアドスに弾群が向かうも、ひらりひらりと黒い体を蝶のように翻し、光弾は彼方へと消えていった。

《どこ狙ってんだア!》ガルヴアドスの殺人的な加速が虚をつき、ガンキヤノン・デイテクターを貫いた。

《さあ次は・・・ん?》

パイロットの執念が、体を貫通しているランスをがっしりと掴み、肩の砲塔をガルヴアドスに向ける。

《逃が…す…かよ》

《!!!コノヤロツ・・・》

ランスの無数のビームニードルが出てコックピットを焼くと同時に、砲塔から射出た一発の光弾がガルヴアドスをかすめていった。

タロは、まるで時が止まったような、冷たい深海を泳いでいるような感覚の中にいた。

アウターを動かす器となり果てた彼は、ただぼんやりと、自らが敵機体を葬る光景を眺めていた。

『ああ・・・命が溶けてゆく』

宇宙に混じる人の思念をごく当たり前に感知しつつも、もはや干渉することはしない。

一瞬の苦しみを受け続けているうちに、いつからか自らを透明な殻で閉ざしていた。

ニューロタイプ、それが彼のニュータイプを超えた一つの形だった。

タロ・・・!

自閉した意識の中で鮮明な声が聞こえ、刻まれた声の方を見るとZ Mk—IIがガザXの四肢に捉えられていた。

彼女を背後から掴むガザXが今にも粒子で焼こうとしている、迂回

している時間はない。

タロは空虚な意識の中でアウターに逆らい、彼女の下へと向かった。

ドオオンツ

ガザXに後方からの流れ弾が命中し、機体が揺らめく。それは、ガンキャノン・デテクターが死の間際に放った物だった。

その隙が死角となり、ガザXは切り裂かれ、タロはクシナを手元に引き寄せた。

ガザXの機体が崩壊していく中で、エヴァの安らぎに満ちた顔をタロは見た。そしてそれは青い蝶となり、飛んでいった。

『そうか……ケンの面倒、見てくれてたんだな……』

「エヴァが……死んだ」

ゼーレーヴエ隊に、衝撃と共に喪失感が走った。そのショックが一番大きかったのは、迫水だった。

「くっそおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

ガザYは目の前のジム・セークヴァリアに、ビームサーベルを叩きつけた。

≠

モビルスーツが、生身の四肢と直結しパイロットの手足の代わりとなれば、その性能は著しく上昇し本来の機能性をほしのままにできる。

そしてイルダーマの場合、一年戦争時のリユース・サイコ・デバイス実験と違い機体にサイコファイバーが使われている。故に、イルダーマは数を減らせども厄介な機体だった。

その様子を、アリエス総合司令室から実験台のように見つめる目があつた。

「やはりイルダーマの動きにばらつきがあるようだ。」

「下がらせますか?」

「身体能力の差だ、その必要はない。それにリユース・サイコ・デバイスによるパイロットの肉体反応がニュータイプに何かしらの影響

を及ぼしているはずだ。」

ブラッド・ワインスタインはヴィルヘルムへの視線を背に受けながら緩やかに反旗を、半旗を掲げる。

「……あなたは…なにをしたいのですか？私をこんな体にし…人を、こんな人体実験をしてまで……」

「こんな実験？」

「なぜ…今になってリユース・サイコ・デバイスなんてものを……」

「サイコファイバーを直結させたことによる生体への反応、影響を」「そういうことを言ってるんじゃない!!」

ブラッドの激昂を手のひらで遮ると彼は続けた。「……なぜカピラバストウコロニーの人間を使つたと思う？」

そんなことわかつてたまるか、という視線を送るもヴィルヘルムには届かない。

「スペースコロニーの役目は人の生活を守ることが大前提だ。人が手入れて初めてその環境を保つことが出来る。しかしそれがなくなつたコロニーはどうだろう？」

ヴィルヘルムはブラッドの目をやつと直視し

「長いこと放置されれば機能は次第に衰える。ましてやカピラバストウコロニーは最初期に作られたものだ。」

次第に彼の言わんとすることを悟り、ブラッドの瞳孔が開く。

「今でも宇宙放射線を完全に防いでいれば何も問題はないがね。」

ブラッドはただ立ちすくむことしかできないでいた。たとえ微量だとしても、長い間それを浴び続ければ……

「未来のない者達を私なりに供養したにすぎないんだよ。人の革新の萌芽のためにね。」

エスタンジア艦隊の殿に、暗黒星雲を思い出させる400m超の荘厳なフォルムが宙に鎮座している。タロはイルダーマを一掃するためにアウターを、サイコミュ搭載艦ケツアルコアトルへとドッキングさせていた。

「アドルフ、舵はまかせた」

《わかった……エスタンジア全艦隊に告ぐ！これより、敵機の一掃のため我が艦の主砲を解き放つ、巻き込まれなくては道を開けろ!!》

「そしてお前自身について、現段階においてのメモリークローンの実験についてはこれを見るといい」ヴィルヘルムから受け取った冊子には『ZEON CONTINUE OPERATION』と書かれていた。

「やつぱり……アンタは……!」

戦場に眼を焼くほどの一筋の閃光、一瞬の静寂、爆炎

「なんだ?!」

「おお……ケツアルコアトルの反陽子収束が上手くいったようだな。」ヴィルヘルムは一瞬瞳を輝かせるとすぐに無表情に戻り「ではこちらも白いテスカトリポカを出そう。」と言い残し総合指令室を後にした。

「……ウイノナ、しばらくここを頼む」

ブラッドは彼女に通信機を渡し、ヴィルヘルムを追った。

≠

エヴァが散った。

戦場から見れば主力モビルスーツの一機が撃破されたにすぎない。

ゼーレーヴェ隊にとってもまた、ただ漠然と『何かが消えてしまった』という印象でしかない。

人の死の直後というのは得てしてそういう物で、あとになって初めて実感が沸きあがるものである。それが戦争であれば、まず哀しさより先に怒りがわき、その矛先は仇である相手へ向けられる。悲哀に浸っている余裕はないのだ。

彼女の死を一番近くではっきりと見届けたのはギョンターだった。自信を掠めていったガンキャノン・ディテクターの放った死に弾の弾道を追った視線の先で、エヴァの乗るガザXが白い悪魔に切り裂かれ、爆ぜた。

「……エヴァ?」

しばらく茫然としていた。人の死を頭でわかって、すぐに心で受

け入れられる者はいないだろう。そしてそれが親しい中であればあるほど、時間はかかる。

「あいつが…やったのか…ガンダムが…」

気が付けば、エヴァを殺した白い悪魔が彼の目の前に迫ってきていた。「てめえが…」

ギンターはランスカクタスの出力を最大限にして矢のごとく、大胆に真正面からアウター・ガンダムへと向かった。

「てめえがああああああ!!!」

彼の慟哭は空振りに終わった。!!!

アウターはガルヴァドスに指一本触れることなくエスタンジア艦隊の中を突っ切っていった。

「刺し違うことすら…できないのかあつ…!!」

怒りよりも哀しみよりも、彼は悔しかった。どんなに優れた機体に乗ろうと、望みが叶えられるわけではない。星が輝く時を映した全天周モニターを叩き割りたい衝動に駆られつつもその拳は、自分の頬を殴った。

我に返ると、エスタンジアの艦隊と連邦、ジオン機入り乱れたモビルスーツ隊が道を開け、その中を光が飲み込まれる程の黒い巨大な物体がゆっくりと前線へ赴いていた。

グワダン級大型戦艦というよりは一年戦争時のモビルアーマー、エルメスを彷彿させるフォルムだ。

やがて進行が止まると、艦首が大きく花のようにゆっくりと開き、5つの花卉の中心に眩い光輪が瞬いた。

パウツ

目を焼くほどの閃光が輝いて、モビルスーツを、人を、魂を無へと還した。

振り返ると、戦鬪域を埋め尽くしていた白い機体が半数に減っていた。

「ベル…」

ギンターはガルヴァドスの俊敏性に助けられ、後方にいるゼーレーヴェ艦へと向かった。

敵機体の半数を葬り、ケツアルコアトルはすぐに第二射の装填を開始していた。しかし 宇宙に漂う反陽子を集め、レーザーとして完全に照射させるには二十分の時間を必要とした。

「くそつ、失敗した!」

その間にも残ったイルダーマ共がこちらへ総攻撃を仕掛けてくる。敵勢力を殲滅できなかったのはエネルギーの充填が不十分だった上に、十分な照射範囲がとれなかったと考えたアドルフはケツアルコアトルをゆつくりと敵勢力の中へと進めた。

「他に何か武器は・・・タロ!」

《・・・》

タロからの返答はない。しかし無言の代わりにアウターからの信号が送られると、ケツアルコアトルの滑らかな表皮が割れ、中から20枚の巨大な円盤が射出された。

それはもはや無人モビルアーマーと言ってもいいほどだが、これこそがこのケツアルコアトル、アウターガンダムにとつてのニュータイプ専用兵器ファンネルだった。

ビーム射出装置である通常のファンネルとは違い、こちらはビームの刃を回転させて攻撃する対戦闘用兵器である。残っているイルダーマ達は、次々とその光輪に八つ裂きにされていった。

切り裂かれたイルダーマの痛みがタロを再び襲った。

≠

ガルヴァドスが引き返すと、反陽子収束砲により塵芥となった艦の残骸が漂う中に、右舷をやられたゼーレーヴエ艦の姿があった。

「ベル!大丈夫か!」

《え、ええ:なんとかね・・・でも、もうこの艦は・・・》

「ノーマルスーツは?!」

《一応着ているわ》

「全員?」

《さ、さあ・・・》

「とにかく生き残っている奴はノーマルスーツを着て左舷のハッチ

まで急いで！いつ二射目がくるか」

《お前、ここでなにやっている》

ガルヴァドスに、ヴェルデ・エア、隊長である東條からの接触回線が繋がった。

「い、いや・・・艦がやられたと思って・・・」

《お前は前線に戻れ！》

「いやです!!」

《・・・なんだって?》

「艦長を・・・ベルを死なせるわけには行きません！安全圏まで誘導してから前線に戻ります!」

東條は、接触回線の切れたコックピットの中で「幸せな奴だな」と呟いた。

≠

ヴィルヘルムの後を追っていたブラッドは、気が付くと暗い機械まみれの部屋、ヴィルヘルムの研究室へ辿り着いていた。

その中で彼は、コンピュータの画面から振り向くこともなく「指揮はいいのか？」と声だけやった。

「しばらくは放っておいてもよさそうなんだな」

「そうかい。」

「最終調整とやらはもういいのか?」

「ああ、そっちはもう終わっているよ。」

「なら」何をしているんだ、と尋ねかけたとき

「キミの思う理想的なシヤア・アズナブルを聞かせてくれないか?」
というヴィルヘルムの唐突な問いに、ブラッドは言葉が飛んだ。

「少し違ったかな。」彼はおもむろに振り返り「ハマーン・カーンの記憶からではなく一般的な、大衆を率いるための理想的なシヤア・アズナブル像を聞きたい。」

「何を・・・言っているんだ・・・?」

「シヤアという男は指導者としては素晴らしいが人間的に大きな欠陥がある。一見至極冷静な人格の内にあるとても人間的な感情、それが今回の様にミネバの後を追ってわざわざ木星まで行く勝手な行動

につながる。」

「……それで？」

「自分を見なさい。女であればまだしも男であるお前が記憶によってシヤアに」

「うるさい」

「彼が木星へ行つてからおまえは自暴自棄になった。これでは何のためのメモリークローンかわかったものじゃない。」

「ひ……人を勝手にしておいて……！」彼の無意識の悪意がブラッドを辱める。

「メモリークローンは素体と僅かな記憶のゲノムさえあればいい。後はこちらで人格をプログラミングすれば感情に左右されない指導者が出来る。」

「人格を……プログラミング……」

「思考を電気信号に変換できるならその逆もできるはず、私はそう考えた。」

そして僅かな記憶を用いてゼロから作る手間を省き、第三者などから対象のパーソナリティ情報を集めこちらで取捨選択して設定する。そして理想的な一人の人間をつくる。」

「そんなものはすでに人間じゃない！人の形をしたエゴの器だ！」

「それがジオン・コンティニュー・オペレーションだ。」

「……兄さんの目的はなに？」

沸々と血を滾らせるブラッドの右手が腰へと伸びたとき

《リモーネ・パトリシア・プルツカ、ハチカMk-II、出撃します》

アリエスのハッチからパトリシアの乗った巨大モビルスーツが出撃した。

「今出撃した彼女も我々の実験に協力してくれた人だ。きっと今頃は彼女のクローンが地球圏で戦場に出ているだろうね。」

「ツ……貴様……！」

《ワインスタイン卿、サイコガンダム・テスカトリポカを出撃させますがよろしいですか？》

もはや彼はヴィルヘルムという偽名ではなく、本名であるステイブ
ン・ワインスタインを名乗っていた。

「彼女と回線を。」《わかりました》

少しして、回線は彼の部下からサイコガンダムのパイロットへと繋
がり、彼は温度のない声から猫撫で声をつくった。

「気分はどうだい？」

《・・・はい》

「がんばれそうかな？」

《はい》

「いい子だ。君のやりたいことをやってきなさい。」

《はい》

二人の兄弟が対峙する研究室が揺れた。ブラッドが奥の窓から見
下ろすと、超巨大モビルスーツがゆっくりとハッチの外へ流れ出て
いった。彼はその中に一人の少女の姿を見、同時にタロ・アサティの
影を見た。

「おまえ・・・なんてことを・・・!!!」

ケツアルコアトルの主砲により、残イルダーマ群の半数が塵となっ
た。それでもまだ、二十機程が空域を彷徨っていた。

反陽子収束砲に応えるように、アリエスの一角から40m程の菅笠
を被ったような女性的なフォルムの巨大モビルスーツが、巨軀に見合
うライフルを両手に現れた。

かと思えば、その背後で、

100mを超える規格外の白い巨人が目覚め、空域にいる誰もが目
を奪われ、恐怖した。

「なんだ・・・あれは・・・」

対伝説巨神用最終決戦兵器サイコガンダム・テスカトリポカがつい
に起動した。

日付が変わり、12月25日になった。

最終話 光く space Lightsく

ニュータイプとサイココミュ・システムについての簡易考察

第六感と空間認識能力を進化させた次世代型の人種といえればそれまでである。しかしニュータイプは今や戦争という場においてその能力を発揮しており、これでは『より殺し合いに特化した』人間ではない。これで進化した次世代型の種族と言えるだろうか？

本来備わっているはずの能力を文明と引き換えに削っていったヒトとしての種全体から見れば、次世代どころか原始的、とても動物的であるといえる。

では、これを踏まえた上でどうすれば進化と言えるか？ニュータイプの存在意義とは何か？

そこで私はニュータイプをこう定義づけることにした。

『文明を正しく使うことのできる人間』

中世期の大战で開発された数々の兵器は今や我々の生活の基盤となっている。ミサイルからロケット、弾道計算機や暗号解読機からコンピュータへの変遷を見れば、人の叡智が生み出したモノで人類の新たな道を切り開くその所業はニュータイプと言えるだろう。

さて、俗に『ニュータイプ』と呼ばれる人種があらわれた今、何がその役割を担うか？

それは彼らの専用兵器として開発されたサイココミュ・システムこそが、人類の新たな叡智、あるいはその魁なのではないか？

以上のことを踏まえ、フラナガン・ロムの遺伝子を受け継ぐ私としてはこう提唱したい。

ニュータイプは進化の途上であり、サイコ・フレームはヒトの新たな段階の可能性である

Steven Weinstein

≠

白亜の輝きを放つその巨神の如き姿は、戦域にいる者たちの目に幻のように映っていた。

《十六番隊から三十番隊は味方機に注意しながら手前のモビル

アーマーを、零番隊から十五番隊は巨大モビルアーマーに向かえ！どころにもIフィールドバリアを張っている可能性が高い、なるべく実弾を使い！」

ハインリヒの命により残存艦から全モビルスーツが出撃し、エストニアは総力戦へ突入していた。

二十のモノアイ・ガンダムタイプと一機の人型モビルアーマー、その奥にある巨神の如き姿を前にすれば、彼らが取れる手段はこれくらいのも物だろう。

さらにオリオール・ビットという名のニュータイプ専用艦の八つ裂き光輪が舞えば、味方機と分かっていても恐怖を体が支配した。

地球圏を遠く離れた僻地のこの状況下、彼らは精神高揚剤を懐から取り出し、精神を特攻隊に変えた。

眼前に、2丁の大型ライフルを持つ女性的なフォルムの奇異な人型モビルアーマーが佇んでいた。

パシユツ

突如、宙域に閃光が弾け、

真空の夜空に大輪の花火が咲いた

≠

重力のない空間で咲いたソレは枝垂れ柳のように消えゆかず、火花を方々に散らしガンキヤノン・ディテクターやザクⅢなどの前衛隊を殲滅。さらにはケツアルコアトルのオリオール・ビットの半数と、出撃したばかりの機体をも撃墜した。

「なんだ・・・今のは・・・？」

火花の半数はケツアルコアトルにより弾かれ、バレンドラもその恩恵を受けた艦の一つとなった。

「損傷は！」

「ここは無事だ、だが次鋒艦ヨウエンとマキナミが墜ちた」

その時、バレンドラのメインブリッジにカタパルトデッキから緊急通信が入った。《おい、だれかまだ残ってたか？》

「いや、兵は全て発進させた」

《じゃあ予備のズサに乗ってるのは誰だ？》

「なんだと？・回線つなげ！」

ズサのコックピットに映った顔に、マイクロ・アーガマクルーは反応せざるを得なかった。かつて捕虜として捉えたヨーゼフ・クビツェクが、コックピットの中にいたのだ。

「あいつなにやってんだ……！」オリガは苦虫を噛み潰すように唸る。

「貴様ら……やはり裏切るのか！」

「違う！あいつが勝手に」

「なら敗北する前に敵につくと」

「うるせえな！だったらアタシが連れ戻してくりやいいんだろ!!」

オリガが半ば強引に事を進めたのには、彼女にそうするべき理由があった。

彼の保護観察対象であったという人物「パトリシア」。

クビツェクに彼女の事を問えば、その名前に刻まれたオリガの遠い記憶が蘇った。

≠

ハチカMk-II、たった一機だけ生産されたモビルスーツであえるハチカを基に再開発された完全なるワンオフ機体だ。

彼女の持つライフルは900mmの弾丸を射出するがそれはただの弾丸ではなく、花火のように全方位レーザーを放つというものであった。しかし開発コストもさることながら一発の弾丸からのレーザーは一回きり、さらに敵味方無差別に焼いてしまうため酷く使い勝手の悪い代物でもある。

そして頭部に被った菅笠には12個のファンネルが収納されている。一年戦争時の巨大モビルアーマー、ビッグ・ザムのようにそのまま水平全方位メガ粒子砲としても機能するが、サイコミュ・システムが発達した今は素直にファンネルとして使った方が利口だろう。

「残り9発……嫌な感じがする」

全方位拡散レーザーを吸い込むかのように艦隊前線に鎮座する暗黒の戦艦ケツアルコアトルが、パトリシアの胸をざわつかせた。

その時、鉄の雨がハチカに降り注ぎ、頭部に砲弾が直撃した。

「くっ……！」

『よしやったー！うわあっ……』

近づく者をファンネルで墜とし、二発目の花火で頭上のモデルスーツ群を焼いた。エスタンジアの勢力は半分を優に下回っていたが、黒い大型戦艦がいる限りいくら削っても安心はできない。

自分についてきてしまった少女の命を戦火に包むわけには行かない。たとえ護衛任務でなくとも、その意志は固かった。

だからこの機体に乗れ、再び戦場へ飛び込んだのだ。しかし、彼女のニュータイプ力が、揺るぎない真実を突きつけていた。

この中にファナの兄がいる

暗黒の戦艦はIフィールドを纏っているせいか、レーザーでかすり傷一つつけられなかった。であれば、再び口を開いたときに撃ち込むしかない。

だがこの戦艦を撃破すれば、ファナのたった一人の肉親を殺すことになる、となれば手段はたった一つ

「ゴックピットを見つけないと……ん？」

気が付くと、メインカメラの前に二機のズサの姿があった。《プル……なのか？》

「えっ？」

ズサから接触回線が繋がり、昔よく一緒に遊んだ声がした。

≠

エスタンジア艦隊の中心を漂う残骸が一つ、ジム・セークヴァリアペアである。

先のガザXとの戦闘により四肢を失い、パイロットであるニロンの命は戦闘兵器としての意義を無くした鎧が握っていた。

「やれやれ……まだ生きてるじゃねえか」

ニロンは、死の華を咲かせた人型モビルアーマーの遙か奥、暗い宇宙にひとときわ白く輝く巨大な女神を見た。

「やっとか……変な幻聴まで聞こえてきやがった」

戦場に響く女神の聲に安らぎを感じる、それはサイコフレームの共鳴現象の一つであるのだが、彼には知る術もない。

「それにしても」ニロンは目を凝らして女神を見る。「ありや女神の皮を被った死神って感じだな」

ニロンは、全天周モニターの端に映るマイクロ・アーガマの、誰一人として本来の乗員のいないエスタンジアに染まってしまった艦の姿をちらりと見た。

「……………どうせなら一発食らわせてやろうか」

まだ生きているスラストーから残った推進剤を噴かし、マイクロ・アーガマへ向かった。

もう一機のジム・セークヴァリアは、ガザYの猛攻と渡り歩いてきた。

「クソッ！やっぱりこの程度か！」

グランは、相手が仲間を殺されたことにより激昂しているのが機体の動きで分かった。しかしいくら改修機と言えど、非正規のパーツではその性能は落ちるといふものだ。

ガザY両脚を一つにして放つメガ粒子砲が焼き切れ、機体がクル・ダウンする時を待った。

≠

幼い、まだ自由だったころをパトリシアは思い出していた。「オリ……ガ……？」

モニターに通信ウィンドウが開き、懐かしく面影のある大人びた顔が見えた。

《やっぱり……》

「どうして……」およそ十年ぶりの、戦場での再会にパトリシアはなかなか言葉が出せなかった。

《こいつのおかげだ》「あ……」

ウィンドウがもう一つ開き、目に涙をためたヨーゼフ・クビツェクの顔が現れた。《やっぱり生きてた……ああああ……！》

今までなら彼に対し拒否反応まで出ていたが、この時初めてヨーゼフがいてよかったと思えた。「……………ありがとう」

「ブル、細かい話は後だ。今すぐその機体を捨てて」パトリシアの涙を

拭う間もなくオリガは言った。しかし、

「ごめん……今はダメなんだ」「えっ?」

それはオリガにとって、予想していなかった返事だった。「なんで……」

「巻き込んだじゃった子がいるんだ……わたしのせいで」

「そう……」オリガは自然と「その子の名前、教えてくれる?」と聞いた。なぜそう聞いたのかは、彼女自身にもわからずじまいであった。

「……ファナ・コ・アサテイ」

「……プルは、どうしたい?」

「解放してあげたい、ここから」

「わかった」オリガは、タロ・アサテイの姿を思い出していた。「あたし達にも責任あるからさ、手伝うよ」

「責任、て……?」

「細かい事は後だっつったろ?行くよ」

「うん、ありが……」

気が付くと、オリガの乗るズサの背後で、ケツアルコアトルがパカアッと大きな口を開けていた。「危ないオリガ!!」

パトリシアは2丁のライフルを構え、口の奥に輝く光輪めがけて弾を撃った。

その後を追うようにクビツェク機がスラスターを噴かせ全速力で大輪へ向かい、反陽子収束砲の発射口めがけミサイルの全弾を撃ち尽くす。

《う……うわあああああああああああああああああああ
!!!》

パウツ

≠

「ビーム……バリア……」

サイコガンダム・テスカトリポカは、ファンネルで機体を覆うほどのビーム・バリアを展開し、反陽子収束砲を完全に無効化していた。

モビルアーマーの脅威は取り除いた。が、その奥に荘厳と佇む人の造りし姿に、アドルフは聖職者のような畏怖を抱いた。

《アドルフ》

コックピットにタロの声が響く。しかしその声は、虚ろだった。《近づけてくれないか》

「近づくって・・・」

《あの中にいるんだ、早く助け出さないと》

テスカトリポカの姿に神々しさを覚えるアドルフと違い、タロにはその中にある姿を捉えていた。

そこに映る彼女の姿は、どこか怒っているようにみえた。

『プルさんにひどいことしないで！』

そんな声が聴こえたかと思うと、サイコガンダム・テスカトリポの“口”がゆっくりと開き、光が収束していった。

≠

「早く脱出して！」

ハチカMk-IIは、クビツエクをのみ込んだ反陽子収束砲に、Iフィールドごと貫かれていた。

パトリシアはコンソールをいじって脱出を試みるも、

《・・・だめだ》

先ほどの頭部の被弾により回路が故障していた。

《脱出・・・できないみたい》

≠

『プルさんが・・・』

ファナは、怖がるパトリシアの姿を感じ取っていた。『お兄ちゃん・・・プルさんにひどいことしないで！』

彼女の感情に応えるように、テスカトリポカのガンダムフェイスの口が開き、

眩い一筋の閃光が奔った。

その閃光は、ケツアルコアトルの表皮を抉った。

≠

再び、戦場が光った。

ズサからは離れていたが、オリガは目がつぶれたかと思うほどの閃光だった。

「ぐつつつ．．．!!」

オリガはなんとか視界を回復させると、ハチカMk-IIの中で、また一つの命が宇宙に散ろうとしていた。

《《ありがとう．．．ここまで来てくれて．．．》》

パトリシアの、最期の言葉を紡ぐ声だけが、コックピットに響いた。

《《最期に会えてよかった．．．でも．．．もつと話したかったな．．．》》

「．．．なに言ってるんだばかっ!!!」

オリガは、自分でも意識しないうちに叫び、ズサのマニピュレーターでモビルアーマーの脳天、傘の中心部分に手をかけていた。

「顔も合わせないでなが、『最後に会えて』だ!」

ビームサーベルで穴をあけ、マニピュレーターで装甲を剥がし、中の回路を一身に穿った。

そして、無数の回路が繋がった球体、コックピットがあった。

「これだ．．．!!」

コックピットであるポッドをがっしりと掴み、「うらああああああああああ!!!」

ズサのアームがちぎれそうになりながらも

パトリシアを脱出させた。

コックピットを引きちぎりその場を離れると、ハチカMk-IIは塵となった。

「ね、ねえ」

「ん?なに?」

「どうして『ここだ』ってわかったの?」

プルが訊くとオリガはどこか得意げに

「ああ、メカニックやってるからね」と答えた。

≠

二射目の反陽子収束砲により、ゼーレーヴェ艦は大破した。

「あぶなかった．．．」

艦長をはじめとする乗組員は、ギョントターの乗るガルヴァドスにアリエス基地へ牽引され射線上を逃れていた。

「じゃあ・・・行つてきます」

ギョンターはクルーを基地内の安全圏まで届け再びガルヴァドスに乗り込もうとするとキューベルに呼び止められた。「ちよつ、ちよつと待つてよ!..どうする気?！」

「どうするつて・・・決まつてんじやん」

「だ：ダメよ」

「なんで」

「なんでつて・・・」

「エヴァが死んだ、あんなにあつけなく：だから・・・」

「あなたも死ぬかもしれないんだよ?!」

「ベル、これは戦争だよ?今はさ、艦長として振る舞つてよ」

「・・・では：艦長として命令します。」

ギョンター・エンゲルス伍長、直ちに出撃してください。そして：絶対に帰つてきなさい」

アリエス基地から、再びガルヴァドスが翔び立った。

≠

キューベルはアルマと共に総合指令室へ向かつていた。仮にも艦長である今、女としての感情は二の次でなければならぬ。

軍人として襟を正したキューベルは、この戦況に不信感を抱いていた。

「あの：急にどうされたんですか?」アルマだ。

「・・・おかしいのよ」

「おかしい?」

「・・・向こうはともかくとして、こっちの指揮系統がとれてなさすぎる：誰が指揮を執つてるのかしら・・・」

総合指令室につくと女がいた。たしかカーン・ジュニアの秘書だ。

「・・・カーン・ジュニア様はどこ?」

≠

オリガは、パトリシアをコックピットに入れて白い巨神に向かつていた。アリエスの戦力も低下した今、気をつけるべきは巨神からの攻撃だ。

彼女たちは、およそ十年ぶりに親友だったあの日へ帰っていた。

「ごめんね、ほんとはもつと早くに知らせたかったんだけど・・・」

「いいよ話さなくて、ヨーゼフから大体聞いたからさ」

その男も、今や宇宙の塵になってしまった。

「ほんとはもつとちゃんと話したいけどさ・・・まずこつちを片付けなきゃね」

「・・・さっきの、あたしたちにも責任があるって、どういうこと？」

久々に再開した親友との思い出話をしている間も、パトリシアはそこが気になっていた。

「ああ、その子から兄貴の話とか聞いてない？」

「！そうか・・・だから、あの時・・・」

「ん？あの時？」

「あの黒い大型戦艦にファナのお兄さんがいるって感じたの。だからあの時・・・どうやってコックピットを見つけようかって考えてたんだ、オリガがやったみたい」

「そっか」

「ねえ、オリガは・・・どっちを止めたい？」

「どっちって」行動を共にしたタロカ、顔も知らない妹のファナか、オリガの答えは一つだった。「両方に決まってるんだろ」

「・・・もう少しで味方機が来る、彼に私を渡してオリガはお兄さんのそこへ向かって」

「えっ？何するつもり・・・」

その時、ズサの被ロックオンアラートが鳴った。全天周モニターに、漆黒の騎士の姿があった。

≠

ギウンターが戦域の中間地点まで来ると敵機に遭遇した。ゆっくりとガルヴァードスのランスを構えると、敵機は白旗をあげ、コックピットのハッチを開けた。

「白旗だと・・・？」

敵機は中から見覚えのあるノーマルスーツを吐き出した。

近づいてくるノーマルスーツをマニピュレーターで拾い上げコック

クピットに入れると、それを確認したかのように敵機は全速力で引き返していった。

「あつ、おい！」

「アリエスへ向かって！今すぐに！」

「はあつ?!」

「時間がないの、早く！」

「そんなことできるかよ……！今はエヴァの仇を討たなきゃ」

「……かたき討ちなんていつでもできる」ギョントラーのいうことをぐつと呑み込んだ。「今は……目の前の事に集中して！」

ギョントラーは仇討ちができないばかりか、あつさり再びキューベルと顔をあわせるであろうことに苛立ちと溜息を吐きつつ、仕方なく引き返した。

≠

「特殊な脳波を感知する人工元素で造られたコンピューター・チップ、それがサイコミュということは知っているね？」

レヴァハン・M・ヴィルヘルム、もとい、ステイブ・ワインスタインは自身の研究室で、弟であるブラッドにまるで大学の講義のように淡々と言い聞かせていた。

「我々の研究所ではそれを基に、脳波を感知する成分を取り出し繊維状にした。これがサイコ・ファイバー、そしてこの実験機がアウター・ガンダムだ。ところが後に見直すと二つの欠陥が見つかった。

一つはファイバーを血管のように張り巡らせて内部構造に組み込んだこと。設計段階で分かっていたことだが機体の寿命を縮める上に不具合も起こりやすい。しかし既存のパーツに組み込ませて性能を發揮させるにはこれが一番有効だった。

とはいえ構造的な問題は後でどうにでもできる。課題となったのはもう一つの欠陥：ニュータイプへの副作用、これが厄介だった。」

ブラッドは、途端に心臓を掴まれたように呼吸をわずかに荒げた。ステイブンは特に反応することなくさらに続けた。

「ただ脳波を感知するだけだったサイコミュと違い、不純物を取り除いたサイコ・ファイバーは、感知どころか脳波を増大させフィード

バックまでするということが分かった。

テストの段階では問題はなかったが後々に後遺症があらわれてね、一人使い物にならなくなってしまった。機体の構造はクリアできたとしてもこちらが問題だった。精度が上がってもその先が破滅では意味がない。

ところが私の助手が上手いこと調律してくれてね、バイオセンサーを導入してサイコ・ファイバーを機体のフレームとして組み込み、見事発展させてくれた。それがサイコフレームだ。」

ステイブン・ワインスタインは視線をモニターに移し、宇宙を見た。

「アウターがサイコ・ファイバー試作実験機とすればテスカトリポカはサイコフレーム実験機といったところだ。

確かに機能させるためにこの大きさになってしまったが・・・戦略戦術研究所の力を借りれば将来的にはモビルスーツ大にまで縮小できるだろう。」

そして、その眼差しを再びブラッドに戻す。「サイコフレームはニュータイプ・イノベーターシステムとして、ニュータイプそのものを革新させる力を持っている。ラプラスの箱を開ける鍵となって。」

≠

戦場は、静かになっていた。サイコガンダム・テスカトリポカの発するサイコフレームの光が安らぎを与え、戦場から戦意を奪っていた。

「連邦もジオンも関係ない…ぼくの狙いはただ一つ、ニュータイプを認めさせることだ・・・」

海賊を味方につけてエスタンジアを結成したのもそのため・・・あの研究所であいつに利用されてからずっとそのことを考えてきた、これも目的達成のために必要な事なんだ・・・！」

アドルフは、タロに言うと同時に自分に言い聞かせて、恐怖を押し殺し、サイコフレームに抗っていた。

復讐を誓うものと更なる争いを止めようとするもの、ニュータイプの先に行くものと死への道を歩むもの・・・

それぞれの抵抗が、集結しつつあった。

≠

「ラプラスの箱の鍵とはなんだ」

兄の口にしたその言葉が、ブラッドの頭に引つかかった。

「開ければ連邦政府が転覆するパンドラの箱……ただの都市伝説さ、私の中ではな。」

「ふん……よくそんな与太話にここまで付き合えたな？」

「ああ、私も驚いたよ。ラプラスの箱の都市伝説を『試しに』ネット上に流布したらその痕跡が跡形もなく消えたんだからな。」

「……それがどうした」

「お前はつくづく鈍感だな。広大なネットワークに一度流れてしまえば消すことは不可能、それを痕跡もなく消すのは一国家レベルの組織のなせる業だ。例えば……連邦政府とかな。」

「……まあいいさ」

ハマーンの記憶から逃れたブラッドは、もはやジオン再興などどうでもよくなっていた。「なぜ……あの子を利用した？」

「あの子？ああ、これはサイコフレームとニュータイプの相互作用実験だ、一際脳波の強い彼女を使うのは当然だ。」

人ひとりをマウスと同列に扱う説明が、彼の人間性をよく表している。

「どうやらあの少女はステロタイプへ覚醒しているようだ。自閉するニューロタイプとは違ってな。」

ブラッドは全身がわなわなと震えていた。恐怖にはない、

なぜこの男が目の前にいるのか、

何故この男と血が繋がっているのか、

なぜ、兄なのか

怒り、恥、憂い——そんな感情が、ブラッドを支配してゆく。

「兄さんの目的はなんなんだ……あなたは何がしたいんだ？」

ブラッドがそういうと彼は、変わらぬ眼でさも意外そうに「目的？」と首を傾げた。「そんな高尚なものはない。閃きをただ実行しているに過ぎないさ。まあ、強いて言えば」

彼ずれた眼鏡を直し

「ニュータイプの研究をただひたすら続ける、それがフラナガン機関の意志を継いだ私の役目だ。」

≠

オリガが引き返すと、ケツアルコアトルは三射目のエネルギーを溜めながらゆつくりと、サイコガンダム・テスカトリポカへ歩み寄っていた。

「タロー！今すぐそれから降りろ！」回線が繋がるかはわからない、しかし今はなんとしても伝えなくてはいけない。

「あの中にはお前の妹が」

《わかってますよ、オリガさん》タロからの応答があり、僅かに安堵した。

「だったら」

《これはオレらの問題です。俺が解決しなきゃいけないんです》

「なに言ってるんだ！そんな物で出来るわけないだろ！」

そこから降りろ・・・あたしが送ってやる！」

《ファナはあんなものに囚われてしまった。だから今は、救うにはこれしかないんです》

言葉は通じてても声が届かなかった。タロの精神は、サイコ・ファイバーに呑み込まれてしまっていた。

「それはお前の方だよ・・・！」オリガは拳を握り締め、コンソールパネルを殴った。

その時、交戦しながら接近する二機の機影を捉えた。

「これは・・・」

うちの一機は、グランの乗るジム・セークヴァリアペアだった。

≠

「メモリークローンにしてもそうだ。

ザビ家に執着するネオ・ジオンには『優良種を生み出す土壌の一環としてクローン技術の発展に努める』とでも言っておけば資金も出る。

それに、技術を完成させていればシャアがアウターに乗り万一の事

が起きたとしても代わりが利くようになる。方法は何でもよかった。」

彼は一通り話し終えると、ブラッドは無言の返事と共にゆっくりと銃を突きつけた。血の通う人間なら、最後に兄としての言葉を言ってくれるだろうと思った。

その時、背後の扉が空き「いた！」という高くも芯のある声が静寂を割いた。振り返ると、ゼーレーヴェ艦長キューベル・ポルシエが兄に銃を向けていた。

≠

キューベルが勢いよく扉を開けると、二人の男が対峙していた。一人はメモリー・クローンの実験台としてハマーン・カーンの記憶を植え付けられた弟のブラッドだ。

そしてもう一人は記憶を植え付けた張本人である兄、ステイーブ・ワインスタイン。シャアから話を聞かなければこれほどすぐに彼に銃を向けなかっただろう。普通であれば銃を手にした方に向けるのだから。

「今すぐサイコガンダムを止めなさい」

「……………」

二つの銃口が向けられても、彼は表情筋を何一つ動かさなかった。本当に見えるているのだろうかと疑いたくなるほどだ。

「それは」やっこのことで口を開いたかと思えば「彼女に聞いてみないとわからないな。」と言って銃口に背を向け、手元のスイッチを押して通信を開いた。

「やあ」

《はい》

「今、実験を中止しろと言われてね、君の意見が聞きたい。」

《……………》

「どうするかな？データはほぼ取れたからいいけど、君の目的はまだだろうか？」

《……………もう少しだけ、お願いします》

「了解。」

やり取りを終えるとステイブンは振り返り「というわけだ。中止はもうしばらく待っていただきたい。」

「今のは誘導尋問じゃない、今すぐ停止させなさい！」

「こちらからの手出しができない今、停止させるには彼女がやるしかない。だから私は彼女に聞いたんだ。」

「……君の目的はまだだろう」って聞いてたわよね。どういう意味？」

「そのままの意味だ。彼女の目的」「それがなんだって聞いてんのよ！」

キューベルは危うく発砲するところだった。ファナはなぜパトリシアの後を追ひ、乗艦したのかをはつきりと言わなかった。とは言ってもあらかたの察しはついていたが……

「君たちゼーレーヴェ艦の食らった反陽子収束砲はニュータイプ専用艦によるものだ。」キューベルの脳裏に、閃光が迫ってくる光景が焼き付いていた。「それを動かしているのが彼女の兄だ。」

「な……なんですって……」

「彼女は兄に会うために我々の実験に協力してくれた。今テスカトリポカを停止させれば、彼による蹂躪は免れないだろう。」

キューベルの腕から、銃を構える力が抜けていった。

≠

グランに加勢したいところだが今はタロをあの中から救出しないといけない。窮地に立たされているとなれば話は別だが、あの様子ならまだ少しの猶予はありそうだ。

「あんた……もう少しだけ待っててね……」

彼を翻弄する機体にミサイルを放ちただけ援護すると、ケツアルコアトルのMS用ハッチを探した。

ガザYにミサイルが直撃し、コックピットが大きく揺れた。不意打ちを食らった迫水は少し冷静さを取り戻すと、敵の巨大艦の影に向かう、ミサイルを積んだモビルスーツ、ズサが見えた。「……あいつを先にやるか」

「今のは……オリガ、お前か？」

ズサと回線をつないだわけではないが、何故かグランはそれが彼女だと感じた。これもサイコフレームによる意識の、俗に第六感と言われる感覚の拡大現象なのだろうか。

なぜオリガが戦場にいるのか、と考えている間にガザYは、注意を自分から外し彼女へと向かっていつていた。「あの野郎ツ！」

ガザYの接近アラートが鳴る中、オリガはアウターの入ったハッチをビームサーベルで焼き切り、ケツアルコアトルへ浸入した。

戦艦ではなくもはや兵器同然であるこの戦艦内は居住ブロックもモビルスーツデッキもなく、さほど時間をかけずにタロの元へたどり着いた。

アウター・ガンダムは、全身にケーブルが接続されモビルスーツとしての機能を失くし、

ニュータイプ専用艦の一部として反陽子収束砲のトリガーを握っていた。

「タロー！」

≠

ファナはタロの後を追ってここまで来た。ということは、今この状況のきっかけを作ったのは自分ではないか・・・そのような自責の念がブラッドの首を絞めてゆく。しかし屈するときは今ではない、と耐える。

「だったら今すぐに停戦信号を出せ！会うなら後でもできる」

「彼女が今どんな姿をしているかお前なら察しがつくだろう？そんな状態で会わせるのは残酷だと思わないか？」

ブラッドは一気に血が頭に上り、思わず引き金を引いた。弾はステイブンの面の皮を掠め、パネルの一つが機能を停止した。

「今さらどの口が言ってるんだ・・・！リユース・サイコ・デバイスなんてものをやった貴様が言うことか!!」

「さっき言ったことをもう忘れたのか？宇宙放射線を防ぎきれないあのコロニーからくれば」

「うるさいうるさいうるさい!!」

「フアナ・コ・アサティはそれを納得してくれた。そのうえでこの実験に協力してくれている。お前らはそれを無下にするのか？」

「……………そうか、お前はそれを話したんだな。あの子に…それを！」

引き金を握る指に再び力が入る

パン

かと思えば、肩から血が流れ、ブラッドはガクツと跪いた。ステイブンが左ポケットから銃を取り出し、そのまま流れるように撃っていた。

≠

《あ、オリガさん》

「タロ、よく聞いて」

出来ることならコックピットから抜け出していきたい。しかしいくらノーマルスーツを着ているとはいえ、反陽子が溜まっているかもわからないこの空間では、電子レンジの中に飛び込むようなものである。

「囚われてるのはお前だ……………お前が一番そうなつてんだよ」

《それがなんだって言うんです》

「おまえ……………わかってやってたのか?！」

《はい。俺ができる唯一のやり方ですから》

「ちがう！お前はまだ若いから見えてないだけだ！知らないだけだ！お前ならもつと」

その時、艦が激しく揺れた。「うわあつ！」

オリガの後を追って来た迫水のガザYとグランのジム・セークヴァリペアが、艦内で衝突したのだ。

《俺はずつとあの中にいた。これ以上時間はかけてられないんです》

「このガキが……………だったら力尽くで」ズサが、敵機による被ロックオンの警告を発した。背後で、ガザYが、既に脚部のメガ粒子砲を解除し、ビームサーベルを構えていた。「……………ちつ」

「そうか、ここにいたのか」

迫水は、標的の後ろに仇を見た。仲間であり、恋人であったエヴァをあつかりと奪っていった白い悪魔を見た。

「お前が・・・お前がエヴァを・・・」

両手でサーベルを握りしめ、一気にスラストターを噴かせ、アウター・ガンダムへと迫った。「お前があああああああああああ
!!!」

『危ない!!』

ビームサーベルは、アウターではなく、ズサのコックピットを貫いた。

オリガが、タロの盾となつて、散った。

そして、グランのジム・セークヴァリアペアが、彼らのもとに駆け付けた。「・・・オリガ?」

「・・・え?」

タロとグランは、彼女の死を受け取った。そして、もう一人も：

≠

「うそ・・・そんな・・・オリガが・・・」

パトリシアは、アリエス内をギウンターと彷徨っていた。その中で彼女は、虫の知らせを受け取り、立ち止まった。

「お、おい・・・どーしたんだよ」

ギウンターの呼びかけに応えようとも、体が硬直してしまっていた。「アンタが行くつつつたから引き返したんだろ?!」

心に空いた風穴をギウンターの声を通り抜けていく。「おい!どうしちやっただんだよ?!プル!!」

肩を掴まれ、ゆすられても、何も感じなかった。

「ここまで来て急に怖気づいて・・・わかったよ、俺一人で行くよ!」

パンツ

「・・・!」

どこからかの銃声が、ギウンターの足を止めた。その乾いた音は、同時にパトリシアの頬をはたいた。

彼女はうなだれていた頭をゆっくりと上げ、涙を拭きとった。

『泣くのは後でもできる』

パトリシアは自分にそう言い聞かせた。

「ああっ！ギウンターさん！プルさん！」

銃声が続いて、アルマの慌てふためく声が響き、前方で手を振っていた。「こつちですこつち!!艦長が……!」

「……ベル!!」

ギウンターが走り出し、パトリシアも後に続いた。

≠

銃口が、キューベルに向いていた。

ブラッドは腕を抑え、我が身を撃った兄に憎悪を送っていた。

「君たちが呼び掛けたところで無駄だと思うが、念のためこうさせてもらう。こうなってしまった以上、ここから抜け出して余計な行動を起こされても困るからね。」

「総帥から聞いたわ、あなた達のこと」

キューベルは銃口に臆することなく抵抗した。厳密に言えばそれは弟のブラッドからだ、なにが引き金となるかわからない今はシャアに濡れ衣を被ってもらうことにした。

「あなた……最低ね」

そんなドラマみたいなセリフが彼の鉄仮面を崩すわけがない事は彼女もわかっていた。しかし、そう言わずにはいられない。

「人をゴミみたいに扱って……実の弟をこんな風にして!あなたには人の心がないの?!」

「……一つ言わせてもらえば」

「やつと彼が口を開いた。」

「私は実験台をゴミみたいに扱ったことは一度もない。」

「そういうことを言ってるんじや」

「例えばの話だが、君は生き物を殺して食べたことがあるかな?」

「え……?」

「牛とか豚とかあるだろう? 鹿でもいいし魚を釣って食べた、とかいう話でもいい」

「な、なに言ってるの……」

キューベルは思った。この男に通じる言葉はない。この男と目を

合わせると全身が芯から震えた。「い、今はそんな話をしてるんじゃない」「質問に応えろ、生き物を殺して食ったことがあるかと聞いてるんだ」

今まで冷静どころか機械のように受け応えていた声に初めて感情のようなものを感じ、キューベルは怯えた。「な…ないわ…」

「なら一つ覚えておくといい、猟師が獲物を仕留めて食べる時は、いただきます」感謝して食べるそうだと。命をありがたくいただきます…いい言葉だな。」

ここまで言葉をしゃべっていても彼の意図が何一つ読み取れない。それは、彼女自身が軽くパニックに陥っている証拠である。「だ…だからなにを」

銃弾が顔の横を掠めた。「今の話を聞いてなかったのか？」

キューベルは、必死に顔をふりながらも失禁してしまっていた。

「つまりそういうことだ。実験に協力してくれている以上、私は命をいただいていることになる。こういうとカニバリズムにも聞こえてしまうが…もちろんそういう意味ではないのは今の話を聞いてわかってもらえたと思う。ま、私は食べ物も粗末にはしないがね。」

≠

「な…なんだよ…あいつ…!」

ステイブンの話を聞いているのは彼女らだけではない。壁を一枚隔てた通路で、ギユンターとパトリシア、さらにはアルマまで聞き耳を立てていた。

何の前触れもなく銃が再び火を放った時は危うく声が漏れそうになったが、何とかこらえ隙が出来る時を待つ。

およそ血が通っている人間とは思えない男の振る舞いにギユンターは浮足立ち、いつキューベルが撃たれるともわからないプレッシャーが膨らんでいく。

「くそ…もう我慢できねえ…」

「焦らないで、私が合図するまで待つて」

彼に反し、パトリシアは顔色一つ変えずに銃を構えながら、いつでも突入できる態勢をとっていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

≠

ステイブンが、突如機能を停止した機械のように「止まった」。彼の視線は明らかに壁を向いている。ブラッドとキューベルが訝しげに彼を注視している

「外に誰かいるな。」と言って機械のような眼を再びキューベルに向けた。「そんなところで聞き耳立てずに入ってきてなさい。」

銃口が、扉の外に向いた。

「だめッ！入ってきちゃ、あぁっ・・・・・・・・!!!」キューベルの肩を、銃弾が掠めた。

「うるさい喋るな。」

早く入ってこないと君達の可愛いボスが可哀そうなことになるぞ。私もむやみにこんなことはしたくない。」

温度の感じられない声だけが通路に響く。

「ぐッ・・・・・・・・」

「挑発にのらないで、まだ我慢して」

今にも特攻をかけんとするギウンターをパトリシアはなんとか引き留めようと、彼の耳元で強く囁いた。

だが、それは次の瞬間に、もろくも崩れ去る

「あーあ、可哀そうだなあ。」という声がかして、再び銃声が鳴った。

「あ……ああああああああ!!!」

ギウンターはステイブンに向け銃弾を放ちながら機械まみれの部屋に突入し、キューベルに覆いかぶさった。

「ベル!!うぐあっ・・・・・・・・」

数発の銃弾が、彼の背を血に染めた。

「くそっ！」

ブラッドは、一瞬生まれた隙を突き、銃を撃った。ステイブンの手にしている銃をはじくと同時に、パトリシアが後ろから放った弾が左腕に命中していた。「・・・・・・・・」

「今だッ！早く二人をここから離せ!!」

ブラッドの合図を機に、パトリシアとアルマがキューベルとギウン

ターを抱えて研究室を出ていった。

「艦長……」

キューベルは、肩から血を流しつつも、ギンターを背負い医務室へ向かっていった。

「私は大丈夫、それよりも彼を……早く連れて行かなきゃ」

「あの……ギンターさんは……もう」アルマが言いかけたとき、パトリシアが彼女の肩を掴んで何も言わずに首をふった。

キューベルにアルマの言うことは聞こえていない。しかし、彼女に伝わる感触が、徐々に重く、冷たくなっていく。

医務室の扉が視界に入った時、背負っていた物がずるりと肩から落ちた。

「ねえ……ちよつと……ねえつてば」

彼は穏やかな顔をしていた。

「なに寝てるの……起きてよ……ねえつ……!」

揺り動かしても、何もかえつてこなかった。

「あ……あああ……ああああああああ」彼女の声だけが、むなしく響いた。

≠

「なんだ……この嫌な感じは……やめろお!ぼくの中に入ってくるなあ!!」

ニュータイプは、自身の並外れた空間認識能力であり超感覚的知覚に苛まれることがある。特に命の奪い合いである戦場においては、それが顕著になって、感じたくもない誰かの死を感知してしまう。

アウター・ガンダム、サイコ・ファイバー、サイコガンダム・テストカトリポカのサイコフレームの相乗効果によって、アドルフは人の死どころか死の感触、さらには宇宙に溶けた残留思念までも感じ取っていた。

そしてタロは、その感触を既にリボー・コロニー脱出直後に味わっていたが、親しい人が背後であつという間に死んだ今、自らを閉ざしてただの受け皿になることで、死に至る病から逃れていた。

それは、ニュータイプがマイナスの方向で覚醒したニューロタイプの姿であり、タロ・アサティは、もはやアウター・ガンダムを動かすただのエンジンとなっていた。

超感覚的知覚、俗に第六感と呼ばれる能力はもとより人間に備わっており、サイコフレームに感化されるのは何もニュータイプだけではない。

言ってしまうえば、ニュータイプがより敏感に感じるだけの事であり、オールドタイプと差別的に呼ばれている者でもその片鱗を感じることはできる。

「オリ・・・ガ・・・?」

ケツアルコアトルの胎内で、グランの前に肉体を捨てたオリガの姿があった。彼女は穏やかな顔にどこか悲しげな表情を浮かべていた。

オリガは彼に口づけをすると、どこかへ行ってしまった。

「あ・・・ああ・・・」

グランは、彼女の安らかな表情を感じ、目の前のオリガを殺した相手に何もできなかった。

『アドルフ』タロの感情のない声が、操舵席に響く。

「なっ・・・なんだよっ・・・」ニュータイプ特有の不快感の中で、アドルフはなんとか言葉を紡ぐ。

『早くこの戦争を終わらせなくちゃ これ以上人を死なせちゃいけない』

「だからそれを今考えてんだろっ!!あのバリアが破れない限りは何をやっても・・・?」

いつの間にか、マイクロ・アーガマがケツアルコアトルの横を通り抜け、サイコガンダム・テスカトリポカへと向かっていた。

「おい・・・なにをしている?!」

アドルフがマイクロ・アーガマに緊急通信を入れると、口から血を流している男の顔が映った。

《よお坊ちゃん・・・元気そうだな》

『・・・二ロンさん』

それは、マイクロ・アーガマの乗組員であり、タロにとっては砂漠で一夜を共に過ごした男だった。

「おお・・・タロもいるのか」

『いくんですか』

「ああ・・・どつちにしろこの身体じゃもう無理だ」

ニロンはマイクロ・アーガマに乗り込み、自身の身体と引き換えにエスタンジアの乗組員を全員殺害して、たった一人で舵を取っていた。

『そうですか、あなたとはもつと話したかった』

「なんだよ・・・ずいぶんあっさりしてんなあ・・・ちよつと寂しいじゃねえか」

『ええ、自分でも変な感じです。今はただ、あるがままを受け入れようかなつて』

「そうかい・・・ところでよ・・・さつきから変な声が聴こえるんだ・・・もうあの世が近いのか...これは」

彼が聴こえている声はサイコフレームによるものであり、これもまた、ニュータイプの更なる覚醒の一つであるステロタイプの姿であった。

ニューロタイプがマイナスとすればこちらはプラス、自閉するニューロタイプとは違い、ファナは自身の意識を拡大させ宇宙に共鳴させていた。

『ニロンさん、やっと楽になれますね』

「ああ・・・あの話をしたのはお前が最初で最後だ」

『・・・ありがとうございます』

じゃあな

それが、タロが受け取った最後の言葉だった。

「ごちやごちやうるせえなあ・・・」ニロン・アラダールは、マイクロ・アーガマがバリアを展開する大型ファンネルへ特攻をかけ「こつちは死人しか乗ってねえんだよ!!」自らの命と引き換えに、突破口が開かれた。

しかし、クビツェクの死に際の際のミサイルが、反陽子収束発射口以外

のいたるところを傷つけ、三射目のエネルギーの充填率が下がりがつた。あつた。

「エネルギーが散っていく……ちくしょう」
アドルフは、スラスターを最大限まで噴射させた。

≠
ケツアルコアトルの進む先に、一機のモビルスーツが待ち構えていた。

ヴェルデ・エア、東條は迫り来る大型艦に呑み込まれようとしながらも、大型のロングレンジ・レールガンで冷静に狙いを定めていた。
「一発だ……一発でいいはずだ」

砲口は、大きく口を開いたその中心で反陽子収束砲を構えるアウター・ガンダムに向いていた。

≠

「タロ」

アドルフが呼んだ。「これじゃもう発射はできない」
テスカトリポカまで近づくとつれ、アウターに繋がれたケーブルが次々と切断されていく。

「ぼくはここまでだ。あとは……いいかな……」
『……わかった』

タロは、まだ若い少年の望みを達成させることが、ある種の罪滅ぼしになると潜在的に感じていたのかもしれない。そしてそれが、一つの時代を終わらせるということも。

そして、ケツアルコアトルは、アウターが二機のモビルスーツを連れ脱出すると、残った反陽子を溜めたままテスカトリポカの左腕に食らいついた。

「Iフィールドで固めた反陽子が、テスカトリポカを侵食してゆく。テスカトリポカが、再び口を開いた。

「くそ……またガンダムを逃がした……ん？」

東條の前に、ギンタターの幻が現れた。「お前……死んだのか」
『艦長は無事ですすよ』

「そうか」

ヴェルデ・エアの放った弾はケツアルコアトルの口内を貫通し、辺りには反陽子が漏れ出した。

「すまないキューベル、俺もどうやら」

パウツ

反陽子のレンジと化した口内に放たれたテスカトリポカのプロトンビームにより、東條は機体と共に絶命した。

そしてアドルフも、巨神の左腕をもぎ取った漆黒の戦艦と共に反陽子の爆発により短い生涯を終わらせた。

『ニュータイプの未来を・・・掴んで・・・』

≠

部屋には再び、兄弟だけが取り残されていた。

2人とも鏡を合わせたかのように腕から血を流していた。

ステイブンは特に気に掛ける様子もなかったが、自身の出血を一瞥すると

「私の意識があるうちに・・・お前にこれを渡しておこう。」と行って、少し大きめの箱をブラッドに差し出した。

「今日はクリスマスだ」

手渡された箱を開けると、膨大な資料とアクリル状のタブレット端末があった。

「ここに私の研究データがある。すでに一通りニュータイプ研究所に送ったが今回の実験結果はまだ出ていない。

頃合いを見計らってアナハイム・エレクトロニクスに送れ、そうすればお前に多額の資金が振り込まれるようになっていく。

今までのすまなかつたね、メリークリスマス」

パンツ

言い終わらない内に、渴いた音がヴィルヘルムの額を貫いた。

弟から兄への初めてのプレゼントは、ピストルの弾だった。

それから彼は、マガジンに残っている弾すべてを、兄の身体に撃ち込んだ。

「・・・メリー・クリスマス」

≠

サイコガンダム・テスカトリポカはバリアと左腕を失い、さらにケツアルコアトルの爆発で左半身の機械構造が剥き出しになっていた。タロは、フアナの存在を感じる胸部中心、心臓の位置までアウター・ガンダムを近づけた。

タロとフアナは彼の地でやつと再会を遂げ、二人の兄妹の長い旅は、終わりに近づいていた。

フアナ！ダメじゃないかこんなところまで来ちゃ

ごめんなさい お兄ちゃん

さあ、帰ろう

ごめん できないの

え？

もう帰れなくなっちゃった

なに言ってるんだよ あ、もしかして兄ちゃんが怒ってるって

ううん そうじゃないの それにお兄ちゃんの心に、もう私はいないから

ふ：フアナ？ やつと地球まで帰れるんだぞ？

お兄ちゃんはちゃんと生きる理由を見つけてる でも私は

ば：ばか言うなよ！ これから見つけられればいいだろ!?

ダメなの・・・あたし、こんなだから・・・

初めて、タロは、巨神の中のフアナの姿をみた。今まではつきりと見えなかったのは、フアナ自身がその姿を見られることを拒んでいたのだろう。

タロの中で、ここに来るまでに積み上げてきたものが、一気に崩れていった。

何のためにここまで来たのか、何のための苦しさだったのか、すべてが意味を無くしていった。

「あ・・・ああ・・・なんで・・・なんでこんな・・・」

私から頼んでもこうしてもらったの 長くはないって言われてだから気にしないで

「俺が・・・おれがコロニーを離れたから・・・だからフアナは」

ちがうよ やつと私は ひとり立ちできたの

「……………」

短い間だったけど、外の世界が見れてたのしかった

「まだ見ていない！ いったたじゃないか！ 地球に帰りたいて…
！」

「じゃあねお兄ちゃん… 生きてね… 生きてね」

サイコガンダム・テスカトリポカに綻びが奔り、剥き出しになったサイコフレイムから光が溢れた。

機体はメルトダウンを起こしたように、機体に繋がれたファナの、残された肉体と共に溶解してオーロラを描いた。

ファナの魂は、その光と共に宇宙へ混じり合っていた。

サイコフレイムのオーロラを浴びたタロを、生まれてからの記憶が流れていった。

母と父の顔、ぬくもり

地球の澄んだ空気

ファナが生まれたとき

そして、戦火

タロは、駆け巡る走馬燈の中でたった一つ、未来を見た

そこには、今とはすこし違う、クシナがいた。

こちらを見て口を動かしながらかを言っているがうまく聞き取れない。しかし、彼女が視線を自分から窓に移した時、はつきりと声が聞こえた。

「あの子には… 未来を生きてほしいから」

ああ、そうだね

それを最後に、タロの意識は悠久の時を刻む海の中へ溶けていった。

≠

ブラッド・ワインスタインにより採光照明弾と可視光通信が放たれ、彼の地での戦いは終わった。ケツアルコアトルの特攻とサイコガンダム・テスカトリポカの爆発により小惑星基地アリエスは部分的に

壊滅的なダメージは負ったが、基地としての生命維持は十分機能していた。

「機体は第8ドックへ、負傷兵は居住ブロックに運べ！」

カーン・ジュニア、もといブラッド・ワインスタインは少しでも意味のない戦いの償いのため、先頭に立ち指示を送っていた。

そんな中で、装甲が剥がれ機械構造が剥き出しになったアウター・ガンダムが流れてきた。モビルスーツとしての機能を失いつつも、奇的にコックピットは無事だった。

「カーン・ジュニア様、パイロットはどうしましょう」

「万一の事もある、とりあえずアウターごと重力ブロックに運べ」

タロの身体は負傷兵とは別のブロックに運ばれていた。その中にある手術室で、ブラッド・ワインスタインは、タロの身体を眺めていた。

ボタンとドアが空き、クシナが飛び込んできた。「……タロ？」

彼女は、目を開けた横たわるタロの姿に次第に声を震わせて言った。「ねえ……どうしちゃったの……ねえっ!」

クシナが、涙をこぼしながらブラッドを見ると、彼は愁いを帯びた瞳をしていた。

「あ……ああ……」

「……できる限りのことはするつもりです。でも……奇跡はないものと思っただけです」

再び扉があき、ウイノナが数名の白衣を纏った研究員を連れてきた。

「これより彼の手術を開始します。あなたは出ていてください。」

「いやです！私もここで見ます!!」

「彼は生きるか死ぬかの瀬戸際だ！それに……彼がもし宇宙放射線を浴びていた場合は表皮を取り換えることになる、そんな残酷なところを見続けられるのか?!」

「で……でも!!」

「いずれにせよこの手術は少なくとも3日は必要になります。ウイノ

ナ、彼女を外へ」「はい」

クシナが声にならない声と共に手術室を後にすると、カーン・ジュニアはゆっくりとタロに向き直った。

「彼はもうここにはいない……彼の意識は、人としての魂はどこかへ行ってしまった。」

もうこれは誰でもない。

最低限の生命維持をしている細胞の塊にすぎない……兄さん、あなたの罪と、あんたを殺した罪は……これで償うよ」

誰に言うわけでもない。彼が、彼自身に納得させるために、そう独り言を呟いた。

「これより、ジオン・コンティニュー・オペレーション改め、シヤア・コンティニュー・オペレーションを開始する」

手術が終わり、扉が開いた。クシナは真つ先に台に飛びついてタロの姿を見ると、そこに寝ていたのは全身をガーゼにくるまれ、タロとはわからない姿だった。

「タロ……タロおっ！」

「彼に触るな！」カーン・ジュニアは半ば乱暴にクシナを引きはがした。「今は一刻を争う状況です、経過を見るためにもこのまましばらく隔離します」

≠

それから3日が経ち、両軍の負傷兵を含む生存者たちの中で、地球圏への帰路につく者も出始めていた。

「メモリー・クローン0号の様子は？」

カーン・ジュニアは、かつて兄の部下であった男を従えていた。「非常に安定してきています。そろそろ隔離を解除してもよいかと思われまます」

「そうか……念のため後二日は様子を見る。あなたもそろそろ帰り支度をするといい」

「えっ……？」彼は面を食らっていた。

「ビゲンゾンさん……あなた、ご家族は？」

「え、ええ…妻と、10歳になる息子がいます」

彼はカーン・ジュニア、ましてやワインスタイン兄弟から見れば遥かに年上なのだが、どこか頼りなきを感じる男であった。

「そうですか…こんなことに付き合わせるべきではなかった。本当に…申し訳ない」

カーン・ジュニアは涙ぐみ、声を僅かに震わせていた。

「い、いえ…これも仕事ですから。そう言えばワインスタイン卿はどちらに？」

「彼は死んだ」

「そうですか…それは残念です」

「そうでもないさ」カーン・ジュニアはどこか遠くを眺めていた。

「さて、あとは私一人でやる。君たちは好きにするといい」

「では、皆にそう伝えてきます。あつ」

「どうした？」

「私達の持っている研究資料はどうしましょう？」ニュータイプに関する様々な資料のコピーが、彼らの手元に残っていた。

「ああ、それは…」破棄を命じようとしたが、彼の勘がそれを止めた。「各自持ち帰って厳重に保管しろ」

「いいんですか？重要な資料なのは…」

「構わん。ここに閉じ込めておくより将来花を咲かす種子になるかもしれないからな」

「そうですか、息子には見つからないようにしないとなあ」彼はハハッと表情を緩ませ「では、失礼いたします」踵を返して、解散の意を伝えるに歩き出した。

「…さて」カーン・ジュニアには、まだやらなければならぬ
≠
いことが山積みだった。

戦いが終わって5日が経ち、ジョブ・ジョンはオスカ、マーカーと共に生き残ったクルーを居住ブロックのとある一区画へ招集していた。5日もあれば基地内のことはある程度は把握できるものだと彼は実感する。

「グラン、クシナ、よく帰って来てくれた」

出撃して無事に帰ってきたのはこの二人だけであり、整備班のフィアが小さい体を震わせていた。

「残念ながら、全員は集まる事は出来なかった・・・臨時とはいえ：艦長として最後の最後で何もできなかったのが悔しい」

それは艦長としてではなく、一人間として、ジョブ・ジョンとしての素直な言葉だった。

「俺は現時点で、艦長の座を降りる。ブライトさんに何て言われるかわかんないけど・・・」

彼は、一年戦争の時に、今の彼よりも若い年齢でホワイトベースを率いたブライト・ノアの偉大さを改めて感じていた。

「オスカとマーカもよくこんな俺についてきてくれた。本当にありがとう」

「そんなこと言わないでください」オスカは眼鏡をかけ直し「どんなときにも艦長の手となり足となる」

「それが俺たちの、役目ですから」マーカが言った。

「じゃあ“元”艦長さんよ」それまで黙っていたグランが口を開いた。「あなたの代わりは誰がやるんだ？」

「ああ、それは」

すると、小柄な女が彼らのもとに近づいてきた。

「地球圏までの間ですが、私がジョブ・ジョンさんの代理となって艦長を務めさせていただきます」

「3日前に知り合ってね、聞けば彼女も艦長をやっていたそうだし」「ゼーレーヴェ艦長キューベル・ポルシエです。よろしく願いします」

彼女の後ろには迫水とアルマ、そしてパトリシアがいた。

ジオンの軍服に身を包んだ彼女達の姿にわずかな戸惑いがあるものの、この5日間でそれは見慣れていた。

グランはその小柄な艦長よりも、その後ろの迫水に目がいった。「お前は・・・」

オリガを殺した機体から出てきた男だった。

「どうした、グラン」

「いや、なんでもねえ・・・ただの勘違いだ・・・」

「こちらも大事な人を失いました。ですが今はまず、地球圏へ戻るためにできることをやらなければいけません。どうか・・・お願いしますー!」

彼らの事情を知ってか知らずか、キューベルは頭を下げた。

「・・・辛いだろが、今は互いに協力し合わなきゃいけない時だ。地球圏へ戻る手はずを整えないといけない」

「ああ、わかってるよ」彼はひとり、オリガを思い出す。「なぐさめあつて何になるってわけでもないからな・・・それよりあんた、これからどうすんだ?」

「俺は本来はメカニックだからなあ」ジョブ・ジョンはちらりとキューベルを見て「彼女のおかげでアウターとかの設計図も手に入れたし、ちよつと気になる事があるからそこをあたってみるかな」「気になる?」

「戦略戦術研究所さ」

「そうか」

その時、彼らのもとにカーン・ジュニアが歩いてきた。正確に言えば、彼らのもとではなく、誰かを案内してここに来たのだが

「以上がここの居住ブロックだ。次は・・・」

彼の後ろにいる男の姿に、ジョブ・ジョンは見覚えがあった。「あの男・・・シャアじゃないか?」

「ええ、ダカール演説の映像ではあんな感じだったかと」

カーン・ジュニアとシャアらしき男が彼らを一瞥し通り過ぎて行くのと、キューベルが「誰...?今の・・・」と言った。

「誰って、シャア・アズナブルじゃ」

「そんなはずないわ、だって総帥は・・・木星圏に行ったんだから」「なんだって?!というか総帥って」

「プルさん・・・もしかして今のが・・・」

「ええ・・・きつとそうだと思います」パトリシアは「だって、あの人は・・・何も感じなかった」

「ど…どういうことですか…」

クシナが、シャアらしき人物を見ながらおそるおそる聞いた。

「なんていうか…まるで、魂がない…人形が歩いているみたいでした」とパトリシアがいうと、クシナは走り出して後を追った。

「ね、ねえっ!」

クシナが呼ぶと、カーン・ジュニアと男が振り向いた。

「タロ…なんですよ?そっすよ!」

「…」

「わ、わかってるんだから!」クシナがそう言っても、彼からの反応はなかった。「私の目はごまかせないよ!なんか事情があつてそうなたんでしょ?」

「…」

「いいよ、どんな姿になつたつてタロは」

「この女性は?」

「えっ…」

クシナに、虚無が押し寄せた。「な…なに言ってるの…」

「どこかでお会いしたかな?」

「え?じ、冗談だよね?冗談で言ってるんだよね?!そっすよ!」

「すまない、私は」

「タロ・アサティは…救えなかった」男が何かを言おうとした時、カーン・ジュニアが遮った。

「あの後容体が急変してね…こちらも全力を尽くしたんだが…」

「うそ…うそよ…嘘だと言ってよ!ねえっ!!」

「タロ・アサティは死んだ」

彼は無情にもクシナを突き離れた。

「クシナだよっ!思い出してよ!ねえっ!」

「さあ行くぞ0号」彼女の声を無視するように、カーン・ジュニアは男の背を押した。「今から向かう総統執務室がお前の部屋になる」

タロ・アサティは、どんなに顔が変わろうと、どんなに声が変わろうと、その目だけは変わっていないかった。それはただ、シャア・アズ

ナブルと同じ青い瞳をしていたに過ぎないが、クシナとのつながりを意味する唯一の糸だった。

しかし、その糸は無情にも断ち切られた。キューベル達は、その様子を彼女の背後から見届けていた。

「あいつ、裏切った……」

「タロのバカ……あんたがそんなんじやこの子はどうするのよ……」クシナは強がりを言うも

「うっ……うっ……」ペたんと地べたに力なく泣き崩れた。

カーン・ジュニアと0号が総統執務室に入ると、一人の男の姿があった。

「お待ちしておりました。おおっ!？」

シヤアにミネバの誘拐を、そしてカーン・ジュニアにアウターの密輸を依頼された男だった。「これはこれは……いやあ大佐そっくりですな」

「言っておくが、この事は口外するな」

「もちろんですとも、それが我々の仕事ですから。またお役にたてて光栄です」

「ジェノヴァ、君とはもしかしたら今回きりになるだろう」

「まあまあそんなことおっしやらず、頼みがありやいつでも頼まれますよ……で、今回のご用件は」

「これだ」

カーン・ジュニアは、兄からもらったクリスマスプレゼントの一部を、ジェノヴァに渡した。

「これをアナハイム・エレクトロニクスまで持って行ってくれ。既に手続きは完了している。君がこれを届け次第私に資金が振り込まれる。今回の謝礼はそこから出す」

「は、はあ……随分時間がかかりますがよろしいので?」

「その資料はまだここから漏らしていない。向こうも重要機密として扱いたいはずだ」

「確かに今のご時世、紙媒体ほど信用できるもんはありませんから

ねえ。承りました。では、失礼します」

「ああ、最後に一つだけいいか」

「もし次に依頼するとしたら、何かコードはあるか？」

「そうですねえ・・・ラムゼイ機関とでもしときましよう」

名もなき男が総統執務室を後にすると、カーン・ジュニアはやつと一仕事片付いたように椅子に座った。彼は、大量の札束をばらまいたような快感の中にいた。

「マスター、私は・・・何をすればよろしいのですか？」

メモリー・クローン0号が、一息ついたカーン・ジュニアに尋ねた。

「しばらくは地球圏に潜伏して動向を見る。そしてシャアの身に何かがあった時、それが貴様の出番だ。その頃にはシャアの記憶も馴染んでるだろう」

「そうですか」

「0号、さっきの女は誰だ？」

「・・・・・・・・忘れてしまいました」

「それでいい：今のお前には必要ない記憶だ」

「マスター」

「なんだ」

「私の名前は0号なのですか？」

「そうだな・・・その呼び名はやめにしよう。お前の名前は」

カーン・ジュニアは、偽りだけがあるこの空間で、『何をやっているんだろうか、私は』と思った。しかし、もはや引き返す場所も彼にはない。一度乗ったレールの行き先は変えられないのだ。

自分をマスターと呼ぶ記憶の消去された男の顔を見ると、ブラッド・ワインスタインは言った。

「フル・フロントナル、今のお前にふさわしい名だ」

運命の歯車が廻りはじめた。

エピソードグ ビギニング

宇宙世紀0093

木星圏から帰艦したシャア・アズナブルは、再編成したネオ・ジオンの総帥の地位に着き、地球連邦政府に宣戦を布告。シャアの反乱ともよばれる第二次ネオ・ジオン抗争を起し、彼は行方不明となった。そしてその3年後、シャアの記憶を引き継いだフル・フロンタルは、ジオン残党軍『袖付き』を率いてラプラスの箱を巡る抗争の末、死亡した。

この間に、ジョブ・ジョンの所属する戦略戦術研究所は海軍戦略研究所、サナリイに再編された。

彼はそこで、ユニコーン開発のためのUC計画の一端を担った功績を活かし、後にフォーミュラ計画に携わる事になる。

ちなみにその後のマイクロ・アーガマ、ゼーレーヴェクルーについて少し述べると

キューベルはジョブ・ジョンと家庭を築き、彼を支える。

グランはパトリシアに連れられオリガの故郷へと向かった。

フィアはジョブ・ジョンの紹介で、アナハイムエレクトロニクスへ入社。

アルマはネオ・ジオンの准士官として第二次ネオ・ジオン抗争に加わり、その後地球へ移住する。

オスカとマーカーは今もどこかで艦長の手となり足となつているのだろう。

宇宙世紀0100、ジオン共和国は自治権を放棄し、一つの時代が終わりを告げた。

ジオンの名は、歴史に刻まれるのみとなった。

これと共に、シャア・コンティニュー・オペレーションはブラッド・ワインスタインの手によって、永久凍結されることになった。

しかし、人々からジオンの名が忘れ去られたころ、いつ誰かがそれを掘り返してしまうかもしれない。

もしそうだととしても、それは遠い未来の話である。今はまだ、深く考えても仕方がない。

「アベニール！ソーラくんが来てるわよ！早く支度しなさい！」
「ええっ!?ちよつと待ってよお！」

「つたく、ナユタはしっかりしてるのになあ〜」
「俺に似てのんびり屋なんだよ」

時刻は朝8時、子供は学校に行く時間である。弟のナユタは一足先に学校へ向かったようだ。

テレビでは、ジオン共和国の自治権放棄に伴った特集をやっていた。《では、本日は戦災地復興の第一線に立たれているアルフレッド氏にお話を伺ってみたいと…》

「あれ？この人」クシナがテレビに映った人物を見て言う

「ん？知り合い？」と迫水が言った。

「前にどっかであったような気がするんだけど…でもどこだったかなあ…てか、あんた時間はまだいいの？」

「ん？ああ、今日は遅いんだ」

彼は相も変わらず昼行燈のようにのんびりとしている。

玄関から、娘の「行ってきまーす！」という声が響いた。「いつてらっしやーい！」

「しかしあいつも色気づいてきたなあ」

「もう中学生だもの」

「なあ、アベニールってなんて意味だっけ？」

「えっ？」

「ナユタは俺と一緒に決めただけどアベニールは…クシナ一人で決めたからさ」

「…フランス語で未来って意味なの。それに、決めたのは私ひとりじゃないよ」

「そうか…いい名前だな」

「あの子には…未来を生きてほしいから」

『ああ、そうだね』

「えっ？」

「ん？どうした」

「ううん、なんでもない！」

そして――

人が、宇宙にスペースコロニーという名の島を浮かべ、2000年の時が流れた

その中で、いくつかの戦争が起こった

それは、青き水の星を守るための戦いだった

星々の瞬きの中で、人は憎しみ、傷付き、倒れ、だが愛することも忘れなかった

多くの血が流れ、多くの悲しみが生まれ

死んでいった者たちの魂が、宇宙のしじまを彷徨い

光となって銀河に溶け込んでいった

膨大無辺な宇宙で、すべての人の思いをのみこみ

悠久の時を刻み続け

水の星が輝きを失い

人々の祈りが嘆きの吐息に変わるとき

一つの魂が刻を超えた

それは、人が目覚める魁であつたかもしれない